

里見八犬傳

第六輯

卷一



特別

^13

4304

6



八13
4304
6

八犬傳第六輯有序

善齋堂

響齋文庫

予所著八犬傳一書。以煠夕冬夜。戲墨。曩
謬為書賈山青堂。亦刊布。雖未足使措價
踊貴。而於書賈頗有贏餘焉。且暮以此為
搖錢樹云。自是之後。屢續稿。而至第五輯。
時山青堂耽於他事。乃不果。俛仰之間。光
陰荏苒。越歷四五年矣。今茲書肆涌泉堂。
購得前書。剞版。又揣刻。一日令山青堂為

八犬傳六輯卷一

涌泉堂

八代傳六輯卷一
从告諸予乞代續梓。誅求數四。得得不已。多爲其言有理。漫然領之。將創餘稿。以充銷夏之料。然無有宿構也。偶其所。皆忘之矣。因沈吟構思。然後費燈油者。每夜一二盞。漸費至一二斗。則稿了一卷。亦費迨斗許之夜。稿了者。總五卷。其多五卷。措數最多。遂釐之以爲二本。編纂共六本。手稿竟完矣。輒授之于涌泉堂。以登於梨棗。其

書畫二工。依故出像。則柳溪二子。所畫洋書。乃田谷兩筆錄之。閱五六月。而書畫盡成。嗚呼。涌泉堂性太急。自克促工。而無虛日。及刷人告成。又乞類予之自序於簡端。業在倉卒際。不遑含毫。且回思。即便述本。輯稍久而出世。趣代序。以塞其責。

文政九年菊月中。澣書于著作堂。兩牕。

曲亭蟬史



南總里見八犬傳第六輯總目錄

本輯全六本
終六十一回

卷 壹

第五十一回
兵燹燒山走五彦
鬼燐助馬導兩孀

卷 貳

第五十二回
高屋暇悖順搏野豬
朝谷村舩虫贈古管

卷 參

第五十三回
烟上諺捕犬田
馬加竊奪舩虫

卷 肆

第五十四回
常武疑囚一大士
品七漫話說奸臣

卷 伍

第五十五回
馬大記聯言途窮籠山
粟飯原滅族里遺犬坂

三

第五十六回
且開野歌舞暗遺欵兒
小文吾諷諫高論舟水

卷 四

第五十七回
對牛樓毛野麀雙
墨田河文吾逐舩

卷 五

第五十八回
窮厄初解轉遭故人
老實續主家報舊憂

卷 六

第五十九回
京鎌倉二大士憶念四友
下毛州赤岩庚申山紀事

卷 七

第六十回
胎內寶現八射妖怪
申山窟冤鬼託髑髏

卷 八

第六十一回
敲柴門離衣訴冤枉
辨故事禮儀告薄命

總目錄終

八犬傳六輯卷一

清泉堂藏



馬加々弥五

千葉ちり胤

袖角九念三

甲井貞九郎

坂田金平太

海田助友

鈴子

渡部綱平

古部せき多

いふ死

犬坂毛野胤智

五
三

四
念

女
田
樂
時
野

五
三

たまへ

若黒金上

あふ品

中
の
世
長

細上詰路五郎

三
葉
銀
吾

はらわ尻の逆四郎

八代傳六郎卷一

涌泉堂藏

馬加^ト大^ト記^ト常^ト武^ト
一^ト所^ト圖^ト壯^ト年^ト之^ト像^ト也

伎似賢者
巧感衆愚
砥硤混玉
懼紫奪朱

卷四

粟飯原首座度

清泉



笠^ト山^ト逸^ト東^ト大^ト縁^ト連^ト

古^ト之^ト海^ト之^ト舟^ト也^ト
法^トの^トり^トま^トち^トぬ^ト

母^ト之^ト別^ト
之^ト所^ト也^ト
乃^ト松^ト魚^ト
人^ト之^ト碑^ト
以^ト名^ト

卷五

船^ト虫^ト

清泉





豔而節操
命薄情篤
劈身仆簪
返壁座玉



おのゝりを
あまのこ
まのこ
水
沼
せ

坊賈之捷利素其所也。而猶有甚焉者。若拙著常世物語。三國一夜物語。二書其刻版係于丙寅之燬。或為烏有。或亡其半。曩一賈豎補刻常語之闕。又翻刻一夜語。然不告諸予。予乞校訂。擅改易常語書名及出像。而今是如新著。是以多不與舊本同。加之其文誤衍亦多。拙劣不遑毛舉也。初予不知之。客歲涌泉堂購得常語補刻之梓。而乞予校訂。於是予駭嘆久之。無所漏憤。譬如汚衣之油。屢洗乃耗本色。迨今又莫奈之何。且也一夜語翻刻。雖未得見新刷。而推思之。則亦不與舊版同可知也。願廿餘年前。戲墨。吾豈敢懸念耶。但見賣名之憾。不得無言也。因贅數行於簡端餘楮。 曲亭主人再識

南總里見八犬傳第六輯卷之一

東都 曲亭主人 編次



第五十一回 兵孫火山を焼く五彦と走らす 鬼燐馬を助て兩婿と導く

再說上野國甘樂郡荒芽山。道節主後。隱宅。白井の城兵既。不。程遠。寄。及。借平音。道節。小。五。大。士。延。為。支。婦。寄。防。留。戰。没。七。存。一。由。手。單。節。共。侶。死。決。五。大。士。後。送。小。諫。め。争。言。果。へ。ら。も。わ。道。節。頻。佳。燥。世。四。郎。音。必。死。の。覚。期。皆。是。忠。義。為。中。志。視。餘。彼。大。敵。を。老。丈。婦。水。御。げ。の。柱。も。死。況。由。手。單。節。小。愁。小。退。之。死。益。大。山。道。節。命。老。弱。男。女。送。脱。去。後。敵。の。ハ

恥亦これほどある。さうしては連落もいふも後々も。よきうれ亦思念の。世田郎音音のらふ籠とてまはるく寄る敵と禦け吾們の七八反背門の山邊に退れて。樹下暗に彼方より不意に起る横より敵の左右を撃崩さ。這奴亦必度を失て。躬方伏兵あり。當下逃る敵兵を。程追捨。僉共保。他郷に避く時を俟。只今死するまはる。論。左右を乞と。信乃莊助現。八小文吾。齊一。鳴。統得。理。極め。妙。敵。は。雑兵を。人。數。捕。て。死。さ。る。も。階。侯。の。珠。を。て。雀。を。弾。く。異。形。匹。夫。の。勇。い。え。る。を。と。道。節。悦。び。け。先。の。奔。走。不。便。と。馬。を。乘。り。入。嚮。の。謀。合。せ。て。渠。を。左。の。右。も。大。田。ぬ。煩。さ。よ。來。去。を。相。謀。ひ。て。燒。雪。天。婦。り。共。行。德。へ。還。る。と。憑。む。小。文。吾。は。ぬ。ま。の。あ。ら。は。せ。と。乘。ら。ば。と。縁。頼。へ。馬。の。鼻。つ。牽。く。曳。く。單。節。合。

草。落。ぬ。為。ゆ。と。絆。り。て。わ。ら。ち。林。と。か。ま。く。一。町。を。牽。退。け。樹。林。に。上。り。來。る。敵。ま。り。常。葉。の。老。夫。婦。借。平。音。音。へ。今。ゆ。争。ひ。難。く。燒。草。と。家。の。内。外。を。積。寄。せ。投。入。と。案。山。子。ね。の。圓。竹。も。俄。頃。准。備。の。細。竹。の。征。箭。伐。盡。し。推。つ。る。宿。の。左。廂。遣。戸。障。子。を。指。す。の。要。時。は。隱。こ。の。を。そ。い。て。必。死。の。覚。期。を。哀。ま。斯。有。程。道。節。信。乃。現。莊。助。亦。背。門。の。山。邊。に。退。れ。小。文。吾。共。侶。露。深。茅。萱。の。中。に。埋。伏。れ。敵。の。遅。と。俟。程。推。寄。來。つ。討。て。軍。兵。極。実。の。孤。屋。と。稻。廚。の。中。に。捕。卷。て。咄。と。陽。の。声。早。雄。の。兵。平。亦。走。入。と。して。庭。の。折。戸。を。殺。梟。る。三。宝。平。駄。一。が。首。級。を。忽。地。鬼。胎。と。抱。死。け。左。右。を。進。め。當。下。大。將。巨。田。助。友。柴。の。戸。挾。と。馬。兼。駐。を。大。山。道。節。亦。何。処。不。在。の。嚮。の。同。類。の。援。も。不。思。議。に。網。を。漏。れ。と。一。味。の。奴。原。共。侶。の。処。を。疎。れ。を。密。訴。ゆ。之。定。不。知。り。斯。勢。を。捕。籠。る。の。助。友。と。認。違。れ。名。告。ら。ば。之。も。

八代、傳、下、屏、卷、一、九、捕、取、重、藏

膽を徹して本復へ豫てまつたかき窮るる身の命運今も龍の鳥檻の獸異るむ
 松風の外に志のさるけり助友焦燥で塵を揚蓬に敵の逃足も武士の他法もいふごとそ
 足ひ益の同答もあらず踏込に討捕まると列下知先隊の雑兵はゆると蒼も
 ぬも群を競う竹縁と踏落ゆれ先よと走り入ると程は箭来を護る姥
 雪夫婦前近く敵を引よと障子隔亮の間より差詰り詰射を征箭の裏鉄
 せとせと先に進む五七人矢庭を射倒され枕を臥すはと馬の三勢
 辟易し人をも小盾を拍揮るる色め敵も息も吐せむ隙を隙を弦音は伴箭
 らげれば撥とたの引板の鳴子の群雀箱の穂さる風騒だほ返せむと果
 づものゆられの助友眼を睜らしていひひさるの共さるものへ箭は何でか怕
 るこそあわぬ退る進めと罵る声をわらふ箭前なたらと破障子遣戸踉

放ち踏推く擬勢も有繫雑兵の鉄劍頭衝棒十手得物々々とうち振く
 ぬまひ進む程もあせむ借平音音の既さる矢種も射盡しうけられぬまひ
 雑刀朴刀を腋夾み抜歌ゆ物陰より頭れ出る對の身甲腕鎧脚着老木の
 松は蘿蔓の打扮も子代勇氣と示す軍の宏言夫婦齊一声ゆりあせむ
 物々死捕まの天勢これ雑兵の所要も大将の誰を助友欣進とつとふとあせむ
 萬夫も敵を道節ゆゆ寄るの寄るの怕れ逃隠せしあせむ時ゆりあせむ
 後ゆりあせむ義兵と起さる同盟の勇士と俱々今朝を他郷に赴かぬのゆりあせむ
 りれを誰とさる大山殿の譜第の老童姥雪と四郎一名借平老妻音音共
 侶は汝と俟と入ゆらと討捕てあせむ果む細入る雑兵はあせむ
 老惚ホゴうる主と延えんとく死はわの夏虫の火虫に似る白物之物るゆりあせむ
 彼奴も捕捕らむと逃せむと勢あ誇る侶擬勢前後左右小聞を較むと競ふと

稽平音音（おきひらね）右（みぎ）小受流（こせりゅう）も刃（や）の牙（を）も覚知（しる）のり裡（うち）近（ぢか）く敵（てき）と研（けん）休（やす）も電光石火（でんこうせき）の
 大刀風（おほやぶ）も老樹（らうじゆ）と侮（おご）りてわづら嵐（あらし）の木葉（きのは）武者（むしゃ）者（も）帯（おび）をさるる外面（おもて）の助友（すけとも）もく
 焦燥（せうそう）と蓬（よもぎ）進（ま）めと鞍（くら）壺（か）敲（たた）くる馬（うま）線（せん）入（い）る後陣（ごじん）の大勢（おほせい）噓（う）死（し）叫（こ）ぶ攻（く）著（しやく）々々
 火水（ひみづ）よまれと接（く）けられ水石（みづいし）よぬ老夫婦（らふふ）心（こころ）をうら早（はや）れどもこれ彼共（かれども）も肩（かた）ぬ
 秋（あき）の河津（かづ）の丹楓（にほん）も八入（やち）は流（なが）る鮮血（せんけつ）のこれるお今（いま）かうととらまはん且（かつ）戦（いくさ）ひ且
 退（ひ）りて家（いえ）を火（ひ）を被（ひ）猛火（もうか）の中（ちゆう）身（み）を焼（や）てと豫（よ）る覚期（かく）も心（こころ）をゆるまのう人
 曳（ひ）くも單節（だんせつ）のいふふも四（よ）犬（いぬ）士（し）共（ども）供（た）の隙（ひま）は落（お）ちぬとといふやえよ若（わか）く碎（くだ）る谷水（やみづ）
 よも堀（ほり）苗（な）も一（ひと）勢（せい）の刀尖（やぶ）受流（うせりゅう）一（ひと）又（また）うけ流（なが）る刀（や）の筋（すぢ）とさるるまてよるほの透（す）せ
 ぬきける（ぬ）か（か）れは又（また）道節（だうせつ）ハ信（しん）乃（の）莊（しやう）助（すけ）現（げん）ハ小文（せうぶん）吾（われ）共（ども）侶（り）の家（いえ）を離（はな）
 ると八（や）反（はん）むり聞（き）戦（いくさ）陣（じん）もるん時（とき）歎（なげ）の左右（さうじゆう）を龍（りゆう）共（ども）とく茅（ち）萱（せん）の中（ちゆう）埋（う）伏（ふ）れく
 丘（かみ）七（なな）の圖（ず）を俟（まち）程（ほど）は既（すで）中（ちゆう）と母屋（ははや）のくま寄（よ）りぬの賜（たま）る奥（おく）の声（こゑ）松（まつ）は御（ご）音（ね）しと前（まへ）叫（こゑ）
 大刀音漸（おほやぶね）々々（々々）最（さい）も急（いそ）迫（せま）く時（とき）ととられととて抗（か）て示（し）せり領（りやう）く四（よ）矢
 士（し）も彼此（たがひ）草（くさ）推（お）分（わ）くもや立（た）ちぬ身（み）輕（かろ）の打（う）扮（ぼん）四人（にん）左右（さうじゆう）より立（た）ちぬれ樹（き）間
 立（た）ちぬれ背（せ）門（もん）邊（へ）より不（ふ）意（い）を敷（敷）もる程（ほど）ももていふも二百（にひゃく）歩（ぽ）は過（す）ぎぬとてひりけ
 る岨（すゑ）蔭（かげ）より顯（あ）きぬる一（ひと）隊（たい）の軍兵（ぐんべい）忽（たち）地（ち）路（ろ）を要（よ）りて先（ま）進（ま）り一（ひと）箇（こ）の大將（だいてう）
 萌葱（もそう）威（い）の身（み）甲（か）は皂毛（そうぼう）織（お）の陣羽（じんう）折（お）十（じゆう）王頭（おうだう）の脚（か）指（さ）小紫（せうむら）金（きん）作（さく）の大刀（おほやぶ）端（たん）長（ちやう）横（ごう）
 佩（ひ）て杖（つゑ）死（し）立（た）立（た）声（こゑ）高（たか）や小患（せうわん）る大山（おほやま）道（みち）節（せつ）汝（なんぢ）亦（また）存（ぞん）も株（かぶ）と守（まも）りくもあも高（たか）兵（へい）
 行（い）く然（しか）然（しか）と走りぬるものと豫（よ）る謀（ま）り案（あ）小違（せ）りも射（や）方（かた）の三（さん）勢（せい）も比（ひ）まひ
 彼（かれ）九（こ）牛（う）の一（ひと）毛（もう）も（も）龍（りゆう）襲（しゆう）んと欲（ほ）むるともいふものありせん既（すで）もその機（き）を
 察（さ）したる巨田（きゆうでん）新（しん）六（ろく）郎（らう）助（すけ）友（とも）も在（あ）り敵（てき）もるも可（か）惜（しやく）勇士（ゆうし）ととありひりけ
 きのの免（めん）り先（せん）非（ひ）と悔（く）刃（や）と伏（ふ）せく降（くだ）参（さん）せの首（くび）を續（つ）せぬを猶（な）惑（まど）を攬（らん）る
 虎（こ）狼（ろう）の心（こころ）を改（か）めぬ此（こゝ）度（ど）ハ決（けつ）く免（めん）りぬとといふも果（は）も道（みち）節（せつ）ハひり真（ま）先（せん）も

八代傳六卷一

十一

八代傳六卷一

進む向ひく。怒まる声と海の波一扱の助友とささるれ汝も鱗の隻別ると敷を漏
 るるの穴透帳をび本支とせんむと罵りまら抜くも尖くうち振る刃を半輪の
 つらうとあつらふ。月秋氷秋影不添の四大士も亦相副けく共刃を目めめめ。敷んと進むを助友ら
 彼射く僵せと下知されれば左右は後許すの精兵齊一弓を弯固めく切く波せし
 糸箭前も怯まきまき去らぬ五大士の打落し破捨くよるや裏をのぞきけり。
 とどけ前計合期せし。今助友を討捕らまはし四郎音音を掻くよ由なく。自
 餘の端武者も目の被そと送ふ叫び激く矢石を犯ま奮撃も突戦面も揮くま
 駈散くま死を口一擧ふ極めくは勇士の大刀風四下を拂く。五大士一処よ
 聚ひく又五所よ立つるれ前よ顯れ後よ隠れく。秘術を竭く巻の母は血の涿
 鹿の野を浸し紅波の眉を流すまふ所斫けされる雑兵の死骸の算を乱まか
 如くきのふも倍ま五犬士ののりも烈した刀尖は崩れ立ちる癖され逃る助友は
 推著られて助友は疾まると透さ追撃も五犬士の背よ起係一隊の軍兵

中おも一人高く叫びて逆賊道節小且く等巨田新六郎助友とあり返せ
 返せと呼る声も五犬士齊一駈まら。後方を估とえ久れば。打扮の
 寄母の大將彼も助友ととも助友面影はよく肖り。それらあらぬ秋はまらふ
 逃る敵を追捨く近く敵は駈向ふ又引返も己前の助友隊勢を進めく
 先後より引夾くを攻めけり。時小母屋のく不當く。俄頃よ世渡る猛火の光よ
 秋の山風吹暴く火敵飛散り飛程を樹木を焦く草を焼く煙は堪へば
 敵も助友も別々まらまら頭の上は降る火華を拂ひのむく。周章大かこ
 るるのけり。この時ふも五犬士前後の敵は隔られく相距ると百歩二百歩
 岨の平らふ在り。或は崖の陰を火の道まらふのまれば。輒く聚合し由まけ
 れども思ひのむき。信義の心鬼天らち仰せく嗟嘆よの堪む憐む。姥雪夫婦ら

今も家火を破る共煙とるけん彼火の故俺們が田を解くも。死を脱する時わふ似るも亦是夫婦忠義よれ然るも存亡極む。母屋のふ近く焼迹なりともまぐり。どらの心意の一致と踏む路を水きも風いよく烈く。又も南へ巻て北は旋る音凄く沙磧と飛と山林過半焼つ。これ母屋へ赴くは五力士在る休也。一は取合合の。儻の火田單火牛の謀もこれあり。掉のて込手抗意と示る。とくと招け招く繁甚某直も風小焼立られて。も散乱して彼此とまぐり犬士あり。同る隙る降かれ襟は袂は燃る。

拂ひ落しつ接滅とも。火遁の術をみぐる非とて今朝も破棄され甲斐。身ひと遁れ何かせん圍の解けて火小焼も。定めるく観念の外る。多うけれの要時め堪む右へまろ左小避く身狂へとも心火正く。うのりく賈納め村雨の大刀と。特陣の刀尖より瀆水気遠く散乱して百歩三百も。莊助ホッパの閃や火敵ま。君子これをえぬも火急の難義。向の壁言も似く思ふ。呼びくも刀を揮打ぬ。

生り。と勇立。後れて不えぬ小文吾を。あむ。嗚呼。と云ふ。待間も。中。芽
 山の。夫婦が。戦没の。迹の。煙と。立昇る。名残も。有。繫。惜。れて。身。の。浮。雲。の。草。枕
 翠の。甚。磨。る。旅。を。と。思。ひ。お。の。ろ。後。方。より。む。ら。り。路。を。兼。た。て。追。蒐。來。つ。る
 三箇の。助。友。の。隊。の。軍。兵。百。餘。人。も。く。鎗。を。引。提。て。返。せ。戻。せ。と。呼。か。け。り。
 四。犬。士。を。え。ん。く。く。小。川。や。巨。田。が。輩。嚮。の。影。武。者。の。奇。兵。を。と。迷。て。撃。て。ん
 と。謀。り。る。智。叟。の。程。の。透。し。け。り。返。さ。さ。く。難。死。の。や。あ。る。其。処。に。退。を。と。罵。り。
 跳。蕩。く。按。地。と。撃。つ。四。口。の。刃。の。化。敷。も。く。先。に。進。み。雜。兵。四。五。名。或。は。鎗。を
 斫。折。ら。れ。或。は。腕。を。撃。つ。落。さ。さ。さ。く。逃。る。を。程。と。追。捨。る。路。を。と。け。ば。懲。ら。ま。す。
 又。む。く。と。追。つ。と。追。ひ。返。し。樹。下。は。陰。不。知。案。内。の。深。山。路。も。多。勢。と。挑。む。再
 度。の。窮。厄。且。戦。ひ。且。走。る。岨。邊。岐。路。嫌。ひ。む。往。方。定。め。ぬ。四。犬。士。の。別。々。小。き。り。に
 けり。さ。ほ。程。小。大。田。小。文。吾。悖。順。の。曩。小。母。屋。の。餘。炎。も。よ。り。て。敵。の。圍。を。脱。れ。死。

ひ。り。ひ。り。と。吹。風。の。吹。暴。く。火。敵。満。山。を。焼。ん。と。勢。力。は。定。ま。り。然。る。と
 つ。か。預。り。る。曳。舟。單。節。を。合。鞍。に。乗。し。る。傍。に。彼。首。を。樹。蔭。に。馬。を。擊。死。置
 し。今。ま。の。樹。は。火。の。移。ら。ず。馬。を。喪。つ。る。と。彼。鞍。壺。の。著。る。著。る。姉。妹。も
 亦。い。ふ。と。猛。火。は。必。死。を。脱。る。死。幸。ひ。し。と。彼。方。へ。火。の。ま。移。ら。せ。と。覺。る。小
 かの。火。を。脱。る。と。も。敵。の。お。小。擒。と。る。後。悔。其。処。に。あ。ら。ぬ。と。あ。ら。ぬ。と。吐。き
 同。腹。は。答。へ。い。ち。ち。を。燃。る。小。草。を。踏。越。飛。越。辛。く。と。の。樹。の。ほ。り。近。つ。ま。ふ
 前。面。を。あ。ら。寄。舟。の。雜。兵。兩。三。名。を。曳。舟。に。出。し。と。あ。ら。奇。化。負。む。と
 擊。死。する。馬。の。絆。を取。ん。と。前。後。を。其。処。に。争。ひ。けり。け。り。も。曳。舟。單。節。亦。あ
 多。勢。と。あ。ら。敵。の。物。音。母。屋。の。猛。火。は。山。路。の。延。焼。か。つ。男。姑。も。故。主。も。亦
 彼。友。人。も。脱。れ。と。や。と。せ。ら。ん。む。ら。り。巷。小。も。あ。く。も。と。の。み。お。く。も。落。ぬ。為。ふ
 と。勅。小。幾。重。の。か。著。ら。れ。その。麻。索。の。浅。ま。く。釋。ぬ。ら。ら。ぬ。の。ま。あ。ら。く。

煙は狂ひ樹を遠る馬の頻頻嘶々前脚高く幾遍とさ。跳揚れはいつく鞍
 安らぬ妖婦只眼眩れ胃淡れ吐嗟々々と叫ぶ。林のうも軟弱々々と馬より
 先は疲芳果く心地死ぬべう鞍壺をて終甲の俯を折く。寄の雑兵西三名
 煙を犯し走り來の馬の絆はまを被れ曳の單節は又ゆら不獵場の野鷄の
 箭よひみ雁鳥を寄るあちちと吐嗟とたりり共は頭を擡る程もれ小文吾の
 只飛が如く走り近づく大喝一声左より立る一箇の敵どばをむんと破せし
 残る兩兵の放馬は見えぬ大刀を抜翳して前後奔一小文吾と敵を急ぎ追速く
 閃りと翻き身を沈み外せ狂刃と刃寬の前羽をまも馬の絆を破と所は
 断られて馬の同胞を棄せざるは衝と脱く走る蹄の音高く東よりてを放れや
 ありくひよとろり小駭をぐる小文吾も又この敵の雜兵亦も不ぬるはれ今ゆふ
 牽駐る小暇る房く撃の二箇の大刀音小文吾のあやもゆらぬ心頻り井可立

また奮勇は倍半倍して又一人を破倒し海踏進る内めり大刀の下小駭する
 敵の首の急地前小落く軀の仰反付るとるもせ放れ馬の迹を急ぎ追
 程は荒莽山の麓路の近郊の野武士七名響は白井の寄るもが典の声を
 づより落人を剥畧んを東の巷小聚會をり。浩気は放ち馬の両箇の女
 子を乗しる依よのさささとして馳來ると遙ゆうちを竊ふ勢ひ衆皆前路に立
 塞りく鉤索竹槍桿棒まどち合し柵めく捕駐んとする。小馬の頻
 りも考狂ひく人をも播埒をも衝破る勢ひ尋常るされば準備忽地相
 違くと迫つめれ切齒仆され或の蹴られ蹂躪られ矢庭に死するもの一兩人半
 死半生するものも二四人及びりど。さ肩その恙るさうの絶は二人のさるりりはれ
 とも不敵の奴原され一人曹は著る。小筒の鳥銃取むけ火蓋を断る
 撞と放せはや二十四間隔る馬の肛門のゆり。強梁をけく打板を



落人を奇
 貨とく
 のや
 野武士等
 放馬と撃つ

八
 初
 傳
 八
 車
 卷
 一

十六
 川
 良
 堂
 藏

八
 初
 傳
 八
 車
 卷
 一

川
 良
 堂
 藏

両箇の主と乗る依は四足と折を伏せりける。さあそこをわき彼女子ホと過ぬ
 せと鳥銃投捨れ彼槍を引提く走りぬと折る怪む。西園の陰火
 何処とぬく囚死來く伏る馬の頭の邊は遠留るとする程は馬の勃良と起
 わる。體戦あつ馳るとすめめ馳りぬとわかれと隙は往方も
 あらざるあり有り余程小文吾の稍る邊は追蒐事の遙小馬の敷れ
 形勢陰火の奇特も目青をのみ管駑馬嘆く馬の往方を知らんとあり。の
 喘だくまると足音の呆れく立る両箇の野武士齊一後方とるなり。わりの
 彼奴も落人の馬共侶は追來せり。女代り物せむと長く間も暴奪略忽
 地路を要る多く槍を括く突懸るを。さうゆると小文吾は左も槍頭を握り
 留引抜く刀の右もる槍の真中丁と砍落も本直は駭く野武士ホの槍投捨て
 左右より利腕を捕て身と組む小文吾駭く氣色もる。左も取る。刀を

衝て立る依は一推搥する角瓶の秘決費を括て揮解は後倚く項と雙のよ
 搦獲と又引よと頭と頭と兩三遍撲合さる。堪難て苦と叫ぶ声のろ共
 足空さる小差揚て地上へ控と拘見放下臂小似る風下へ籠落の野武士
 せらぬ小累り伏く石の鼻つら株を頷う。のり夢秋とをり小苦痛不堪を
 蠢だく起んとる。小文吾の骨鬼の輪大刀風は一葉の露の玉櫛筒ゆり
 身と四とある。積る兇惡のむくひまはけん天の細七重を風吹くふふ
 天引く遠煙百千の團も萬みる火宅をた悟る。わを知らぬ量劫數盡
 されぬ煩悩の俺中も狂小意馬心猿の骨の勒と取留て曳草節が存亡も
 往方も定ぬる。憂る小身の疲勞を志草路の秋草踏る。の
 索むく。士心の誠比る。犬とわの數十日は近地ぬ。月の筆は載てん
 是に惟義忠信礼智孝悌を磨あける玉ふ。わのわを疎幽のりけり。

第五十二回

高屋驪は悽順野緒を搏せ
朝谷村は船虫古管を贈る

却説大田小文吾悽順の途に野武士を斫棄しより只管馬の迹を逐て東を
望み走る程ふその日も佩る暮りけり。昨鬼通宵今鳥終日或は數百の大敵と
鏢を削りし又幾里の道を走りく索る人は遭ぬ憾もなき身もいとほしう疲勞
なり。あつ何処と里人は言問へども葉をたりの冬青の株に尻うちりて獨情
あり。今朝も荒茅山の閉戦は兵火彼山の土毛を焦しく敵の田の解
時豫て契りしゆわれが犬山大塚ホの人々の山うち越て西の方信濃路へも走り
けり。然るに放き馬も走りし東道の程より走るも八九里致るも十里ゆも
及ぶ。わらうんかきまて勞し七功もきく友別れて又ゆく。予預りる曳の單節と
その甲斐もるく喪めてり。ゆやこの後道節ホは環の日の退くもともされ又何の
面目の信の義の人のとせられん。嗚呼是非も何とせん。のちま。とを
又々瞻仰る天の夕月夜曇る影胸狭く西奔ぬ心の迷ひて思ふれと夕を
責む。あひくらの尋念をなす。嚮は彼馬の馳たるを野武士の鳥銃を撃れよ。
いも怪し先物その何と人預りし馬の忽地身を起して復奔ると並前の如く。
駿足を十倍と往方も知らざる。一件の親子夫婦の義烈を神明
佛院の憐れを祐めよ。のんむん。如此有人あけの道もとも恙あらんとせども。
然とて。止む。あは。あら。露宿をせん。還て人お怪しめられん。一椀の
糧一夜の宿を求めると。吐裏の處分既決りければ。樹下と立出て。白
屋の宿投りし形。夜を曉りけり。されば。又小文吾の次の日。旦末明。旅宿を出て。
前路々の或の旅客里人ホは馬の往方を外めり。これ彼とき。諮る。絶て便
宜と。望を失ひ。且疑ひ。且陪。只管涉獵あま。と。名。二日。四日。

るのくさるとも知らず武蔵の浅草寺に程近の高屋阿佐谷の村間なる
田圃の隅を過ると秋の日は短くと下晡まきあけり當下小文吾のひまを斜に
推挙てむより四下を眺る新堀湯島神田の衆山高く西北に連りて樹木の葉の
まじりぬる夕日は彩る遠景観く宮戸隅田千住の長流南北の横りく細
引の声のひえぬとも早暮の業近村寂り向上を幾群の秋鳥雲入る
還るも直下廿千頃の稲田花を合て戦ぐの露の道其の手を磨死菊と
敷蔭に金と欺く人立音駭死飛ぶ虫の星とて鳴くと欲し紫山子小押く
かよ鹿の圃と暴く餓さるるも就死あまよるも皆是旅泊断腸の
嫌るるもよめれる。あの河ひら打渡とて下総國よりくつが舊里へ
遠くく忘れぬ前月廿四日の曉く大塚ホを送るとく市川より漕
出せり一兩日の行るといひののをあひまわ大川が窮厄より只殃危
の魚縁とけり還るるもいとく父もいとく姑も、大聖も蚤崎氏も
あつとくあつとく。さる待不樂のひけり大八ひより小慰とて益る老の諄
言より房八が縁由人よきれて又さふ。よめあつとくおの親お抱とて
まの定ふあつとく不孝の親戚交遊これ彼と約束の違へる信るは似たり
ゆりまきあつとくあつとく小翠の夙めく行徳へ還る情由と報死飲の多くこれ
影護く曳の単節が往方のまねとておのちと舊里へ立ちりく。と大山
る。とれやせん。と。三月二日新堀婦ホを索てもゆめり中山道とて
登りて大山大塚四箇の友と索く環會人日は緯如此々々と報て後親の安否を
問へま飲ひくこれ四箇の友の再會の日測る。と。進退谷のぬ死けん馬の再
生く奔走り奇特の有き。と。とて人よも遭りて他る日を送る。と。く人
をり守る。と。神も仏も。と。とて世教とてひつて夏虫のひとり。と。宿小婦は。

鳥越山の... 一條路の... 時入相の鐘... 昏... 前... 路傍の石の地蔵... 啞折く勢ひ... 深田へ避難... 野猪の... 程は小文五... 猪の耳と... 此れを聊弱...

... 野猪の... 儻小下立... 年を経... 暴虎馮河... カ益小立... 寝る宿... 一男の... 仁田山木綿... 紅銅造... 放さ... 百姓の悍...



八代将軍御
御車巻

八代将軍御
御車巻

川口
用良

川口
用良

絶つるあぞのんむらん幸ひよとて身を肩ぬよとせ生ることもめえしこれ角舐と好
 ろく素より撲傷の奇菜どりの撲れて氣絶せしものふりまき即切あををりく
 一日うとも身をもささげ舊里を出る日をも懐かきりいふ失り今うる海わらん
 用ひくまゝと遠く行旅を解披たぐのちとちと素より小件の某のきりけり捨
 服紗の内ゆるとそ又肌糸の財布ととうとて端引揚て揮ひ出せし嚮ふ登垂崎
 十一郎魚見殿の貳禄とく強く贈り一包包二十兩の沙金の先深々と
 生へこれを取て管笠を仰さぬよと入措たぬふひ財布とち揮ふ果
 しく件の奇菜も出たりをよれね小撮取りて踏仆る彼男の口の中へ入れんとほふ
 歯といふ咬締て閉へうものざれと腋挿の刀小附る并を抜とりてやうやく
 口を推開く某を送りて嘯く懐帟と推圓めく臂近る田の水小浸し
 口中小絞り入れ某を胃中へ推下してゆんとするふとの名を知らぬ只嘯を呼
 活る小且しく件の男の苦と嘯れて眼と瞬を鈍る直に刃を起しと忽地走
 去るとするど小文五口急は抱た縮めくやよ俟ぬいこのありこれの様もくはるが
 和殿の殘仆るえ過まよは忍ね齒様々々小抱せし甦生せれて本意は種
 へあつて和殿の老う野猪は掛られるのふるやこれ亦彼方ふく如此々々の野
 猪小のひぬ然れども怪我の功名を辛く撃つ疑ふ共侶は誘ひ死なせり
 とのりて救馬く件の男の鎧投捨て跪坐し原來を刃の再生の恩人ゆとせし
 既へ賢察せし如く某も先の程野猪小一鎧著しれども場所を也射しけん
 忽地鎧を振解れ勢ひ當るもわねの逃んとせしそれぞ懺を果敢て牙
 掛られて空さぬは投らるととびい後東西をも覚むて今やなぐりれ返り
 よりの又りや野猪は掛られんとせし足あふく狼狽し嗚呼とよれん今更し面目
 る免趣舎之刺苗のひ彼野猪の何処あるかと問ふ小文吾ら領た遠くものぞ

活る小且しく件の男の苦と嘯れて眼と瞬を鈍る直に刃を起しと忽地走
 去るとするど小文五口急は抱た縮めくやよ俟ぬいこのありこれの様もくはるが
 和殿の殘仆るえ過まよは忍ね齒様々々小抱せし甦生せれて本意は種
 へあつて和殿の老う野猪は掛られるのふるやこれ亦彼方ふく如此々々の野
 猪小のひぬ然れども怪我の功名を辛く撃つ疑ふ共侶は誘ひ死なせり
 とのりて救馬く件の男の鎧投捨て跪坐し原來を刃の再生の恩人ゆとせし
 既へ賢察せし如く某も先の程野猪小一鎧著しれども場所を也射しけん
 忽地鎧を振解れ勢ひ當るもわねの逃んとせしそれぞ懺を果敢て牙
 掛られて空さぬは投らるととびい後東西をも覚むて今やなぐりれ返り
 よりの又りや野猪は掛られんとせし足あふく狼狽し嗚呼とよれん今更し面目
 る免趣舎之刺苗のひ彼野猪の何処あるかと問ふ小文吾ら領た遠くものぞ

妻船虫之小文吾の先づ名を告ぐ縁頼丸うち拭き並四郎が野猪のこ
 今宵の宿りを許され緋の趣如此々々とその大なるを告知しと燧袋を中へ
 入まれば船虫の口より毎々或の故罵れ或の執事と云ひ子もまた泣き思ふを
 され齋小ぼる野猪ののむる所をぞと禁めりども聴か命の危うりを
 救ひひひ人さるるにいつか為中も城隍神へ先を告ぐと又登らせぬと
 忙しく鹽温湯を汲りてその草鞋を解し足濯ぎ座席へ行燈引提
 来て小文吾を上座へ推しめ今朝のつれづれの里を起すのむ里来ぬひる俗
 の盆の後前とに残る暑の堪えぬまをその疲勞をひけり行水の湯も沸して
 仰りあせりののゆるたども今夕饌をまゐらせ木枕もをきり足踏伸し
 休らひぬへ許の蚊の名とて刺さる跡の瘡もあつたを管待の蚊遣火
 のこ此懸影悒とも怖れぬといひいと大なる素焼の火盆と竹縁の湯の措く

團扇のてのたたき鹿角折置黒く又遠く夕を起し小文吾は浴させ
 夕饌を差する管待態の精悍く團扇を取て小文吾をうち扇せり
 給仕より果の中酒の盃を卿の意に醃取添て器物と鄙るぬ鄙めり宿
 るが女わづら小文吾の言葉もくく欺待のよろこびと述るの口つくと西下
 るふふの一間の外は物もく席薦の六枚なり布の上座の唐紙張の袋
 と小棚の紫竹の押縁ある葎葎天井の不破の閑屋の廂とて月の漏
 へた住ひぬぬと云ふれが出居のくは壁へ入るりのま落頼れ骨もく
 るるる俵のゆるり戸を推被て塞だりこの次の間の庖福と別は夜物弄を
 する納戸の丸の其処は夫婦の睡るるべし又女房船虫の年歳も二十の
 うへをさしめやまぬべし拍のひさま進止まきとら門男めたるはまき容
 白の醜きものも頭髻の堅まる結紮ね櫛の横さる挿光くく

曳の單條ひくひとよのきもゆつとゆひげと曉あけを俟まちバ小夜深こよふく稍さう膚寒ふかむく
 ちよ小横こよこを引被ひきかて寐ねもともちよ目睡めねけ人曾ひとぞち騒さわく放はなつた覺おぼれバ
 怪あやむ行燈あんどんの灯ひ滅きえて定さだりあえねども出居でいのころ壁かべの顔かほ推當おしあ戸との
 失うしくそらよ人のをど如ごと原來まごころ盜賊とうぞくとさされとどもも此こゝも騒さわくままく睡ね
 するやみ七横よたの衣衿えりより窺うかがひ果はく之こゝ彼首かへ入いりてりまま裡面うちああく
そのと死こぶんでけの當下あた小文吾こぶんごと今宵こんしやうのものをぬ幸さいは獨行ひとりと悔くれ殺ころし物ものと畧りやく
 らんとおの秋伎あきぎ倆りやうの程ほどいられり要せうせわれと深念あはれと先枕せんまくら方かたる腋挿わきさしの
 刀やいばと搔取かきとりて竊ひそか憫あはれ横よこの下したの行包ゆきづつみを引ひれて故ゆゑの如ごとく人の臥ふる
 ちよみ息いきと罷たふす志こゝろづらら致いたす袋戸棚ふくろとこの何なにとちなる壁かべを倚より伏ふしまて
 猶なほも動靜どうせいと定規ぢやうぎひなりさる程ほどは偷見ちゆうけんの件の壁かべの破隙やぶらより入いるとまま又退またひ死
 退ひたてい又進またすすむま數回かま狐疑こぎひひかま進すすみ入いりて又張またひを半响はんしやうなり疲つか

勞あはてあまま熟睡じゆくすいをまあまりま決けめめけけんん忽と地ち直躬ぢやくかうと立たちちりり速すみくく日光にかりと
 抜ぬける刃やいばの雷母らいぼ憫あはれ釣緒つりおとと断落つりおと一いつつ登のぼりり小横こよこの上うへより彼行包かのゆきづつみとまま
 刺さす刃やいばの光ひかりを目當めあたり小文吾こぶんご透とき跳はりり抜ぬくく鋭えいく丁ていと研とぎる刃やいばの下したに
 偷見ちゆうけんの首くびの礮げんと落おちちるる當下あた小文吾こぶんご声こゑ高たかくくよ内方うちかた起出おこりり偷見ちゆうけんと
 敷うちちゆゆ指燭さしそくとませせむむとまるる船虫ふねむしの心こゝろ口くち隠かくる声こゑをあくく狼狽ろうたい
 する狄出ていしゅても末すえのこ小文吾こぶんご頻ひんりり焦燥せうそうで内うちにに怕おそれれ感かんひひるる賊あしをあ既すでにに敷うちちゆゆ
 ちよ燈火とうかをとくと志こゝろをあくく吸あひひてて居ゐるる行燈あんどん引ひ提ひててままりり末すえのこ出居でいの紙戸しと
 中ちゆうゆゆ推胸おしむねとましし燈とうの光ひかりはは小文吾こぶんご敷うちちゆゆ落おちちるる彼偷見かのちゆうけんの首くびとまるる是則これすなは別わかりり
 ちよち並四郎なむしやうささりりけれればばちちいいりりとまるる呆おぼれれててぬぬびび辭ことばとまるるとまるる拱こま
 ちよちよち目成めぢやうの嘆息たんいきの外ほかささりりけれればば又また船虫ふねむしの行燈あんどん側かたまま置おききてて戸潜とひひ然しかちち
 泣なくくななくくほほひひええけけ頭かぶをあ擡あげげてて目めをあ拭ぬぐぐ喃なんかか客入きやくにん犬田いぬのぬぬししとまるるとまるる



八天傳六郎卷一

六

〇用家

小文吾

天
刺
五
地
小
金
元
残
賊
空

八天傳六郎卷一

〇用家

侍れども然も感も命の親も。おん身の寝頭と搦んと計り。天討親面報ひ
まき。還ておん身は敷かれし。せめての罪滅し。うめとつらひ。はるかに
ころは似れども。ころかおのむり。より。村長でゆり。三代前の祖の時身上の
衰く。口地も過半沽却。村の役義も人譲り。水飲まり。はり。とも。き。農
業の棄ま。ころ。か。親の男見。され。の。並四郎と塔中。の。む。二親の
世ふる人。と。ころ。より。本性。わ。る。を。良人の放蕩酒と賭。と。よ。昔川水。田
田圃みる。没却。く。生活。を。ま。も。され。だ。枝。柄。の。これ。彼。と。ころ。耳。入。る。こ
目。あ。る。目。も。ゆ。り。を。は。り。口。説。の。諫。れ。の。折。を。り。先。非。と。悔。て。あ。る。の。白。も。糠。は
釘。さ。ら。ぬ。夫。の。あ。ま。を。疎。ま。し。の。と。も。あ。へ。も。あ。ま。任。せ。ぬ。女。子。の。悲。い。は。ま。も。い。の
直らん。然と。基。ま。く。憑。む。久。後。の。の。の。知。ら。ぬ。月。と。日。を。け。り。ま。で。送。り。は。り。し。ま。あ。る
つ。の。比。や。ゆ。り。並。四。郎。の。潜。ま。り。北。月。門。の。こ。り。り。あ。ま。あ。ん。身。の。敷。の。油。金。あ。ま。し
其。死。告。る。ま。り。め。て。知。り。ぬ。れ。れ。も。受。ら。る。恩。の。人。を。殺。し。と。金。を。思。各。人。と。違。は。ぬ。心。の
わ。る。と。の。神。さ。ぬ。身。の。ゆ。も。あ。ま。く。心。緩。し。と。敷。妙。の。枕。を。く。睡。り。一。向。は。竊。小。臥
房。を。脱。出。く。事。の。あ。ま。及。ぶ。ま。ん。面。目。あ。や。と。今。ま。ま。返。る。と。を。繰。返。ま。涙。の
籠。の。と。せ。め。て。心。細。け。は。泣。沈。ぬ。小。文。吾。も。亦。嗟。嘆。ま。堪。む。か。と。あ。ま。の。薄。命
歎。な。殊。さ。り。理。り。ま。れ。も。今。の。く。遍。悔。む。と。甲。斐。ま。り。村。長。は。報。領。主。は。訴。へ。地
方。の。法。は。任。され。も。い。ま。船。虫。涙。を。収。め。く。を。勿。論。の。ゆ。ま。り。か。ひ。ら。の。願。の。り
家の先祖の鎌倉の北條家のむん時。名。の。武士。は。ゆ。り。と。も。その。後。子。孫。を。零
落。く。百。姓。ま。り。ゆ。り。か。ど。近。死。せ。ま。り。この。地方。の。村。長。で。ゆ。り。は。血。脈。の。あ。ま。招。塔。の
個。の。並。四。郎。が。故。を。り。て。先祖。の。名。を。汚。され。ん。の。と。朽。を。く。ゆ。り。か。ん。身。の。心。ひ。と。ら
り。今。宵。の。ゆ。り。を。人。は。あ。ま。せ。ぬ。翌。の。風。め。く。この。地方。を。立。放。れ。て。あ。ま。外。へ。洩。ま。り。も
る。天明。ぬ。程。は。菩提。所。を。よ。く。あ。り。て。村。中。へ。頭。死。と。告。ぐ。棺。と。お。ま。ん。悪。人。ま。れ。ども

所たるもの。また別の後で悪名を世に誣するも本意を願ふ如くするが。つま

つゝら頭髻を剪捨てははては親良人の善授を吊りて早晩1分の業因も減る。これらのよきを許して許しぬらぬ根りて悪く報へた許さ

多と死口説くと小文吾は頭を傾け親子の為は隠し子亦親の為は隠すも直死のあつた中よりのとき聖の教のよも知らねど先祖の為は良人の

悪名をせよ知させと願ふの現をあげる心操落涙まよ感心せりわれえぬ並四郎が亡骸の行包と刺留とを妻をを証人する願ひを聴くと

いひくつこれの素より人を索せいと忙々旅をまされこれらの許すのらひく日と費人の便をえ香華院に素引をそのものも相計ひ多しは船虫れ

しけ小文吾を伏拜てのる由恩を稟る未明よゆくも何の日か報ひとまきこれも本意をゆるぐ。おれ先祖相傳の尺八の竹を並四郎の度々

售らんとしひと推禁く家廟の下壇に秘藏せぬ。われを推して先商せこのひらけ納戸のなま敷の古金襴の袂は納る笛推す末小文吾がわら

さあまを受とりて細解ひたされ寒は古物とわがく長サ一尺八分なり黒漆は棒巻と吹ちる。ねのわりの音つれは秋の山里と一首の歌を

高時繪まゐる小文吾つづくこれをそくも亦いと奇なり尺八を好む。その虚僧尺八七長サ一尺八寸この笛亦異なり一尺八分なりと必古代の

一節切四五百年の物なり。の寶をのりて贈らると受られん。且旅され此の物も荷の倍まゝと難美之是の依収めと返まを取ら頭をち掉り推

辞めいゆるる。物腰は包の中よも何程の正教ゆる恩は恩美の恩人の重死情は控き一品の蔵めおとも譲ると女子もこれをも受られ。今さう心安らむ柱てけり。と唧々。薦めて已ね小文吾終

推辞してあつた再會せし日まであつたの依り預りあつたといふは船虫がひてゆくこと
 疑ひの霽りて心もちあつたといふ寺へ走りて来たこの亡骸といふせん棺を買はず
 片隅にあつたを措んとを掛れば小文吾も亦身を起して死骸を担て壁際へよせ
 蒲團をもち被さるる行包を引解て件の留を袂に巻きて又中結を絡て備さる
 をけりて向ふ船虫の裳引揚遠く緩き帯を締むる小窓細めを推開て天を
 眺て礮と盪喃を客星の光の高るるを暖るる尚程もゆるん菩提所まで十町は足らむ
 彼処で時を移さとも天明鳥の鳴く比史遅くも還るるべし曉るる珠き申夜も
 蚊の多くて廻り捨る程のむゆる樹のありも有るひき血塗れといふがせえ蚊遣火盆の
 彼首より鹿角もゆるる焚くは層々といひて背門のさる衝と出て菩提所へと
 走りけり畢竟船虫のあつたあつたといふ物語ある其の次の巻に解分せんと知らん
 里見八犬傳第六輯卷之一終

南總里見八犬傳第六輯卷之二

東都 曲亭主人編次

第五十三回 畑上諺々大田を捕ふ
 馬加竊は船虫を棄ふ

船虫の曉けく菩提所へと出て来たる由守は小文吾ひとりをり復らぬ悔も
 今わらふ過去への暇る野猪といひこの下とのひ人を替又物を替てりか刃を危く
 あつた今茲へいりる星さ出さるるをいへ厄難のやくまが角縁るりぬらんと
 だの猶も疑くむりてきたるゆゑのあつたあつた尋思をまるふは高屋の隙ゆく
 並四郎と故んとく撲傷の茶をいへり打唐著の財布より沙金包の先出を
 蔵ふ暇あつた笠の裡面は容措つ杖並四郎と呼活しふが撃殺せ彼野
 猪といふといれ共侶は世路へ還るる及び金と財布は収めくづりる懐は物

のを。彼奴ふの知れり。いふ。いふ。そのれ並四郎が陽火恩を復すと倡へく。
 己が宿所は誘引の殺し。金を奪んとく。斯以合され。彼奴の死。耦は
 旅客を殺し。路費を奪。累年。強盗。今宵。先。悪
 心の起。一。のれ。あ。の。造り。田舎備。む。
 け。を。修。復。り。戸。を。
 り。く。塞。死。む。昔。の。浅。草。の。枕。の。故。事。も。そ。ろ。芳。ら。ぬ。
 癖。者。あり。一。を。思。慮。の。足。ら。ず。と。誘。引。せ。り。伎。倆。の。強。は。係。れ。ん。と。せ。り。
 愚。心。さ。よ。の。時。の。一。睡。覚。む。毒。悪。の。身。死。ん。の。然。る。を。女。房。船。虫。の。良。ら。ぬ。
 夫。と。知。る。ら。ず。け。す。ま。ぐ。の。列。を。儘。せ。り。口。と。心。と。う。ら。う。入。め。く。只。己。の。之。惨。惻。
 氣。の。ひ。瞞。る。飲。量。の。一。縦。彼。船。虫。の。素。より。悪。心。な。の。め。り。と。も。出。処。正。
 一。た。證。拠。も。な。か。た。この。尺。八。を。い。ふ。一。受。納。む。死。の。あ。ら。ね。と。受。む。の。必。夫。の。

悪。直。と。人。の。や。生。り。と。疑。念。一。その。内。心。の。ま。れ。の。ま。れ。夫。の。あ。い。一。点。由。り。れ。よ。
 對。ひ。く。怨。を。述。ぶ。身。の。薄。命。と。ち。歎。れ。く。只。管。故。ひ。を。求。る。の。れ。を。控。せ。れ。を。
 ま。う。聽。び。て。告。訴。さ。る。状。と。今。い。ふ。疑。念。の。影。護。一。と。い。ひ。ふ。け。ま。ら。ぬ。
 さ。ま。げ。る。く。要。時。の。意。は。任。り。彼。女。房。の。つ。ら。ぬ。間。を。う。そ。め。れ。と。遠。く。
 又。行。包。を。解。披。せ。く。件。の。首。を。袋。の。俵。よ。出。し。て。四。下。を。う。ら。う。の。衝。と。身。を。起。し。て。
 伏。衣。戸。の。小。棚。の。裏。面。の。容。措。つ。ゆ。び。四。下。を。う。ら。う。の。縁。頬。る。蚊。遣。火。盆。の。
 握。太。形。の。樹。の。枝。の。一。尺。の。ま。り。燃。残。さ。し。と。れ。究。竟。と。取。わけ。く。灰。うち。拂。ひ。て。仍。
 袂。へ。の。ま。く。梵。と。卷。籠。く。故。の。如。く。包。い。て。さ。う。く。ま。る。程。よ。ま。ぬ。窓。の。隙。より
 ち。り。み。初。て。本。林。を。放。り。鳥。の。声。の。小。文。吾。の。縁。頬。る。雨。戸。を。半。開。縁。納。く。帶。
 締。直。の。臂。辺。に。笠。も。脚。絆。も。物。を。り。揃。て。船。虫。が。帰。る。を。今。款。々。と。待。
 程。よ。且。く。外。面。小。道。つ。く。人。の。足。音。を。れ。れ。と。あ。ま。果。く。違。つ。船。虫。遠。く。門。の。

戸開く進まのり大田中今更のけりぬ。さむねびくおのれけん。菩提所の首尾
よ死まよ。あう久済たりけむ。ゆけは後つる。枕廻向の所化を遣りんぞ亡骸を
疾棺に斂めく不覺人あなれぞ。住持の聖の宣ひゆれとらよ。小文吾領
たぐそちよくせせられ。驚中もひり。とるる。往方もあなぬ人を索ていと忙々
した旅をよまる。小後のひび。障りまゝの。おまの。依り立別きんわ。の横死の自
業自得悼と述より。もあなぬ。只痛し。たの。薄命一善一悪夫婦と
なり。も皆是過世の業報さ。た。た。人の為。身。の。お。仏。更。追。薦。肝。要。を。あ。香
魚。天。も。あ。ひ。ね。と。い。ひ。ひ。軀。懐。より。こ。り。お。ま。粒。銀。を。紙。拾。り。く。亡。骸。の。は。り。よ
措つ背向ふ。り。く。免。れ。ぬ。と。膝。立。直。し。着。る。脚。絆。も。違。り。ぬ。大。程。を。ま。ね。別。路。
迹。濁。る。ぬ。水。色。の。二。尺。は。拭。晋。刀。身。あ。ら。く。行。包。も。肩。に。被。り。な。ら。出。れ。ば。
炊をせぬ。迷憾。も。と。り。ひ。ひ。け。て。門。辺。に。立。て。目。送。り。け。り。却。説。大。田。小。文。吾。を。牛
嶋。の。く。へ。渡。ら。ん。と。く。河。原。を。望。て。赴。け。程。ゆ。く。と。僅。に。三。町。許。尚。新。し。草。鞋。を。ふ
締。附。の。端。緒。の。絶。れ。ぬ。を。と。く。結。び。合。せ。ん。と。く。つ。の。み。く。足。を。踏。伸。も。背。に。窺。ひ。捕
ち。の。夥。兵。亦。捕。的。と。被。る。声。より。速。く。地。上。に。礮。と。蹴。倒。し。登。り。蒐。り。組。ん。と。ま。る。と。
小。文。吾。の。臥。ま。る。も。足。を。一。働。く。換。廻。し。又。反。久。せ。ぬ。或。り。二。回。或。り。二。回。投。り。ゆ。
の。輾。ぶ。の。腰。を。折。れ。頭。を。傷。ら。れ。齒。を。折。り。血。を。吐。り。各。々。罵。り。騒。ぐ。の。も。然。る。も
と。も。三。人。敷。き。の。け。れ。ば。跡。が。入。る。を。累。り。ぬ。と。捕。ま。り。足。を。抱。縮。め。く。押。へ。く。索。を。を
被。り。け。小。文。吾。の。お。ひ。ひ。け。り。ぬ。と。く。結。び。合。せ。ん。と。く。つ。の。み。く。足。を。踏。伸。も。背。に。窺。ひ。捕
る。狼。藉。を。犯。せ。る。罪。の。た。の。を。浪。人。も。も。両。刀。を。腰。に。帯。り。某。は。一。言。半。句。の
他。法。も。く。索。を。被。り。ぬ。と。く。結。び。合。せ。ん。と。く。つ。の。み。く。足。を。踏。伸。も。背。に。窺。ひ。捕
捕。ま。の。頭。人。も。く。朱。鞋。の。両。刀。の。め。く。野。装。束。も。も。十。と。推。へ。進。み。出。立。對。ひ。ぬ。

八天傳六屏卷二
三
涌泉堂藏

小文五吾を仇と睨ま。この癖者既よ名。事のあふ及ふ。陳むればとて免されんや。
 汝のむか。當家ゆ。紛失たる。古代の名笛あ。山とい尺八を隠し持。と密
 訴のり代わり。只この一條の。縁故を原。は昨日阿佐谷。里人並四郎
 許宿投り。夜食腹の。技よ誇て。件の笛を竊。さう出。せ。並四郎
 訝る。この尺八。千葉殿。十六七年。今も年々。御示。さ。素ね
 る。笛は。要時。其。貸。その。相違。る。か。
 と。價。を。せ。ま。せん。と。駭。く。汝。が。體。を。果。誼
 嘩。事。托。せ。く。只。一。刀。小。並。四。郎。が。細。頸。丁。と。敷。落。と。逃。去。ん。と。し。け。を。
 の。の。女。房。船。虫。の。特。は。憐。憫。た。り。の。これ。の。怨。心。を。言。如。此。々。々。汝。を
 賺。く。を。終。留。め。く。走。ら。せ。並。四。郎。が。亡。骸。を。竊。し。寺。へ。送。り。ん。為。よ。苦。提
 所。赴。ん。と。い。ひ。あ。り。宿。所。を。出。杖。村。長。許。ま。り。す。と。箇。様。々。と。告。ぐ。

と。これ。の。亦。毛。檢。の。為。夥。兵。亦。と。五。日。當。村。は。役。に。彼。処。止。宿。の。わ
 ら。れ。は。拾。り。起。出。る。船。虫。が。訴。を。み。つ。巨。細。は。聽。定。め。謀。合。せ。彼。女
 房。を。宿。所。の。外。に。汝。を。ま。と。り。か。死。不。肖。れ。も。千。葉。家。の。眼。代
 畑。上。語。路。五。郎。高。成。が。今。も。漏。さ。天。の。網。車。は。逆。小。蟪。蛄。の。要。時。の。臂。を。振。り
 とも。被。る。素。の。嚙。入。る。ま。ま。縛。め。これ。既。ま。な。草。虫。も。勢。も。首。は。別。る
 時。節。を。ひ。絶。く。假。名。実。名。の。牙。の。出。丸。團。郡。笛。を。盗。し。當。時。の。形。勢。箇
 様。々。と。首。伏。せ。阿。貴。の。苦。痛。を。脱。は。ん。と。く。ま。せ。び。む。と。辨。せ。さ。く
 謹。向。へ。も。小。文。吾。騒。ぐ。氣。色。も。あ。も。う。証。言。の。某。の。下。絶。行
 徳。の。民。の。子。小。犬。田。小。文。吾。悻。頼。と。呼。ぶ。れ。此。度。上。毛。へ。赴。れ。さ。伴。侶。を
 失。く。索。り。て。の。地。は。ま。つ。の。始。を。い。か。如。此。々。々。之。終。を。い。か。箇。様。々。と。
 高。屋。畷。の。野。猪。の。又。並。四。郎。は。誘。引。れ。て。下。宿。を。彼。処。に。曉。ま。折。並。四。郎。ハ



西の東を縛せられ、
小文吾形虫
を蹴挫ぐ

山崎

畑上語路五郎

舟出

小文吾

小文吾が智勇の働に如此々々とすもむも入るわ。山の笛のりさく送
 るく告まう。件の笛と懐よりさう出て返すまわられば自ら流れては毎日
 駭れ嘆し且も歡み多うさう笛と裏より出てさうらんさうらんちも戴れれば弱冠の比
 謬く小條落葉の両刀とこの笛とさえ失ひより年々と徇知さうく穿金
 懈まれば盜賊さうは頭れ復すこの笛とさうらび何のうこれも死ん
 彼船虫との賊婦とも緊く鞆問さうらん等とも失る両刀のゆび出る
 りもわらず。されば件の小條落葉の先君相傳の刀はあらずに假染の秘藏の
 笛の當家の重宝さればこれ岷山の片玉は勝りさうらんは盜賊のう知る村は
 年末在りを汝も亦村長亦もけまで絶く知らずの怠慢の罪のとも
 此度の功の償ひはせんははゆめも彼犬田小文吾とさうらんの言くはる智
 勇の武士との浪人さうらんの左も右も説勸める當家の股肱となる

わらはは是は汝達の忠心をけ獵らずに小鳥よりの大鳥を獲まはしければ
 也どもの馬加大記は報知く渠より言ひげささしるに歸城せん
 比及まで大田と厚く管待しくおもとまるをよめれとせやうと可嗟ふ
 あらゆさと床几をさち衝と立と死す近臣小笛と持と真菅成蓑輪の
 くと過りあらば語路五郎の背に汗を流さままいく恐れ且も恥て目送
 り半响をりさうはく小刀を起して膝の塵埃を拂ひり村長許赴たる事熟
 り夥兵兩名と石濱の城小還と長臣馬加大記常武の事の趣を報知せし
 その使のかりあらずにみつらし盃を勸めるに小文吾を款待ま程は秋の日既にかこ
 むそ末のあらむ過はけり浩処は石濱遣らるに兩箇の夥兵之を某示嚮
 馬加殿の宿所はまりく口伏と演ふ且くと執繼の若黨とりておん答あり
 旅人犬田小文吾を語路五郎伴ふて城中へおもく還るに又賊婦船虫をさる

村長亦預け置て翌て獄舎に繋ぎ置れ。いふと各々此の意をゆき
 ちや黄氏目やなきま。こは癖者の路次の程なりとて此の意をゆき
 此と傳られていふといふ語路五郎領をくわの如く相計ひり先村長と
 ぬさく。莊客們を呼取合汝亦終夜船虫を繋ぐ成や海で下知の
 時。城中へ牽いと来るといふと嚴下知を傳へく小文吾も如此々と事の趣
 告あう。いふと心持のま今いふ勢ひ推辞むくもあつね心苛る瑣細
 水の河は留るも心持のま今いふ勢ひ推辞むくもあつね心苛る瑣細
 栗の志ぬくまう兼引けりゆと畑上語路五郎小文吾を俱一夥兵亦と
 ちや石濱へ立還れり村長の莊客亦と圍坐とて船虫を縛ゆる俵うち成
 ゆ。その日も暮春て甲夜の程畑上殿の下知状とて下部使のりて来るを村長
 驚く披たつる今宵罪人船虫とて書れり。いふと書れり。いふと書れり。いふと書れり。

うる響ゆり夜分の用心とて船虫を預け措れ今亦俄頃昨夜と相て又さうい
 りのそやと噂さう下知状を懐し刺入れて言兼とて使を以ての杖莊客
 們小より告ぐ船虫を牽もま。路次の用心を雨さうむ。蕉火を把捍棒と
 推乃るれ七八人。素とののれ西二人村長と後ま。各々隊伍を整へて
 石濱を望るの程。宵の二更の比。既わして石濱の城へ坂東路
 一里六町。のまのりふ。とてま。程は前路の杜の樹蔭より誰
 といふらむ。忽然と放ゆる鳥銃の音。駭く莊客們あを。いふ
 慌忙に逃るもの。腰と腕と。輾るもの。中村長もあ。生る心持の
 せ。ど。後罪人として。切られ。目今莊客們が捨る索の端。掻合を牽
 逃んとする。後。草面ある癖者四五人。いふ。刀をうち振る。吐と噓て殺
 蒐れり。村長の。怖れ。亦船虫とて捨る。喘々を逃る。杖の。あ。

此度のり用捨をぞこの又後日議まきえ彼船虫のいふと向れて僅小
頭と擡さしは曩小某夥兵もて下知と伺せし大田のきりて多れ船虫の村
長小預置くをしようめれその故に如此々と素くは彼処に送らぬこと
せも果て常武いゆび声をゆり直くと甚くは錯誤のまひひつるを然すあは
船虫の牽りて来よ大田の長途の疲労もあはる今宵且村長許首をそよん
めれと答ると何とぞゆる願ふは彼船虫の女流小似けるは癖者も武藝不疎
農夫小任し捕も逃し畜畜と共紛失する小條落葉のあつたをひき
索るよかみし使立立る暇兵小が使違ふとありとも三歳見もはる理の當然
その職に居てもつるも大なる罪人を名附て失あつた抑誰が越度を
和敷みづり彼処に執たて船虫を牽りて取りて今宵獄舎に敷きかまひ怠慢の罪
脱れり。さそめくと緋り又と論議小夜の更も語路五郎只權威小怖れ

隻言一句も凍れぬ理と非は柱膝節の折るなり居縮まる痿痺の京へ登
らざともやなむ阿佐谷村身の過とを多く勸解くや宿所あつたは極夥
兵はも聚合く石濱の城戸を出ると総泉寺の鐘鏝々と夜は更も更も

第五十四回 常武疑く一犬士を囚ふ 品七慢よ奸臣と話説ま

却説畑上語路五郎の蕉火の路振照も夥兵小をそよ阿佐谷村へ赴く
程もくこのまゝ六七町は過れどなれば人のまゝ前程の小草折敷て何やえ
噓々とうち相譚の声とければぬくあはる怪と近づき小呼かけく七何
の七と外もは是則別人るま阿佐谷村長が莊客們とあは聚合て辯の
會談とさるまのけの當下村長のと面きけま立ゆく道次は額とつた所眼代さ
某木と救せぬとちち勸解れば莊客們も異口同音小か慈悲と仰たなる

為る小汝木が越度にて連係せられ朽をさよ一人も漏さず縛めを烈に
 下知は殿兵們齊一撥とま蒐く村長共十人許數珠敷糸めつけられ皆
 面色米の如く戦慄れて齒も合ぬ口も唱は念佛と囃せ秋虫の鉦敲る宿小
 妻子のまら虫といひ啼々鈴虫のまら回忘報過世の業と悟るがひひさりて
 翌この野の螢より先ぬ滅んとうち歎くを追立させ語路五郎の石濱の城に
 帰ると無くその夜の中村長木と皆獄舎を敷せける程まを曉くま
 子一語路五郎の馬加が門戸を敲入のさかあわく翌を告めとひつ雲安時
 臥房に入りのより既小天の明日の昇て己の比及ありし遅をけりと忙々
 衣裳と改めし出るほど馬加常武の既ま名向注所は在りと驚くこれを
 召る使遣胸も騒ぐと鎮めもの使ともまありし常武をちを待
 びりり彼船虫といふまると問れて語路五郎被敷ま由る村長木が不覺を
 船虫と稱者め本専まされといひ一條をさそく報知く彼村長木が
 木も緊しく禁獄せぬる。同類と穿敷せの船虫を捕へとも遠く
 こそゆりめ。この船も果て常武の勃然とく眼と睜し。あれがそのいさる秋
 船虫をまきく。村長木が罪輕はふぬど津が宿所は苗め措て縛と
 等閑は致し。和主が罪へのゆくり重り誰の目も奴をまき搦めばと呼り
 声小當采田の若侍木西二名阿と忘てまの語路五郎を縁頼より墮落
 推伏せり。忽地索とけり。常武獄舎小送りとる。陽光もさそり
 けり。船程は阿伏谷の村長庄客木が親族妻子の事の趣を傳はて駭歎
 くと大くさる。母の石濱の城にまのり。良を訴へ或の田を佳り。林を
 售く。竊小馬加主後。物のま。贈り。大。約。一。月。の。ま。の。麻。で。村。長。木。の
 辛く。倉。林。獄。を。免。され。り。只。如。上。語。路。五。郎。の。こ。の。思。心。赦。ふ。ゆ。り。と。

船虫と稱者め本専まされといひ一條をさそく報知く彼村長木が
 木も緊しく禁獄せぬる。同類と穿敷せの船虫を捕へとも遠く
 こそゆりめ。この船も果て常武の勃然とく眼と睜し。あれがそのいさる秋
 船虫をまきく。村長木が罪輕はふぬど津が宿所は苗め措て縛と
 等閑は致し。和主が罪へのゆくり重り誰の目も奴をまき搦めばと呼り
 声小當采田の若侍木西二名阿と忘てまの語路五郎を縁頼より墮落
 推伏せり。忽地索とけり。常武獄舎小送りとる。陽光もさそり
 けり。船程は阿伏谷の村長庄客木が親族妻子の事の趣を傳はて駭歎
 くと大くさる。母の石濱の城にまのり。良を訴へ或の田を佳り。林を
 售く。竊小馬加主後。物のま。贈り。大。約。一。月。の。ま。の。麻。で。村。長。木。の
 辛く。倉。林。獄。を。免。され。り。只。如。上。語。路。五。郎。の。こ。の。思。心。赦。ふ。ゆ。り。と。

多く獄舎の中よりまゐりければこれと憐むものなり又識るものにて渠の年
 末民の言腹を絞るる悪報めく馬加敷の鬚の塵を採損ねしり憎まき
 可惜命を損ぬと竊小これを評するれり妻も迫る世をまじりて歎き
 送せしもされば口親族と朋友等が亡骸を葬りけり是より先千葉
 以自胤の失せ年歴一嵐山の尺八のるも入りしよりその日のも帰城と彼犬田
 との噂えりる勇士の力を高成の常武と告る後渠と當家は留めり千騎をも
 優りてとく對面せしむればとあろよむひもとも長臣ホクまうしも出ぬ小
 召せまへまうのされば且く黙止る程よ次の日馬加常武のひとり後堂小見
 参りて各笛吹てび宝庫の返りし悦びを述まうし且阿佐谷の村長等が
 謬て船虫をまらりし縁の趣并小畑上語路五郎が罪科のの面様々こと
 せえりて渠木の禁獄せりえりて是八方部と彼船虫と馳走れり追捕
 輒くぬ一縦往方のたれとも原是匹婦のるるれり喪家の狗も異るる
 終ゆらみづりて斃れぬは賢慮のあひりひとと異もまげまうしを自胤はて
 眉を擧め失る笛の復りてどもも同被賊婦と鞠回せ小條落葉の両
 刀の心もあつともものべりし語路五郎が疎忽ふよりて村長ホが過失の禁獄
 りれも法は當まりあつりて人の賢君の古器名物と宝とせ良臣賢者と
 化算とせと尚書小本文をさるるまむやわれば予が欲まののわくし山の笛
 よりも小條落葉の大刀よりも彼犬田小文五郎の渠が野楮と搏かす
 又並四郎不行色を刺せし輒くこれを撃ち笛め又船虫が贈りくる笛を送りて
 奸計の杓を缺れた大勇明智賞感尤浅くは其方も亦このまろりて旅
 館の管侍等雨るるも勧めり當家小仕へせよ遠くは口上りて對面せ
 りておのりつと回れて常武小膝を進め仰ぐはとも彼小文五郎のそちのみ

輒くぬ一縦往方のたれとも原是匹婦のるるれり喪家の狗も異るる
 終ゆらみづりて斃れぬは賢慮のあひりひとと異もまげまうしを自胤はて
 眉を擧め失る笛の復りてどもも同被賊婦と鞠回せ小條落葉の両
 刀の心もあつともものべりし語路五郎が疎忽ふよりて村長ホが過失の禁獄
 りれも法は當まりあつりて人の賢君の古器名物と宝とせ良臣賢者と
 化算とせと尚書小本文をさるるまむやわれば予が欲まののわくし山の笛
 よりも小條落葉の大刀よりも彼犬田小文五郎の渠が野楮と搏かす
 又並四郎不行色を刺せし輒くこれを撃ち笛め又船虫が贈りくる笛を送りて
 奸計の杓を缺れた大勇明智賞感尤浅くは其方も亦このまろりて旅
 館の管侍等雨るるも勧めり當家小仕へせよ遠くは口上りて對面せ
 りておのりつと回れて常武小膝を進め仰ぐはとも彼小文五郎のそちのみ

並四郎は鎧の七刺を弱り果て野指するに撲殺をも目くらげに又並四郎を
 害せし欺敷を多く柄ふるるに就中彼笛の小文吾が所持せしゆれは後
 難とあつたり竊小板厨へ送り置たり飲これも亦知るべからばのれは先船虫か
 訴中が実事も小文吾が陳する所虚言でものべき飲り考らるる船虫か
 冤枉を憐むの準と奪うくまうせし飲船虫既逐電と再度の糾問小
 よまければ何をのくこの疑ひを解死ゆき然るに今更小文吾の御對面の
 るる物体多くそのゆめと憚る氣色もあつたりまうせし飲自亂且沈吟と
 りる趣理をたのめぬと疑ひ人ふとへ郷向小文吾が進止を伴ひ
 つくその人とのをせしめ詭譎とりて人と虚げ廢棄言を求く僥幸を欲する
 のゆめをうらば再三再四の勘辨をのたまはければ宣へ常武の心を
 感ひの愛まると憎むとの深き起り縦小文吾智勇あり言と行の

正しくとも尙敵國の間者あるに怖るべきのゆめをゆめ故郷に下總ゆ行
 徳とりのゆめゆめ孝胤ぬの腹心は時千葉の城に於て然るまの里見飲
 許我殿成氏の間諜者ありゆめゆめ智勇捷まてゆめの人を用る戦國
 主ともせむ虚々と諸國を流浪せんゆめゆめ今愚意をり
 致んぬゆめ小文吾を獄舎に囚へて言を重く責懲ゆめゆめ敵の間者ま
 首を河原小殺集て後末を箴むゆめ是當家の武威を示す第一義
 こゆめと言葉巧は説破れば自亂ゆめゆめ沈吟と敵の間者と間者ま
 ぬと寔小測りゆめゆめ假染まゆめ功ゆめゆめを賞せむと四訓せんゆめ
 よろし沙汰ともおもほえ事真偽の知るる限り只ゆめゆめ置
 日毎の郷食応答閑るゆめゆめや敵國の間者まゆめ志を轉して遂に服
 後まるとあらんこれより外おせまると又他事もる宣へ常武終に拒



馬加常武

酒部彌平

三井貞九郎



水茂吾
柳苗
常武
謙才

坂田金平太

柳角九八

小文吾

下郎李六

八ノ部六郎卷二

十五
〇部良堂

六ノ部六郎卷二

〇部良堂

願くそそのへとのふ常武領にて愁訴寔の理り某その誼とて心る
 一限りまけれどいふせん自胤和殿と疑ひ多へ縛速決めりその故
 彼のうし山の笛のゆ和殿ふ船虫が贈りて陽受く板厨の中へ送置こし
 るれども受ると授ざると證據を只是のまらふ當夜中途の癖者ありて
 彼船虫を奪去りぬ身ふりて再のま船虫が首伏の苦痛も堪ぬ虚言ゆく
 冤枉を憐むもの奪取くまらふ亦料も是疑ひの二つを
 あれか加ふと和殿の智勇兼備の人武藝も亦雋れり人を用的戦國は往き
 ろくと售れざりて流浪せらるるは疑ひの二つを察せしめ
 千葉の孝胤の間者るるは里見秋尚我の間謀者るる速に禁獄とす
 推量ふ違ふは首と河原ふ殺身て武備と隣國ふ示すと君命嚴き
 のれり某を諫めりも真偽明白の證を其れ疑れり殆興心
 其の意は儘まるといられぬ故馬く小文吾の又一層の思ひとて刺り如き
 胸膈よとさるるかうさるる也もいひ多の貌を改めいひけり疑ひの理り
 今も覚ぬ之彼船虫が逐電より還る某を疑れて涙がまらぬ首伏三寔
 支るりとせらるる抑ゆる道理もや又某を敵との間者るといられ人
 行徳(ま)とて彼死の里人ホも向ふ舊里あるは老父あり某は五斗米に
 腰を折れぬ人の為刺客とさるる初市人今の浪人古那屋が男兒とたつ孫
 ぬ隠れぬもいひ多この義をいつ今一度某が為小諫めぬ彼を疑ひと
 解もんの春の水の如くさるる愛顧を祈るると只管の請求れ常武類は
 嗟嘆していふ趣み理ありまられとも行徳の當家の昔領するのうら今も
 千葉の孝胤ぬの采邑され敵地といへる輒く人として和殿の素生と問れぬ

うら仰だ。いふれは枉津日の神のまう秘く黄縁く。つまよあむらりるをせ。
 荒井才山の厄難より別れ四友の存亡を夢ふも知りま。預けられる両箇の
 女人の性方今ふ定るもむ。舊里の親あり怪あり父の喜ぶく。あむるべ死の
 齡ゆて怪の尚鳩車竹馬の年を有け。これをどひ彼をどへ。身いあまのり
 とよとも心の四方ふま。ぬ日もる。仏説はすく火宅の煩惱苦海の風波の
 これる。是併馬加大記が妬諱よ起りて。虐ら。正のくの如く。渠の奸曲の
 小人より誠る。大成功の細謹を顧む。大礼の小讓を辞せ。とて。夢れを。
 の諸折戸を推破く。出んとの難くもあられ。この処も鎖を披く。いそり
 城門を出されんや。愁は抑留せられ。求く恥辱を思ふ。小近。いふま。ま。と
 胸のこ。思ひく。飛鳥の翅る。死を恨む。不樂音を鳴ね。果。一。死。
 龍の養れて友。ゆる。色時。暮る。も。又。夕。れ。あ。り。け。り。か。く。秋。ゆ。き。
 冬枯れの寂し。死宿。年暮。明れ。文明。十一年。春も。二月。より。り。か。り。れ。の。と
 る。と。る。人。も。も。庭。の。花。の。いろ。く。る。いと。美。く。咲。く。程。は。彼。帚。と。る。蒼。頭。の。常
 より。も。も。も。く。も。く。日。く。く。草。を。刈。り。け。り。中。は。品。七。と。い。い。老。茶。倉。頭。の。小。文。吾。を
 訪。慰。め。く。木。訥。ま。く。物。の。い。ひ。る。老。実。ま。く。る。れ。れ。小。文。吾。も。亦。隔。ま。く。の
 鎌。休。の。折。毎。は。煎。茶。を。飲。せ。る。く。江。湖。上。の。今。昔。ま。く。ち。か。く。い。せ。す。
 品。七。ゆ。く。飲。び。く。稍。親。ま。く。程。は。一。日。品。七。ひ。と。り。ま。り。日。ま。り。た。ま。の。こ。ま。れ。は。
 午。餉。過。く。縁。頬。は。尻。う。ち。撰。く。憩。ひ。こ。り。小。文。吾。を。を。勞。ひ。て。又。端。近。う。出
 品。を。品。七。要。時。ま。く。て。い。く。苦。勞。を。あ。め。あ。め。ま。く。て。人。の。こ。ろ。の。ど。け。く。浮。れ。れ。
 花。の。春。の。面。色。の。病。者。め。た。る。瘦。さ。へ。え。さ。せ。あ。ま。て。現。を。該。で。も。あ。ん。く。
 不。測。の。ゆ。拘。ら。ひ。て。旅。も。く。人。の。川。田。れ。困。龍。ら。れ。て。既。あ。ま。下。歳。ち。く。く。ま
 ぬ。れ。い。と。痛。く。ゆ。の。も。又。せん。ま。た。の。う。う。人。の。過。世。の。業。ま。く。て。知。者。も。勇。士。も

趣合おもむきあく生涯せいげい頭あたまと擧あ難がたとせよその儀ぎ多くあり近ちかくこの武藏むさし。大塚おほつかは
 犬塚いぬつか番作ばんさくといひ猛者もうしやの家督けとくと姉夫あねむの横領よこりやうせられて憤いらいりあ堪たざりけん
 腹はらを斫きつて死しひた。獨子ひとりこも親おやは劣せうらぬ器量きりやうありと人ひとといひいづかひあり
 けんようの知らぬと今いまとその迹あと絶たつとをかれが智者ちやうでも勇士ゆうしでも時ときに遇あはれ埋う
 れて人ひとも知しらぬと今いまとその迹あと絶たつとをかれが智者ちやうでも勇士ゆうしでも時ときに遇あはれ埋う
 けんとええといふや一いち年ねん二に月げつ囚おと徒とは等らしむも隨意ずいなる日ひの多おほくぞやあ
 まといつ物を思おもひ命いのちと縮ちぢむのせよみづから心こころと長閑ながかんくゆらて尼にの園えんを待まち
 むひのと慰なぐさまれて小文吾こぶんごの骨ほねうち騒さわぐと推鎮おしぢんめいらく趣理おもむきりすれも亦また大塚おほつか親おや
 子の名なのい隙ひまで時ときをさし和殿わだんの相識あひびとより一いつ次じと問とはれて品しな七頭しちづゑとち掉ふす否いな
 相識あひびとでいられども大塚おほつかの里人さとびとは糖助とうすけといわれのを先代せんぞより由縁ゆゑんあり浪なみがせぬ
 在あり一いつ程ほどの訪たづねも訊きれぬとせよよりとぞ噂うわさめはばの現世げんぜ間のさるべし高たかく

いられぬとせよよりとぞ噂うわさめはばの現世げんぜ間のさるべし高たかく
 課かく守まもるまでも憚おそりあふ甚いんち過す世よの申まをんといふ小文吾こぶんごと進すすめて
 その縁ゆゑん由よしはまゝ一いつ世よの甚いんち助すけあまともこれ他郷たけうのれらふあは綽と同どう
 人のまければ時ときも外ほかへ洩しやする。さうち牛うしのあひひとをのまされて品しな七頭しちづゑと頭あたまと挫く
 らく四下しげとんえり。おん刃やいばとよるひは辭ことば些ちく慎しん之し深ふか人ひととさへ彼下條かのげじやうを告つげ
 さん忘れても洩しのまはまも及およせぬひけん。いぬる享徳きやうとく四年しねんの秋あきのてろ下総しもさうの子葉こぢ
 家いへ二流にりやうに分わかれて合戦あせ已やとたつりけり。縁故ゆゑんこを原もとより當君たうきみ故千葉ちのち胤直いんぢく主ぬしと
 尚弱しやうじやく冠かんりけり千葉ちのちの一族いちぞく原越はらご後ご胤房いんぼうの御所ごしょ成氏なりし朝臣あそは後ごひ
 多おほと薦すすめり。圓城寺えんじやうじ下野げんの守尚任しやうじやうにんの鎌倉かまくらの管領くわんりやう小後こごひとと諫いさめ
 ぐら胤直いんぢく遂ついに圓城寺えんじやうじが議論ぎろんを是こゝとて鎌倉かまくらの管領くわんりやう方かたよりあは胤房いんぼうが
 憤いらいりて成氏なりし朝臣あそ小加勢こがせと乞受こぎう千葉ちのちの馬ま加陸かろく奥おく入道にゅうだう光輝こうきと相共あひま軍兵ぐんべい數かず

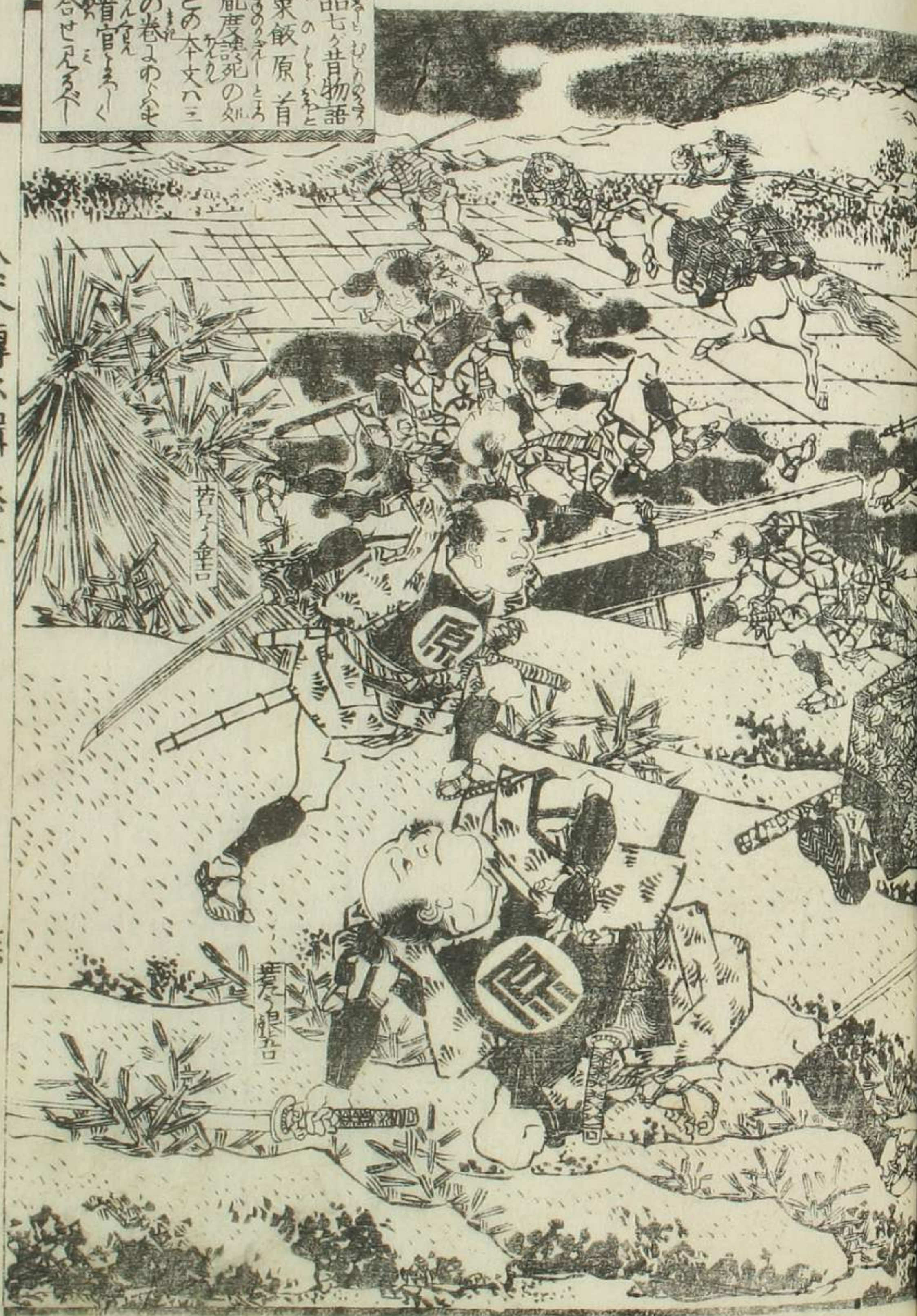
千と引率せんといんそつとて同國どうこく胡志摩こしまの二城ふたしろと攻潰せめつぶし、馳かて大将胤直たいしやういんぢくぬふ詰腹つめはらを切きらせしむ胤直いんぢくのむ父前ちちのまへ千葉ちのへ入道いりだう常瑞じやうずい舎弟しやてい中勢なかつせ入道いりだう了心りやうしんも亦また一ひとむん腹はらをむめされける。これより成氏なりし朝臣あその沙汰さたとて陸奥むつ入道いりだう光輝ひかりの嫡男ちやくなん孝胤かういんと千葉ちのへの千葉ちのへの城しろに居置ゐりおきれ又管領くわんりやう家の沙汰さたとて康正かうせい元年げんねんの冬ふゆのあろ入道いりだう了心りやうしんの長男ちやうなん實胤じついんと三郎さんらう自胤じいんと執立しやくたてて武藏むさしの石濱いしはま赤塚あかづかの両城りやうじやうに居置ゐりおきれより千葉ちのへ家いへのいふ二流ふたりのうらに分わかれて互たがひにめぐ怨讐おんしやうの鏃やちとるん麻呂まろのひける。あつあつはやく千葉ちのへ庶流しよくりうの郎黨らうたうは馬加まか記内きない常武じやうぶといふあり。孝胤かういん不仕ふしへがその男過おとこであるのり。下総しもさうと速電すみでん、石濱いしはま殿のり降系かふりとて千葉ちのへの為ため体ていと演説えんせつし奉公ほうこう無二むに進止しんぢの程ほどは實胤じついんを登用とうようして遂つひに長臣ちやうしんとす。あつあつ記内きないと大記たいきと改めく持もち時ときめ死し栄えいける。あつあつ程ほどは實胤じついんぬ。八年はちねん末すえ多病たびやうする。遁世とんせの情願じやうがんあり。家督けあくと舎弟しやてい自胤じいんを譲やうらん。とて謀まりぬ。馬加まか常武じやうぶ兼かねく杜裏とろより赤塚あかづかの城中じやうちゆうの栗飯原くりいひら首胤くびいん度た龍山りやうざん逸東いつとう太た縁連えんれんといふ西箇さいこの老黨らうたうあり。いづれも當家たうけの一族いっしやくあり。就中しゆうちゆう胤直いんぢく度た下総しもさう志摩しまの如來にがはら堂だうあり。常瑞じやうずい了心りやうしん自殺じさくのといふ主君しゆきんと共に腹切はらぢする。栗飯原くりいひら右衛門ゑもん尉ゑいの子こる。あつあつ自胤じいんを練れんられぬ。自胤じいん家いへ叔しやくと美嗣みしあり。彼か兩人ふたりにんも随まひ來きて第一だいいちの權門けんもんとあらん。秋あきあつあつあつあつ権勢けんせいを削くられて外ひたひた夕ゆふ夕ゆふ朽くをいひあはす。縁連えんれんの血氣けつきの杜と伎ぎぬ思慮しりよあり。いづれも謀まるふ難がたくもあつあつめれど心憎こころにくた胤直いんぢく度たに要いまふ。あつあつ密ひそ々々謀まを旋まりてこれより後時ごとき々々赤塚あかづかふ赴おもむく。自胤じいんの安否あんひと伺うかがひ粟飯原くりいひら龍山りやうざんの西にし老黨らうたうホと他事たじおぼす。あつあつ交まりて一日いちにち常武じやうぶの實胤じついんの室庫むろくらよりあつあつ山やまといふ一ひと節しやく截せつを潛かづり小こらり出です。これに懐なつより赤塚あかづかより栗飯原くりいひらが宿所しゆくじよに赴おもむく密議ひそぎありと倡たのへてあつあつと兩室りやうむろの對面たいめんより其そのくち某それがけふあつあつ守まもの仰おほせよりあつあつ安やすめりや。

馬加常武兼く杜裏より赤塚の城中の栗飯原首胤度龍山逸東太縁連といふ西箇の老黨あり。いづれも當家の一族あり。就中胤直度下総志摩の如來堂あり。常瑞了心自殺のといふ主君と共に腹切る。栗飯原右衛門尉の子る。あつあつ自胤を練られぬ。自胤家叔と美嗣あり。彼兩人も随ひ來て第一の權門とあらん。秋あつあつあつあつ権勢を削られて外夕夕朽をいひあはす。縁連の血氣の杜伎ぬ思慮あり。いづれも謀るふ難くもあつあつめれど心憎た胤直度にいまふ。あつあつ密々謀を旋りてこれより後時々々赤塚ふ赴く。自胤の安否と伺ひ粟飯原龍山の西老黨ホと他事おぼす。あつあつ交りて一日常武の實胤の室庫よりあつあつ山といふ一節截を潛り小らり出す。これに懐より赤塚より栗飯原が宿所に赴く密議ありと倡へてあつあつと兩室の對面より其くち某けふあつあつ守の仰よりあつあつ安めりや。

此度時我殿と面管領家と和和睦の風聞定之守中近死程の家督と
 赤塚殿を以て譲りおんと思召定められしは、面管領の助力ありとの
 とも今さら時我殿より思われぬ、よらづ小後去る所べく、されば
 彼おん和睦のゆ、世お披露れ先よ使者を時我殿へ進ませぬ、後
 ぬらう一か所へ、されども石濱より遣ふ鎌倉への言え影護一自胤
 より遣さん何れも疑ひ死就く時我殿へ進ま死牽出物の二當家
 本國小離きてよらざる重器も、この一節截り乃祖自胤の死時より
 相傳のゆ、御所も知し召さるれば、これを進ませぬ、この餘の物と
 自胤のころと相添らぶた然このゆ、尤密議されば、汝竊小胤度が宿所
 赴たく予が意は、仰らるゝと實言、やう小説示し、一件の笛と遞与
 せり、おん胤度針を、おびき、一点も疑ひ、おの趣有く死せよ、素り
 ぬひぬ速くおえのゆ、仰のま、相計らひ某時我へ赴た、帰城の後彼
 処の首尾を、中上ひんとの、美宜くおん執成を、憑心なると、答へり、常武と
 謨、済一、と、ところの中、含咲く石濱へ、還りける、却説粟飯原胤度の
 その日自胤の、同より入る、馬加常武が、傳へる、実胤の、密山意を、演て、件
 の、笛と進らせり、自胤感悦大なる、む石濱殿の、おん計ひ、某を、思ひぬ、
 おん慈愛する、ゆ、を、違背致ま、現時我殿へ、牽出物、は、笛の、
 いく、おん今、一品、何を、欲得と、おのひ、る、問へ、胤度、要時、沈吟
 しく、異義、は、某鎌倉へ、おん使を、兼り、折は、彼地、おん購得、は、長短
 二口の、刀の、焼刃、尋常、る、ざる、と、おの、傳進、上仕り、小、笹落、葉、
 名つけ、ら、る、と、御秘藏、ある、と、おの、彼、両刀、を、然、る、へ、な、れ、と、ひ、
 果ぬ、は、自胤、と、頻、小、領、死、微、咲、く、彼、大、刀、の、係、を、忘、れ、り、牽、出、物、は、
 八代傳六 目録二

此度時我殿と面管領家と和和睦の風聞定之守中近死程の家督と
 赤塚殿を以て譲りおんと思召定められしは、面管領の助力ありとの
 とも今さら時我殿より思われぬ、よらづ小後去る所べく、されば
 彼おん和睦のゆ、世お披露れ先よ使者を時我殿へ進ませぬ、後
 ぬらう一か所へ、されども石濱より遣ふ鎌倉への言え影護一自胤
 より遣さん何れも疑ひ死就く時我殿へ進ま死牽出物の二當家
 本國小離きてよらざる重器も、この一節截り乃祖自胤の死時より
 相傳のゆ、御所も知し召さるれば、これを進ませぬ、この餘の物と
 自胤のころと相添らぶた然このゆ、尤密議されば、汝竊小胤度が宿所
 赴たく予が意は、仰らるゝと實言、やう小説示し、一件の笛と遞与
 せり、おん胤度針を、おびき、一点も疑ひ、おの趣有く死せよ、素り
 ぬひぬ速くおえのゆ、仰のま、相計らひ某時我へ赴た、帰城の後彼
 処の首尾を、中上ひんとの、美宜くおん執成を、憑心なると、答へり、常武と
 謨、済一、と、ところの中、含咲く石濱へ、還りける、却説粟飯原胤度の
 その日自胤の、同より入る、馬加常武が、傳へる、実胤の、密山意を、演て、件
 の、笛と進らせり、自胤感悦大なる、む石濱殿の、おん計ひ、某を、思ひぬ、
 おん慈愛する、ゆ、を、違背致ま、現時我殿へ、牽出物、は、笛の、
 いく、おん今、一品、何を、欲得と、おのひ、る、問へ、胤度、要時、沈吟
 しく、異義、は、某鎌倉へ、おん使を、兼り、折は、彼地、おん購得、は、長短
 二口の、刀の、焼刃、尋常、る、ざる、と、おの、傳進、上仕り、小、笹落、葉、
 名つけ、ら、る、と、御秘藏、ある、と、おの、彼、両刀、を、然、る、へ、な、れ、と、ひ、
 果ぬ、は、自胤、と、頻、小、領、死、微、咲、く、彼、大、刀、の、係、を、忘、れ、り、牽、出、物、は、
 八代傳六 目録二

品七々昔物語
 のしりぞき
 粟飯原首
 のしりぞき
 筋度死の如
 この本丈ハ三
 の巻ののろを
 首官とまぐ
 合せんる下



八犬傳六輯卷二

共 涌泉堂藏

八犬傳六輯卷二

共 涌泉堂藏

救ひぬ。この使は立人のれ首をうらぐ誰うよくせん疲勞るうらぐ事いげや。
と亦他事もろく宣へば。胤度荒然とうち笑く仰わくとも既小た器用
意を致しう。明朝發足仕らんとのよ自胤欽びく次の間を侍りう。
近習の者ふあろゆさく。小の條落葉の両刀を嵐山の笛の共胤度
遍与一の胤度これを受とりて。宿所を退死は。その日の中
細工人ふよ笛と両刀を仕衣らる。猛小救正の行
装も現戦國とく。逸早に乘馬持鎗甲申日權命ハ今宵一節切小
條の雪吹消もく其処は落葉の両刀を携さる。若黨二名と後者を
て十人むろ。その詰早まらうの辭我を望てを起行ける。畢竟胤度辭我使
と又甚磨る話説う。その巻は著るる出像とるても大くを知らん。
里見八犬傳第六輯卷之二終

南總里見八犬傳第六輯卷之三

東都 曲亭主人編次

第五十五回

馬大記賺言と途小龍山を窮せむ
栗飯原滅族せられて里小犬坂を送と

品七も與小衆して馬加が隠匿の長物くう時を移せ。小文吾耳を側ぞ之感嘆
膝の進む覺え。春の目も只なむらり。輝人多んひる。當下品七小文吾が及て
生。茶を遠くくも喫く縁類のほとり。扇を把く膝小突建。行程小馬加
大記常武の夜の腹心の若黨。あちこちへ差向く。栗飯原胤度が起行や否や
んもて遣せ。その詰早歸きて栗飯原敵ハ黎明の比主従大約十人許行
装を整へて栗橋のくく。劫犯あひぬ。報く常武守く。物領き。その日赤塚の
城小伺候して。時炎の安否を訊せ。自胤對面あひく。きのふ八守此

八犬傳六輯卷之三

南總里見

左右等一々縁連をさし挟む攻戦へはなれ暇あるも時不並松の
 樹蔭より頼破りせし一箇の癖者忽然と頭れき道次不捨措き嵐山の
 尺八小篠落葉の両刀を早く箱より引出し小腕抱きて逃んとす
 程もあせせ亂度が鎗奴逆ふことぞんじつと飛ぶごとく走り來り癖者
 等と呼かけ鎗を捨て刺んとほむ癖者八件の三種を後方へ撲地と
 投遣りし巨刀丁と引接受とめ逆へ進て追つ返し丁々發石と戦たりその
 間不又樹蔭より頼破りせし奇怪の賤婦帳ぶが似く走り出く笛と刀を
 搔取く舊の樹蔭小躲く程小怯む挑むこの癖者鎗の蛭卷研削て
 返す刀小鎗奴と砍けし血煙ハ映残る王葎時樹蔭を出入賤婦と目を
 指し微笑え造化精妙と夕間暮る連拉く逃たり程小籠山
 逸東太縁連ハ既不件の癖者ハ笛と両刀を奪取る為体を逆ふん
 吐嗟と歎と金吉銀吾と鐙を削る真中おれはあつ忙暮ハ乱れ金吉が撃
 太刀小鬚三寸浅疾を負く既小危くをる折る縁連が後者ハ四五人
 齊一走り來る金吉銀吾を前後左右小推取籠く攻つけく遂に刀小砍
 けしやうを多く頭を捕まけり程小亂度が後者ハ或ハ斬れ或ハ逃
 亡敵一人もあつなりこれも縁連ハ緊要なる笛も宝刀も癖者ハ奪去れ
 らるれば有敷ふあろ安うらひの往方を索んとあどもや日暮れ
 如此も他領のうられば後難も亦料ごととあひ合せ忙々して躬方の
 死骸も捨措つ亂度主後三級之首をうりを携り路引あつ走りつ
 その夜を岩槻のほとりある古寺小曉せしがはりくと思慮るふらま
 亂度を討捕られども緊要なる笛と両刀を癖者ハ奪れればもう一
 解んとしうらひ況撃漏るる亂度が後者ハのそれより先走り帰て

程の常武ハ彼妾調布ハ胤度の送腹あまきこれをも殺えしう一城。
 相憐むの哀告て醫師をよと橙人ト一決して有身ふあは血塊小疑ひを
 とく。この方書と引つて醫師も共小寛くとも常武ハ疑ひく調布ハ墮
 胎の菜と三日づけく飲せしむ。しゆる験のありく。六原来血塊となりて遂ハ
 追放されけり。此ハ今茲より十五六年の昔ハ寛正六年乙酉の冬十月の
 りまどありき。かくて件の調布ハ些の由縁を心あてふ相摸州足柄郡大坂と
 つ山里ハ在りし程ハ病悩ハ血塊をその年の暮ハ子を産めし。これより
 三年むりの後忘仁元年丁亥の秋の頃誰ハかく風声せし常武定て
 駭然中みよ安くぬと。老僕柚角九念次を犬坂へ遣しつ。緯の虚
 実と撈せし子を産むハ一定なれども今ハ其処中も住みて往方あれは
 せえし。常武ハ靴を隔く癖を撥る心持し。加月彼此と索。終ハ

便宜をぬき。又彼菟山逸東太縁連ハ千葉家恩願の郎黨也。その
 家柄も大く。年尚少。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。
 ようの。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。
 主命を用ひし。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。
 報ひく。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。
 却て。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。
 緯み常武一人ハ任用し。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。
 悉舎弟自胤ハ讓も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。
 あひ。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。
 濱の城も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。
 繁昌せり。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。胤度の胤も。

掩ひて... 小文吾竊ふ舌を掉く... 終饌に向ひても著る
此懶き... 歎息の已ざる... 日の暮果て甲夜あり... 春
雨の音蕭然... 更蘭... 寂... 鐘の声寐られぬ... 小文吾の獨り
あやう彼常武が人とあり... 大... 猜せ... 品の七が巨細あり...
かくその隠意を... 資... 後の用心...
されば馬加が善黨... 狙渡増松... 毒殺せられ... 一條... 今
ゆ... 合せられ... 亦日... 食後猛腹痛... 堪... 日の
あ... 芥の貯藏... 獲身囊... 披き感得秘藏の玉を
出て或は... 尾へ推當つ又... 口... 玉液を吸入程... 苦痛
忽地... 心持清... 幾度... 玉を... 必
かの腕中... 毒... 中のれ... 玉の奇特... 依... 恙... 一

か... 大川... 大石... 獄舎... 笞杖の撲傷の頓... 亦彼
玉の... 裕と云恰... 玉の加護疑... 神... 妙
う... 塞翁... 馬... 戸田川の窮厄... 十條... 二尺八... 助... 吾
曹... ひりけ... 虎口を脱れ... 今... 千葉家の尺八... 多... 殆危く...
彼... 忠信義烈の兄弟... 此... 音曲尚古の名物... 尺八の名... 等... 利害損益
甚異あり... 厄今... 解... 彼粟飯原... 比... 屑... あり...
は... 粟飯原氏の... 送腹... 子... 生育... 次宇宙の間... 不平... 渠...
あ... 嗚呼... 憐... 憐... 緑返... 胃の中... 積... 日教の
春... 夏... 彼品七... 尔後掃除... 来... 何... 小文吾竊ふ
訝りて... 一日又草刈... 蒼頭... 彼品七... 何... 何... 何... 何...
あ... 品七... 月... 日... あり... 庭掃除... 来... 次... 日... 夕

つゝ俄頃心地煩々。さうあ臥して程もかく夥しく血を吐く真夜中比ふ
 めまうり死生平次病ひ氣のあつて風ども引ぬ老痴ありし食傷あり
 少ひん健ありとく憑まき現命數ハ豫てり量知らぬものあふ
 駭く小文吾のあつて心をつら腹裏あつて原来たる日夕饌を
 来くもえたる男童の品七長物をとりて幾條をとりて主の常武小告り
 常武の品七を憎て毒殺せりん噫馬加が人を害す毒悪何ぞか
 執念深や彼品七ハ兄弟犬飼現ハが実父糠助とゆれば由縁のあり
 つけの谷を隔く響をさし心の悼を誰や告ん定ハ口ハ禍の門なりと
 舌を掉く是ありの後物食ハ毎必あつて王と詠りて被毒計を懐く

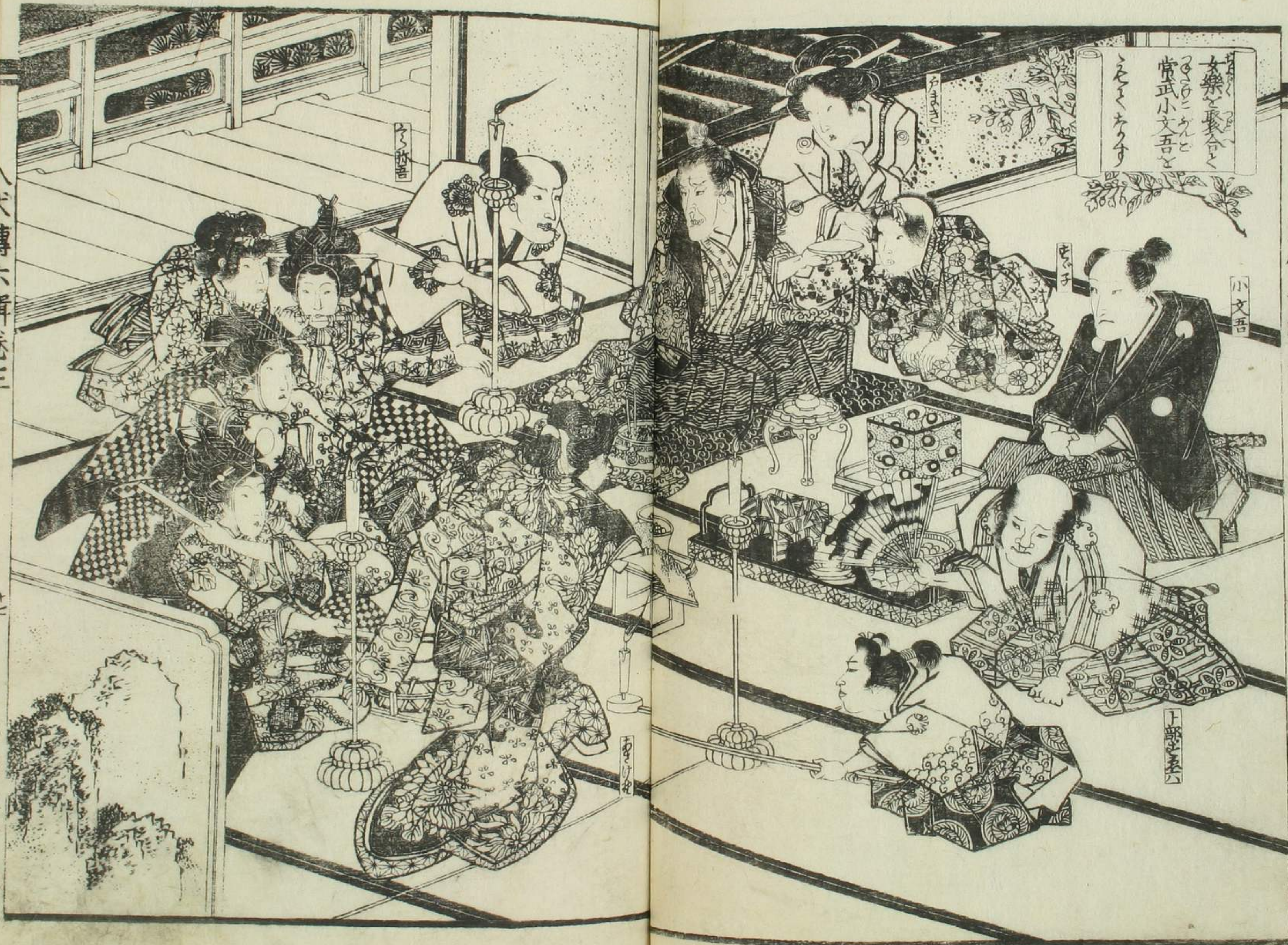
第五十六回

朝閑野歌舞して暗小銀兒を送せ
 小文吾諷諫して高く舟水を論せ

馬加大記常武ハ去歳の七月小文吾を推苗め倒籠る言と心か入る當時
 彼犬田小文吾ハ智勇究やく悔りがく渠ハ當家仕へ必あつたの仇と
 かんたれが今追遣りて他諸彦の佐とせもあつて不快なれば渠を竊
 害て後安くせむと介後枕中ハ毒をおへて小文吾ハ羞めせしめ
 驗もあつてあつてつと訝りて又烈に毒を飼くと六七遍及びか
 ども僅ハ一日半時ども病煩れどもあつたが常武ハ呆れ果て彼奴ハ神仙不
 死の術を受るものあつてあつて強今死あつてもこの処に不出るハ何
 ぞあつせんやとつ鎖を繋ぐその害せんと謀りて且くあつてあつ
 程ハこの年ハ果敢かく暮る次の年の春三月の比庭掃除も蒼頭品七
 一日小文吾ハ長物をとりて此事の趣を顛末ハ定りあつたねど
 悪むを告るその折配膳の男童がわろけあつたつてあつた

常武は報しつ常武はくも領たれ日あり女を密張孔目よ
 ありてをこれのやと知る誰中あれこのもも蔭をいひあふ
 とく知らせよと具き亦く壺の菓子とて紙小包を投与へり
 これ ちやちやさう 憎むるは然とて罪せんゆの果しと
 小文吾が猜せしごとく竊小毒殺あつてこれありく常武はくふ思念を
 旋の品七奴が口を喰ひあり小文吾のくあひを知らるるこれい
 年来大望あり彼身徳の例不傲く自胤の腹を切らせと子鞍弥吾常武
 當城の主とて千葉介とてあつて日かあれども自胤の鎌倉の両管
 領の後衛あり管領これを非義とて大軍を以て攻められ毛を吹てを
 求ふとあひて年月を過せしか方便を以て小文吾を腹心と
 計較既決り折も欲得とあり程小此より鎌倉より女田楽の色子共
 五六名石濱の城下小来ありしゆゆ常武はく声色との嗜む鳥辭の
 騎者ありればは技小長て且貞妍は淫婦を多く婢妾とて生平小歌舞せ
 らるるもの飽を他郷より来る俳優も己が愛するものあればその
 費を數ふとて幾月の久しを家小置置酒宴の真を備ふるを
 この度も件の女田楽小招たりてその技を試みるも中且閑野と
 少女の年ハハむりやく顔色も美しく技小堪能のめありればを只一人
 留置く一日若僕九念次をり小文吾よひさう去歲初秋一面識の後
 白駒の足撥速うく暮月も近 たり豫てもあるとあが主君の疑念は
 解せ良某口小苦の故小諫言その甲斐は恥之心あは疎遠に過
 たり斯長々一は菴居を痛くをりて切をり母屋へ招きて

耳小夷起らる犬田との君父小憚まりあれは面をあらせかこりしを本意
 印と云ふひふの因坐の一刻千金先や背胸を露せし武藝の業の
 りあれは弓馬撃劍槍棒巻法人の劣さうのあつひどもいふごとく遭ふは
 戦場の進退の熟士小穰りく姑くいらむ折もあつた下試合希ひかといふ
 常武微笑く何を孩児が小よくひふあけと魂いづむしあれよ兒折あつ
 四天王小を召よと酒を飲せよやよとく急せば次の間小聚ひ居るは
 馬加が股肱の善黨渡部綱平ト部季六田井貞九郎坂田金平太八所
 阿と応じて進み入る額をつれその席末小居並びく尙小文吾のち對ひ
 囊小當所へ入來の折主人の側小侍りく一面を怒られぬん某の渡部
 綱平某の云云と名告とそれ小文吾のいと懇懇小礼を返しく各位を
 源頼光の四天王中も劣らざる勇士と誰し知るべ兒姓名とのひ骨相といひ
 憑くくつれつれて四人の羞る色かく賢察のめく不幸中一腕を破るべき鬼
 女小ぬあつて土蜘蛛をよ変化もゆせ野飼の牛小ころを付れと鬼童丸も
 躲れをびと野の道の遠るれば大江山路を踏みはく酒顛童子が舊迹
 どもえる上をゆきりし残念至極ゆと續語為句の似非的宏言小文吾の
 堪ぐ兒笑を袖小包あむむち咳せむ紛々るかて又さうある散と添て
 け通とあつて益を巡らも程小鞍弥吾と綱平小のいづく癖ある癖あれば
 尙輪のゆく小文吾をとり環一々誇良小武藝相撲の技をいふと襟をく
 論まれが常武これを推禁やくあつたもや何るももごとく武士の武士と
 糞糞の糞糞臭気かめくそと素より此りあればあつたけあつて鳴呼す
 立のく退けく季六をの呼ゆめ汝ハ霎時其処をそれ分付る要る
 ありとあつたぬさう微笑あつた小文吾をさうりく犬田とのさうを傷痛を



八犬傳六輯卷三

十七

角良堂藏

女樂之聚會
賞武小文吾と
名々々々

小文吾

上野之妻

八犬傳六輯卷三

角良堂藏

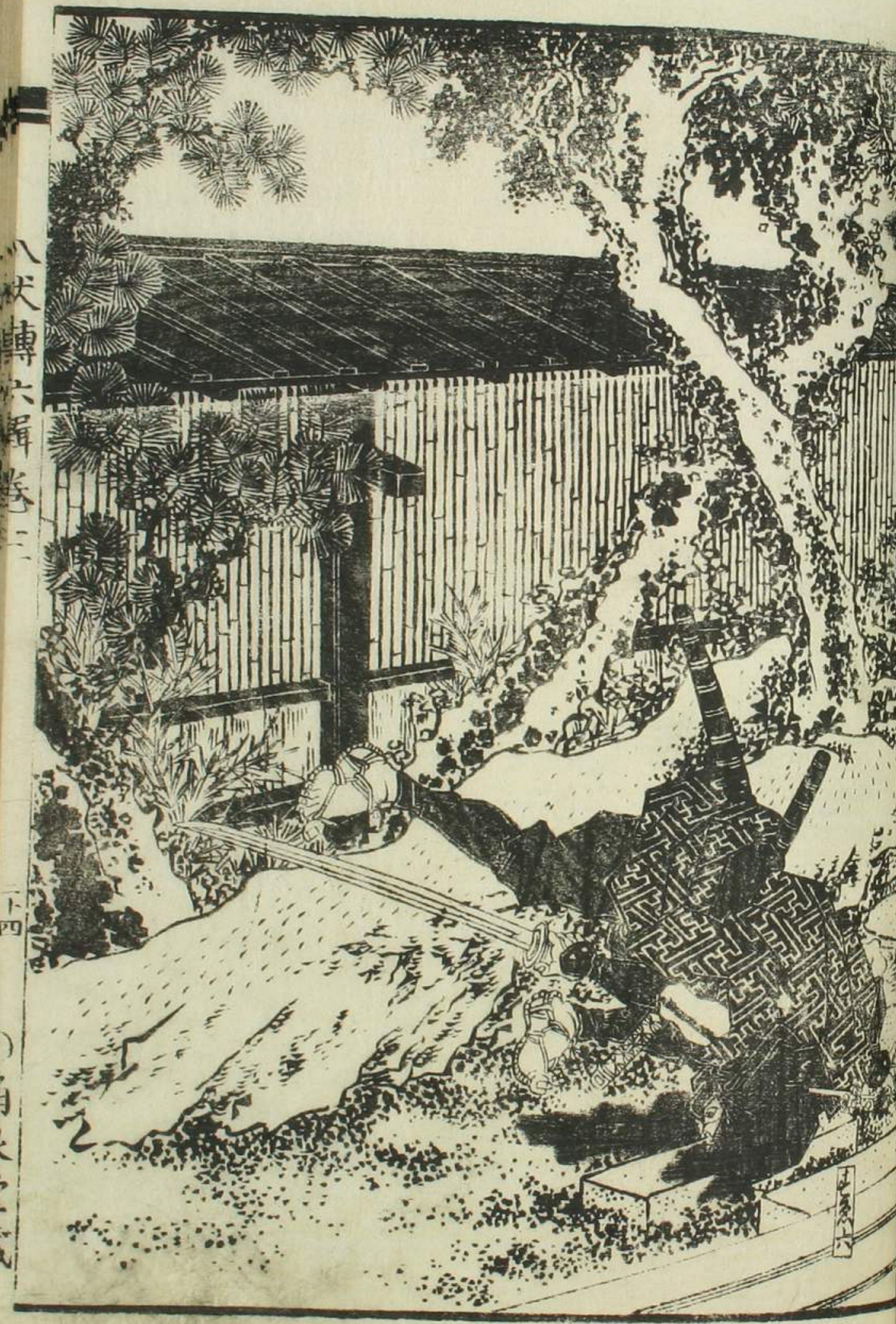
抑田乐的幾番ある。題目も亦多かり。を教へんはとゆひ。あされ。就中呪師
侏儒舞。田樂傀儡。子唐術品。玉輪鼓。八玉之曲。獨相撲。小獨。雙陸。無
骨有骨。延動大領之腰支。蝦渡舍人之足仕。氷上專當之取袴。
山背大御之指扇。琵琶法師之物語。千秋萬歲之酒。禱腹鼓之胸骨。
蟻娘舞之頭筋。福廣聖之袈裟。未妙高尼之極祿。乞形。勾當之
面現。早職事之皮笛。目舞之翁體。巫遊之氣。裝貌。京童之虛左。
礼東人之初京上。これら。男田乐的。會宗。と。所ある。を。又。この。君を。
男の技。中。堪。能。中。幾。節。竹。の。一本。立。八。尋。細。の。綱。渡。これ。は。特。小
本事。之。は。ゆ。り。あ。が。る。更。雨。これ。は。後。會。の。事。と。と。め。く。今。宵。八。且
今。様。の。儂。踏。の。態。を。仕。ら。せ。く。御。笑。お。侍。へ。ま。つ。人。是。則。桃。源。の。故。り。小
做。ひ。さ。の。い。と。も。愛。さ。れ。一。曲。也。山。谷。ノ。桃。と。名。つ。け。り。その。為。南。場。介。の。ま
と。と。暗。り。け。る。逃。が。如。く。次。の。間。ま。て。退。れ。る。跡。中。ハ。咄。と。婢。女。ハ。腰。を
抱。へ。く。立。し。お。を。け。堪。を。弗。と。噴。出。す。そ。う。終。俯。し。と。笑。や。あり。山。田。の。畔。ハ
樹。隠。れ。て。日。影。不。樂。と。集。る。木。兎。の。う。ろ。も。知。ら。ず。群。雀。を。れ。う。狂。入。散。動。也。
且。く。鳴。も。已。ま。ら。ず。于。有。然。程。は。あ。り。う。ろ。も。苗。の。音。ハ。鼓。の。あ。へ。打。を。え。く。
立。ぞ。あ。げ。る。且。南。野。が。態。も。體。も。美。し。抑。是。ハ。讚。岐。州。八。嶋。壇。の。浦。の。ゆ。り
あ。り。引。削。山。の。麓。は。住。ひ。の。賤。婦。を。う。い。一。日。里。の。少。女。子。と。つ。れ。立。く。同。國。八。栗
山。ハ。遊。び。の。程。お。ま。の。谷。川。の。水。上。あり。ゆ。も。愛。さ。れ。盆。の。流。れ。基。ぞ。之。ハ。原。来
この。山。の。奥。を。浮。世。を。避。く。る。神。仙。の。ま。り。お。ま。を。や。ゆ。ん。何。処。を。も。ま。け
登。り。く。く。の。と。を。ま。と。と。ひ。の。峯。の。白。雲。谷。の。水。源。遠。く。基。ぞ。え。れ。ば。現
玉。鉾。の。み。ち。を。さ。ふ。あ。り。と。み。桃。の。林。う。ち。と。唄。ひ。お。せ。る。声。燈。々。佛。比。國。に
あ。り。と。み。鳥。の。迦。陵。頻。伽。も。か。く。と。と。目。あ。り。舞。の。袖。翳。を。扇。の。蝶。々。の。

閃やく桃の花 釵兒小光 照添ふ燈燭の花 物々序 破急の節曲比類
あへて世の俳優人の教をうけし 常武夫婦 鈴子小ハ瞬もせむを惚
る 紙門障子のあけより 覗く奴婢小の幾人 欺人を撥け推し
あへて頭小頭をうち累ね 目小目並べく 餘念を脱 眺よ時を移り
かて 儂曲も果し 戸牧ハ豫く 婢兒小あちけさせ 纏頭の袖
一襲をゆいでささく 且閑野は取らせ 肩小うわけて 横笛
鼓の婢兒小の先小立を退け 時ハ四月の下院ゆく 夜いと短き
比かれハ曉とも ぬれ鐘の声小東へゆく 小文吾ハ困り果ち
俳優の稍終るとやぐ ありト夫婦小別を告ぐ 退き先とてけり
常武頻り小推苗ゆく 何と急ぎあふぞ 是処も彼処も 殊さ
この新亭ハとく 眺望の爲小建より 彼首の窓を 推開け 墨田河の
流れ大く ぐぐぐと 即便これを 臨江亭と 命け 又樓上より
眺れば 牛島葛西の海邊まで 見え 眼下小あつと 對牛樓と名つけ
う 誘め 薄茶一服進らせんと つけ 小文吾 推辞む 小側小
置る 腋挿の刀を取て 立んと 白銀をゆて 造りかへ 桃花の釵兒の
何の程 ちろ落か 刀の緒は 挟まり 誑る 誑る 誑る
侍り 婢兒共をえう 何人の遠く 連まわらば 何と問つ
取て 一箇の婢兒受とく あや 且閑野 物小侍り 嚮み 茶を 捧げ
と 振送せし 知らざらん 小文吾 領た 考ふ 遊と 楚と
届け 小文吾 對牛樓 小う ち登れ 常武 婢兒
ホ小 雨戸 送る 閑せり 當下 小文吾 且頭を 叩て 彼此 小樓上 東向
中 僧一山 款印 對牛 彈琴 四字の 額を 掲げ 左右 唐の

王勃が蜀中九日の詩と白字の鏤る竹聯あり時ハ今夏と秋との違ひ
 あれども犬田のぬちあるも亦望郷の臺や北地より鳴雁のあはれは
 ととのんと詠れり都鳥ハ今もあはれをかくて欄干の身を倚せてはくくと見
 るとせば天のや明し横雲の色紙のたつる筆のあはれを誰が視せし墨田河
 前面は黒地牛嶋ハ宛も水も臥せさるる彼方蒼地柳嶋ハ糸よる清小
 靡くふ似たり世間の何人警人朝開趾の如く満誓の詠を歌をあら
 波小漁翁生涯一葉の舟東へ漕ぐあり西へ歌あり葛西村落幾
 戸の烟南に沖あり北は滅るあり鎌田浮田行徳の浦々あれ秋とぞ
 多の目も迫り登る旭を舊里の方とすれば翁さびし人の又親戚の
 舟の宵小港のあつる甲斐とわかれ剣刀を浮橋の中絶し石濱の
 玉塵あり秋の蘊れる艱難憂苦の遺蹟ハ絶てありけり常武これを
 慰めく犬田殿々々々物をもひあめを尺蠖の伸んとすると況且その
 身を縮むるへの窮達時あり運ぶるべしこれ彼船をえあはれ久し
 水際ハ繫れりあり又真帆揚るるあり繫れり船ハ走るるべし
 船ハ留るるべし和殿が今の滞留も只この理をり悟るべしこれをさるる
 譬言ては君ハ船あり臣ハ水あり水ハ舟ハ船を浮べく又舟ハ船を覆る自亂
 暗愚の弱將蒞をさるる辨へぬればのぞく和殿を知りぬる人彼鄰
 國ある敵のぬち滅されんと疑ひし某も亦千葉の一族馬加光輝が怪
 けれバ代り取るとも誰り咎らん然れば享徳の例ハ倣く自亂ハ詰腹
 切らせし見鞍弥吾常尚を當城の主ハせせとあはれなるあはれなる
 智勇の軍師をひび和殿今ありこれを佐けく事成るとは葛西の中
 半郡を宛行るるけり引とんと小藤を進めて亦他多しあはれ其けり

小文吾等々々貌を改めあをひひけしめた密後を詮せしめしめたる某素子
 学問せしめれば聖の教いあふし知らねど譬を取て利害を推ん爰所は只水と
 船との反覆を説くども順逆の理は暗なるべしやゆつとわれ水の船を
 浮むる経ありその船を覆まひ變え苟も只その變を己が利としてその経を
 取らざるゆゑを乱臣賊子の心あるべし君臣礼あり舟車は楫あり君臣
 礼を失ふれば舟車は楫を失ふがや一旦その利と爲るといふとも滅亡
 せんや疑ひず。いふやあり臣とてその君を弑せしめれば誰うあくその文
 字を保つる希望は非義の妄想を除去す千葉家の諸葛といはれぬ
 徳誼後世に芳流し子孫餘慶を兼るをあるん某武藝を好みども
 短才中々文学をいふる人の佐とあるべき只その志をわが忠信の狗と爲
 とも乱離の人とわづらふとの念を外のゆゑと憚る氣色もかく答へしや。

常武ハ勃然と怒り面を見れても又た物に物に忽地荒余と云ふ
 笑くつら趣道理小構へり。これも亦如右やあのみ。今の言の教を老漫
 和殿を試しつるふあふあといふと憑り心あかりけあひを先早飯とあ
 せんかこをへまをといひけしめたる樓下小誘引ひしと小文吾の後方ふ
 立つ階子を下りて別を告又九念治を送られて幹津房小還りたる
 却説大田小文吾のむら緑類小立出く面を洗ひ口漱んとそ浄は盤小
 立する程小母屋の庭より流し入る見の水小木葉ありそ浄は盤小
 中入る心ともかく取あげんふあわ和夏羅葉と唱ふ木葉ありそ
 その葉の裏小書するゆあり。ゆかくあろ小怪とて返しゆあらんふ
 二け入る一葉とえたる麓路小流れもゆよ谷川の桃一首の歌と續れ
 たり。熟そのころをゆあふあ昨日酒宴の席上ゆく彼桃源の俳優とる



八天轉六輝卷二

下四

用泉堂



桃花乃
 釵見く
 刺客と
 敵殺す

小文五

清見堂

ちる程小文吾をく走りぬる癖者等と叫びもあつた刀を晃りと引抜き破
りては吐き吐きと走り刃の下を彼此と潜り脱て一間あり後より飛退り
やよ大田より吾府を降り早まき怪我をさしあつた声はけり女子小文吾
訝りあつた刃を小腋に引著る然の女誰ぞと透し見る天をもちり鮮明の月を
吐く雲を越過る限なき光おぼゆるびえればえ忘れしぬ且開野へはりそく
小文吾油断せぬ日面を怒るものも物ひのりれりともかた女子小
似げなく夜をもち垣を乗り越り界をたひ潜びくまつた故もあつたと問質
されく恥ろりげふその疑ひの理りあつた誓ふもつた打ちけりおん刃の仇を替
へる花釵見をえぬの心は大きくあつたれもせん小物のぬえを相見する夏
野の男女花結めを露の玉拂寄向ひあつたあつた神とくは掘り流し
たの木葉小示せり小莖の深れぬと今ゆふ知らぬ貞情をも懐ぬ

悪の心切つておん刃のひかりの死人とあつた覚期に
心づくと怒られ小文吾もく冷笑ひ浮る技めて世を渡る俳優か
わんまゝ素あり色を好むぬ罪か囚れをかり憂苦し外れ
化る恋小靡んやそを実情あつたて竊小人相憚れくこれと惑年
便黠をこのつれて恨み顔はしつち瞻仰く嚮小贈り秋
のさあ然の疑ひを稟もせん女子のうを有る花釵見血を添せ
誰かかりたをえられん希婦の陝布胸あつたて尽せ誠の届くはどく
投しぬねと刃の怖れを身を衝附り覚期の気色小文吾はあつた及
合直む刃を引提く背のくふ立遠りつちあり揚るも些も騒ぐぬ女子一心
項を延し常をもち合つたつちぬる小文吾要時とらんがえり刃を鞘小
綱をも治りがり當座の難美に要時念とく辭をやらげ死をせむ

絶望一。只翌の夜をもちぬ。ゆづとをうせひひけて故の樹の間に遠りぬ。
裳寒げく築垣へ登りし。多死田樂の技不熟とる身の翩一閃と松の
ふとけけ。彼方の庭へ降るとも。不姿いんをばありあり。嗚呼伶人。も隠君
子なり。歌舞妓。中亦節操遊俠か。らんや。む。逢夜山の蟬丸。栄枯得失
遇不遇の理りを諷詠し。みづとこれを琵琶奏し。てゆく濁世の煩惱を
脱離せり。又華夏の静娼ハ鶴岡の社壇あり。廷尉別離の愁訴。小代。小
吉野山の歌を吟して。右幕府の震怒を恐れ。況く千壽が重衡と相憐へ
死に至り。又微妙が親を慕ふ。おく尼ふ。如規亦その所をぬ。りといふ。
畢竟且閑野。竊小文吾を資け。又甚麼ある。話説うある。そと次の
巻小解分。とんく知らん。

里見八犬傳第六輯卷之三終

南總里見八犬傳第六輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第五十七回

對牛樓は毛野讐を塵ふ也
墨田河小文吾舟を逐ふ

却説犬田小文吾ハ且閑野が又垣とうち越て。も母屋へ還り。そを
要時目送り。躬て臥房。入。心おぬ。ぬ。さ。ゆ。や。也。且閑野ハ田樂
傀儡。稀。男魂ある。の。百歩あり。の。築垣のほとりあり。
釘見。と。季六。撃。笛。た。も。煉。と。い。飽。ま。を。これ。を。獎。し。る。心。操。の。雄。と。
ゆ。今。圖。ら。ば。彼。少。女。の。資。ふ。より。く。の。処。を。脱。れ。さ。る。を。ば。海。月。の。骨。よ。あ。み
ゆ。も。あ。り。得。ぐ。死。幸。ひ。あ。べ。れ。ど。も。常。武。も。亦。播。拊。の。敵。み。や。も。あ。ら。ざ。れ。が。
城門出入の符牌を。と。等閑中。と。盗。と。ん。や。り。事。成。ら。ば。且閑野ハ命を

八犬傳六輯卷四

角泉堂藏

其処小隕をべ。情慾といへど俠氣ある可惜少女と云れ如多は喪んず
 不便とて今ゆ術をわ。女々く物を多んず。彼我が運を天に任せて
 盟の便宜と俟たむ。とある果一宵の夜の明けに五月十五日。この日朝あり
 雨降を記く。未の比より天霽なり。小文吾へ心よがる。李六が撃れしを
 常武を多く猜し。かば多勢をり。これと撃るべし。今や討もた来つる。飲して
 刀の痕又を磨し。終日油断せざり。いづどの男童ホが三々々の飯を運ぶも
 日。ろ小異あるを。くけ。あ。ろ。かく暮ふけり。故あ。う。於常武へ。いぬる日對
 牛樓まで小文吾小密謀を告て相譚ひ。絶く兼引氣色をけれ。只
 速に結果く後の患を除人として且男童ホよ。ろ。ゆ。させ。日毎々々
 小文吾が為体を窺せ。九十日あ。ろ。を。經。く。小文吾ハ夜。く。日。と。如。く
 用心に際か。り。程。よ。や。く。は。倦。疲。れて。ど。り。く。熱。睡。ま。る。と。あり。と。彼
 童ホが報。く。心。を。し。て。常。編。よ。ト。部。李。六。と。り。一。夕。小。文。吾。を。報。す。

せんと謀り。一。次。の。日。は。至。り。も。李。六。か。り。来。む。還。之。小。文。吾。ハ。恙。も。か。く。て
 幹。浄。房。よ。を。り。か。れ。ば。常。武。よ。く。疑。惑。す。又。男。童。と。り。密。々。に
 彼。処。の。や。う。を。窺。せ。し。曲。演。の。ほ。ろ。草。葉。小。塗。れ。鮮。血。あり。又。曲。演。の
 水。常。は。真。り。て。薄。紅。なり。き。と。報。く。常。武。頻。り。太。息。を。吐。き。吐。裏。小。子
 や。原。来。昨。夕。李。六。ハ。返。撃。せ。れ。し。小。文。吾。が。その。死。骸。を。水。に。沈。め。て
 隠。せ。り。か。ん。れ。その。死。骸。を。穿。鑿。して。人。殺。の。罪。を。り。小。文。吾。を。報。す
 せん。幾。十。人。を。り。も。自。亂。ゆ。れ。非。と。て。咎。め。あ。ふ。ま。り。か。り。ん。
 ごとくや撃せん。か。や。せ。べ。き。と。要。時。肝。膽。を。摧。く。め。の。う。ろ。こ。の。日。五。月。十。日。ハ
 その子。鼓。弥。吾。が。誕。辰。ある。と。り。年。毎。小。城。中。多。甲。し。を。招。聚。合。て。壽。の
 席。を。開。け。酒。り。遊。ぶ。吉。例。あ。れ。ば。巳。と。を。ゆ。む。小。文。吾。を。替。捕。る。一。錢。ハ

醫師亦相告て血塊と云ふあり。辛く命を助け、れて躬く追放せしなり。
 かくく由縁を心あふ相模州足柄郡大坂の里に落函りくその年十二月。
 安らふ吾侪を分婉に然れども十葉家には身を憚り女子と人あは報之
 にか名を毛野とつけられ、二三年の程やて貯財も竭果し母吾侪を死
 抱死つて寤、其処を立出て鎌倉へ赴くも、所を之世渡る便着あは、
 母は只俳優の聲と拍し妙なり、女田樂小雇れてその技をのくと、
 吾侪をこゝ音ひり、不知馬加し知られ、とて八九歳の比ありて吾侪も
 亦田樂の隊に入れ、見暮し技と習せられ、か、熟るる易に遊藝の人を
 是と見開野とめて、難く不便趣舎かていくその月日を送る、年十三
 あり、秋憂り積る母の大病頼とて、おとく兄を比吾侪と枕辺に近づけて
 かん身が素生に如此と々と親のう兄弟のう馬加龍山両箇の宛家の

車の越速もかく告られ、浅く、心を悲しく朽と、いりて両箇の
 警敵を撃て亡父の向ま、これの子と生れ、甲斐を縁連とて往方へ
 あれね常武へ今も、石濱の城はあ、先常武を警備、後縁連を
 索ん、のせこの時、ひ決や、か、母の看病、暇をられ、且く時を俟程よ
 哀、乳を垂乳女、その年の冬、身あ、ぬ忌、とも既、鬨、あり、この石濱へ赴、
 い、も怨を復さんと、あ、甲斐、此の刃の生、育、輪、鼓、品、玉、綱、渡、り、或、今、様
 田樂舞の外、あ、始、る、技、も、あ、び、大、刀、技、く、術、も、あ、び、て、彼、大、敵、を、撃、ん、て、
 か、あ、く、も、あ、び、れ、心、も、復、讐、の、時、を、延、し、田、樂、の、技、小、假、托、け、夜、に、
 日、と、く、習、覚、し、自、得、の、武、藝、へ、擊、術、卷、法、鎗、薙、刀、銃、銃、組、擊、鏢、鎌、誰
 誨、る、あ、ね、心、を、師、と、せ、自、然、の、煖、煉、既、三、年、及、び、神、物、有、て、か
 術、を、祐、ら、く、と、あ、び、る、自、我、一、流、を、究、め、り、父、祖、八、千、葉、家、の、一、族、之、家、系

加賀守 車馬

正し武士あり。これゆかれ功あり。俳優人と勿のそやたす。男子と
生れぬ。女子と成りて世を渡れる。久間の大不幸。これまた女の年と。とども。
又これかくのちと。彼常武ホ。近づく。此宿望を遂る日。老を何此。終や
あつてよけれ。あひえ。心も。わ。日毎の變化。粧物ののひ。進止。い。ま。あ。つ
女子の。お。あ。と。近。ろ。女。田。樂。の。一。隊。と。列。立。て。下。あ。この。地。小。草。う。い。誠。心。の
致。し。所。天。助。空。一。く。い。と。求。む。仇。人。常。武。が。招。け。不。心。下。廿。日。あ。り。母。屋。追。尊。一
程。よ。人。傳。ま。く。和。殿。の。行。状。世。稀。あ。る。へ。た。勇。士。あ。ん。を。捨。殺。し。ま。べ。た。あ。ら。び。
こ。が。宿。望。を。遂。ん。日。は。相。伴。あ。く。ま。い。の。あ。と。あ。ひ。お。け。れ。舞。曲。の。宵。は。竊。桃。の。花
釵。兒。と。座。迎。よ。送。と。これ。と。試。み。尔。後。桃源。の。歌。を。い。相。憐。む。の。意。を。示。し。又。昨。夕
常。武。が。若。黨。李。六。と。刺。客。と。し。和。殿。を。害。せ。ん。と。謀。り。し。と。これ。決。意。を。述。べ。跟。け。
あ。の。祭。壇。の。ま。ま。あり。釵。兒。を。い。の。ま。ま。李。六。を。擊。曲。り。さ。る。か。の。折

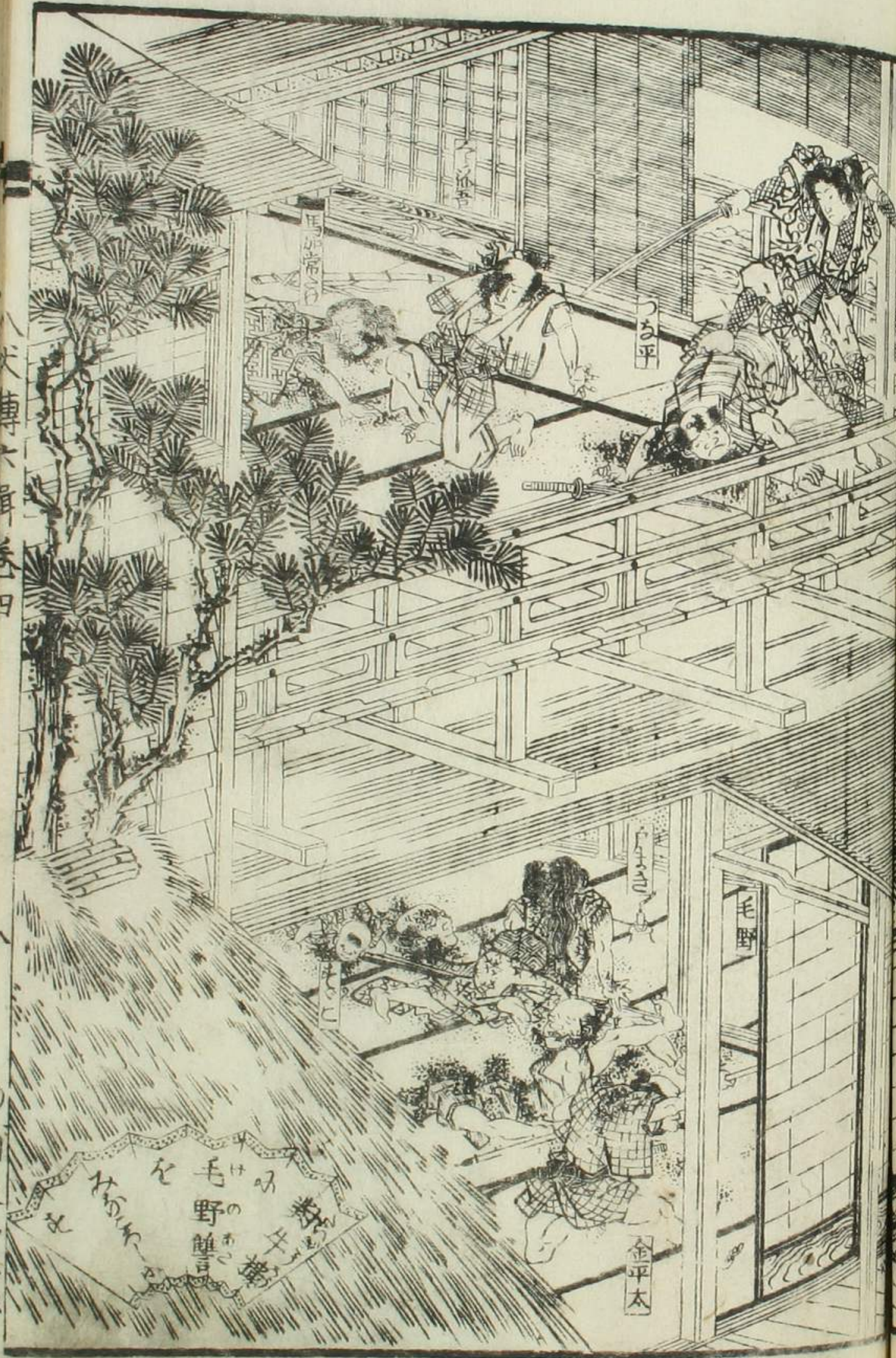
艶語をい。相譚。あ。り。情。を。示。し。と。い。ひ。和。殿。を。試。し。し。は。迷。い。ぬ。大。丈
夫。折。下。裏。中。も。恥。る。と。や。今。い。か。う。と。い。ひ。六。城。の。符。牌。不。假。托。く。約束。あ。ら。ひ。
親。の。讐。を。替。捕。ら。ん。夜。不。相。伴。く。走。り。去。ら。ん。と。い。ひ。天。あ。る。か。時。あ。ら。け。け。ん
鞍。弥。吾。常。尚。が。誕。辰。の。壽。祝。と。し。主。客。酒。宴。日。を。消。し。真。夜。中。比。は。席。を
収。め。く。来。客。ハ。皆。退。去。り。常。武。親。子。主。従。ハ。彼此。ハ。醉。臥。し。り。今。宵。怨。を
後。さ。い。何。の。時。を。期。志。死。死。と。して。隠。指。さ。利。刀。を。竊。し。引。提。く。窺。へ。常。武
父。子。綱。平。ハ。對。牛。樓。ハ。假。寐。せ。り。先。を。這。奴。ホ。を。擊。人。と。登。る。階。子。を。潜
龍。の。蜚。颺。を。い。る。心。地。で。潜。び。寄。り。常。武。が。枕。邊。直。立。く。天。地。不。響。け。と
声。高。や。ら。ふ。馬。加。常。武。と。く。覺。よ。昔。年。汝。が。讒。訴。よ。あ。く。杉。門。路。を。登。れ。る。
粟。飯。原。首。亂。度。が。妾。孕。あ。る。迷。腹。兒。相。撲。の。犬。坂。老。生。れ。く。の。里。の。名。を。家。跡。に
替。へ。る。犬。坂。毛。野。亂。智。あ。ら。り。親。の。讐。兄。姉。ホ。の。怨。を。復。せ。今。曉。目。今。起。る

大傳六傳卷四

六

涌泉堂藏

勝負を決せむと名告り呼覚て枕を礮と蹴て常武忽地駭死
覚る脅迫ありけり腋挿の力を合て技んとけりも果は丁とうの刃は刃子
常武が首のてお向へ落る餘る刃尖立る膝の骨をうけてぞ研りける左右は
中へ鞍亦吾細平齊一覺るうち駭死杖の癖者脱まると共ふ刀を引技
打振り響んとけり右の受左は拂ふ奮撃突戦しと畫く鞍亦吾が刃を長
哩と聲落共駭駭之遊んとけり背をうけて仰反るところを横るふ所
をわらる腰車やらわたりて仆せりこの大刀音は女房戸牧の驚死覺て要時
あはれこそ何ぞと叫掛る登る階子のをわらるは怯む渡部細平刃を
引く逃んとけり撞見際も眼眩しくぞ助撃とをひえん戸牧を一刀礮と
破る破られ苦と叫びもあへど階子の上より仰るふ落る下りも女児の
鈴子の母を慕ふ起るは母行々と叫けけるその頂の真中へ直刺す
忽地息の絶てけり細平これ心はけしけん呆迷を引返してぬぐひ吾儕不
殺て蒐るを隻の難切に撃捕りてを樓上へ敵もや残る奴原目も物
せんと思つ小樓下より立て間毎の紙門蹴放せども酔醒ぬ金平太老僕
九念次貞九郎奴隷お中も多勢と思む短槍捍棒貸刀得物々々を
打振る足並取次お響んと競ふ縦横曲尋は追崩を群る羊の牧の中へ
猛虎の衝て入る如く薄く負せし井の貞九が遊んとを韓竹割返は刀
金平太が短槍を丁と破折く畳掛る合掌撃最期の十念九念次も数
所の痛くは後燈々々遊るを透る背よりあひせける大刀風血烟立ても
死でける残る奴隷の幾人う僮僕中も遊迷ひて追詰られて庖厨の土間
高く積る米苞の蔭に推合減合躲る程は遂に米苞を推顔して忽地



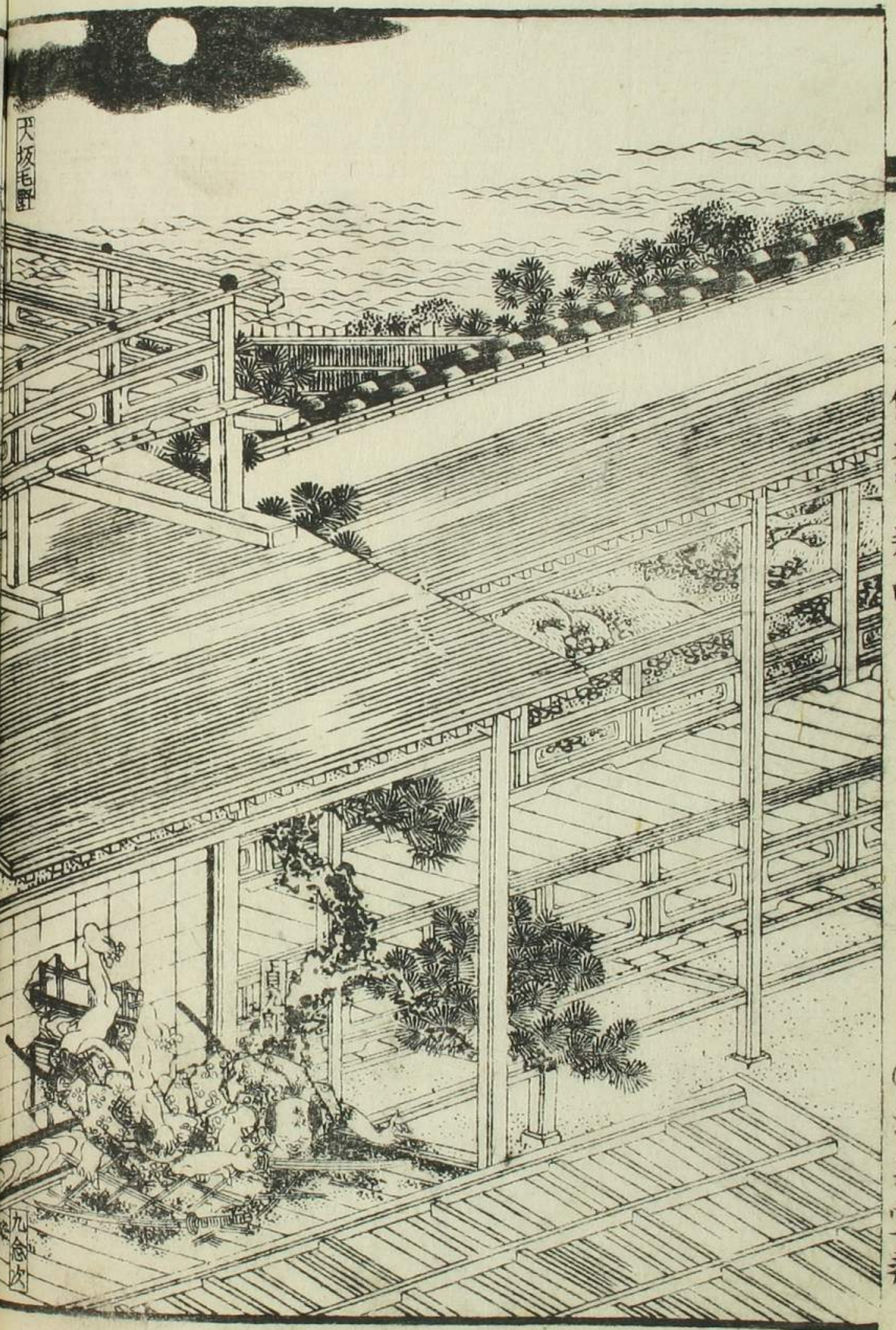
三浦定城

三浦定城

三浦定城
を毛野
の
三浦定城

つち平

金平太



天坂毛野

九念次

三浦定城

三浦定城

控と墜かれが密張孔目の男童ホハこれ小撲れて目子飛出或ハ肩骨腰の
 骨撲扱られて自滅を取るもの六七人及びり残るも半死半生之躑伏て
 身を合しつ免をせんと勸解しつるものも無益の殺生と云ひ捨るあまを
 撃つてゆび樓上より走登り之仇人の血をさく傷の壁へ為父兄塵塵言為奮
 主勤好自今而後知君之為君勿使縹葛後倒羅文明十二年己亥
 夏五月十六日粟飯原首胤度送腹子犬坂毛野胤智十五歳書と
 五十餘言を書留め馳て馬加常武が首級引提くる事と息吹あむ説
 示せ小文吾の字くす毎小頻は感嘆の声をこぼれ初よりもの言と行ひの元
 勿ぬと世小有るに少女小ををひいしを跡を扱入言は傳せ栗飯原
 大人の子ありよ三歳ハ永妃胎内之未生ハ蕃害を避られも天孝烈の
 勇士と生トく宛を伸世を濟りせりハ一大奇事といふまのの御邊生年
 十五歳三年胎在りいと数て十七歳といふを人ども單身中七十數人の
 大敵と撃彈されハハ一へハのまきさうも後の世ハ有るさるべし
 べたも夥ありまきさうも多かれハ清談の室ハあり
 夜を曉ま六城兵ホ捕籠られて擄とありの後悔ありん
 路ハ御邊のありつらと問れて毛野へうら領妃某馬加許在の程
 夜毎ハ臥房を擧げて城の要害塹の浅深あり脱れ去らんと云その
 処をよくえ究やう誘あへといひりて乱れ髪を推執ね仇人馬加常武が
 首級引よせて髻と結合して腰ハ著裳と高く帯ハ夾きて先立立諸折戸の
 笠木ハ花つらむかけて内と外面へをり立て輒く鎖を換断捨てやと門
 扉を推開けバ小文吾ハその神速ハ感て舌を掉ひてこれハ寔ハ及びごと
 稱へく俱ハ馬加屋敷をさく潜やうあつれ立くやう程ハ毛野ハ豫て

八十八 傳六 骨 卷四

九

○南 長 堂 藏

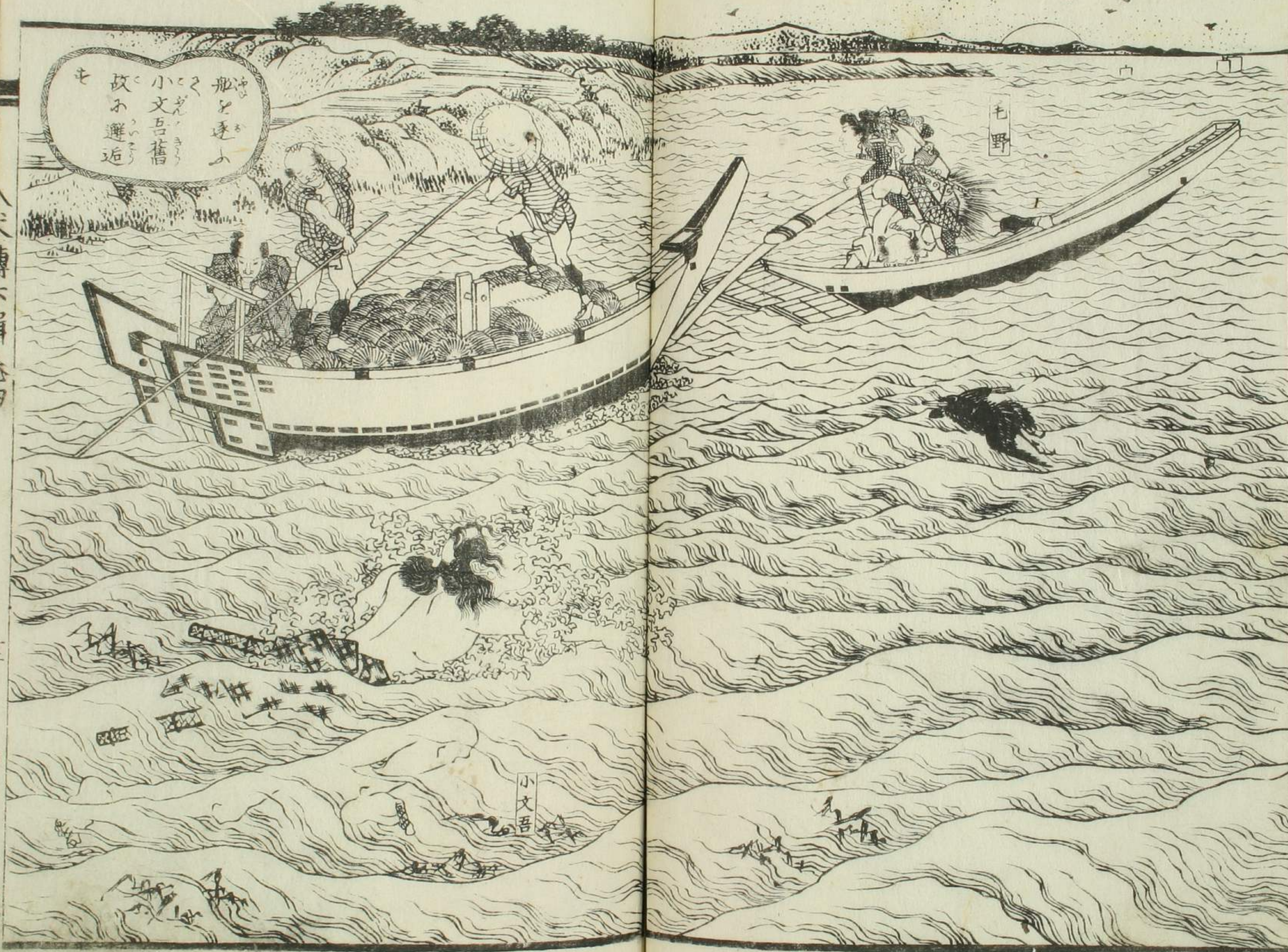
足元置る。搦手の東の土ある樹粒深地中より到り。この処の壘の幅も
 廣くね。矢野ありあるべし。當下毛野、腰は著る準備の釣索を取らば
 その索の端の処に懸丸にたる物を附り、杖その物に索の端をさかこの
 松に結苗、件の丸を握合て前面の水際、斜に柱を揚を望く。擲つに
 寛違、その餘丸ハ三四つからみ着て引結ひる。どよみなり。けしむ向へ
 渡えんとて、件の索は足踏みて走りて向へ赴く。平地をゆより易かり。これハ
 小の吾、頻に感嘆して、續々、渡えんとて、どよみなり。下條の索ハ足を
 引へくも、おれ且呆れ且羞く、舊所ハ躊躇する。毛野ハ迫ふこれを足て先か
 ぶる。索の端をわゆる揚へ結苗、ゆめひあわへ渡り、其の天田ハ躊躇ふ
 ころ、吾、併に肩より、おれとて、背をさし向ける。その身より、二足もいど大に
 小の文吾を、頼く背負く。徐々と索を踏んで渡り、ゆめ自若くして、面色
 変せぬ。小の文吾、まゝ、駭然感して、むす。宇治河の戦ひ、おれ、彼、橋桁を走渡りて
 其の隨ハ、大刀、撃ちあけん。筒井、明春、一、来、法師、ホシ、といふをも、ゆめ、これ、おれ、優、れ、也
 とて、不測の助けを、歡びたり。かて、毛野、ハ、小の文吾を、渡り、果て、刀を、引、技、件、の
 索を、水中へ、砍、捨、て、天、ち、仰、ぎ、東、を、あ、く、あ、く、と、る。おれ、不、陸、地、を、走、り、城、の
 追、兵、お、殺、苗、ら、ん、墨、田、河、を、ち、渡、り、て、俱、ハ、進、退、を、定、む、べ、し。といふ。小の文吾
 諾、み、ひ、て、齊、一、踵、を、旋、を、折、り、城、中、猛、ハ、騷、り、く、人、數、を、集、る。大、鼓、の、音、は、こ、も
 烈、く、せ、え、く、六、西、人、佐、と、え、く、り、る。中、ち、も、毛、野、ハ、う、ち、点、頭、て、察、察、ひ、る。ふ、こ、が、懸
 漏、せ、し、常、武、が、奴、隸、ホ、の、告、訴、あり、て、城、より、駭、の、兵、も、と、ち、俺、們、を、獵
 索、ゆ、く、搦、捕、せ、ん、と、る。あ、べ、し。その、怕、る、お、れ、足、る、もの、お、れ、ね、ど、お、れ、麓、山、塚、連、と、い
 一、箇、の、雙、言、あり、今、は、追、捕、の、城、兵、と、戦、之、何、お、れ、誘、之、共、侶、ふ、を、な、く、前、岸、へ
 渡、せ、べ、し。といふ。小の文吾、一、議、し、及、ぶ、も、ま、れ、も、然、し、を、い、ふ、お、れ、い、と、く、と、後、は、

浦良堂藏

浦良堂藏

あり先不立つ足をも小墨田河原に赴け渡舟を索ふ舟一艘もかりしを
 おもて武蔵と下總の堺川とを名申おふその水上に迫り秩父山より流れ其
 末果一かた海と為る坂東一二の大河なる折しも降つたる皇月雨
 水炭増して波高く浅瀬に絶えおれぬ岸に繫る船もわおとわおど
 河原を幾遍とあくゆけり度よせし程天のちかちかも明をわれき遠く
 ちかちか馬の足音塵埃を蹴立て夷々たり毛野小文吾のこぞをえん追兵の
 既に近つぬ殺脱て陸をよらん又この河を渡さん決てぬ水際小立
 在り浩処小千住のたより流し随ふ柴船のおもこの岸を離ると僅
 一及むりやと棹とり悩むるけり毛野小文吾の舟一ちかちかて天の祐とを
 抗くや要時等便船せんをへ寄せよと招けども頭をやくぞ漕ぐゆ
 毛野の機をやく大勢怒りて憑む不聴ぬとちかちか貸せども今借んぬと罵り

あり水際よ添めて下町なる追蒐れば舟人のあざと笑ひて棹とり扱め
 船を推立て漕却ゆかんとほ程は毛野へ閃と身を跳りて一及許隔り
 舟へ發動と飛入り舟人れは駭に怒り棹撻取て敷んを物々しと引
 外に怯むるを蹴仆して足下小楚と踏居て漕戻さんとて船を推せども箭
 ありも早に出水の勢ひ進退自由ゆればあの中似む推流えり川下遠く
 おもつて小文吾もちかちか要時も堪は諸肌祖はぐ単衣の袖巻込つ両刀を
 挿るは水中へ跳入り技よと切つ酒着んと早れども流烈しく波高ければ行
 徳もりの塩濱小成長る水煉も遂に追着くとをゆむとも難義お及び
 折る物炭苞う積登りたる大平駄の船一艘千住のたより漕来れ小文吾ハ
 辛くして件の船の舷よをちかちか掛て乗移れば両三箇の舟子共駭駭ぎ諸声
 あり立この竊盗奴が朝働は木物せんと彼不敵さよ打や拵れと罵りて左右



八天傳六解卷四

十二

角泉堂藏

八天傳六解卷四

角泉堂藏

有 撃んてはるを小文吾もく身を翻して兩三四竿彼此へ追違へる船權の
正中諸もは獲く抜倒し曳声けり奪取る權真領も振揚く撃切んと疾視へ
たる腕小携り一箇の舟長懸る声戦してや喃古那屋の令郎公且く怒を鎮め
んと勸解つ只會禁めけりこの人を誰そ其へ下回し解分るとんて知らん

第五十八回

窮厄初て解く轉故人小遭ふ
老實上家を續て舊嫌を報

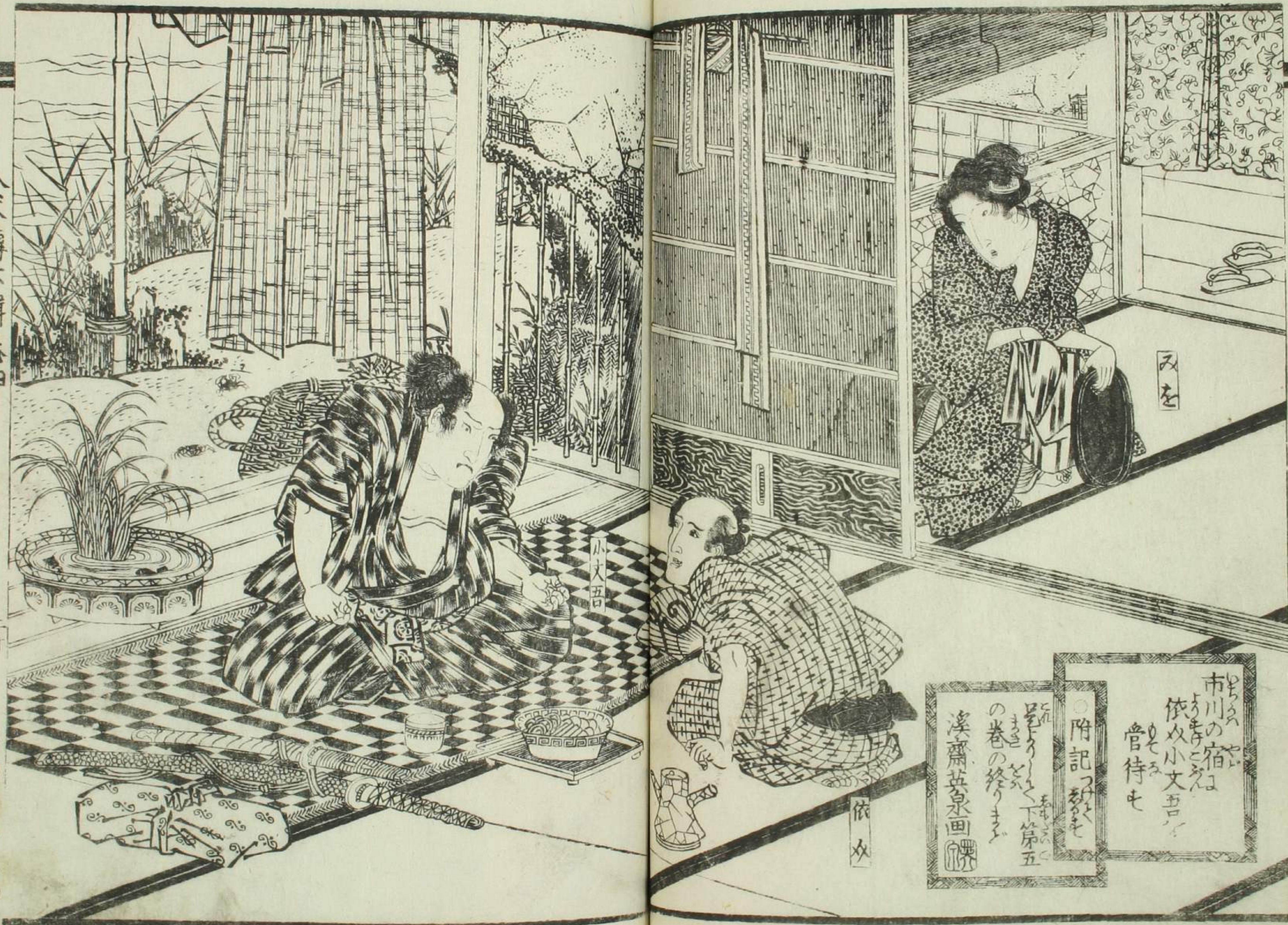
小文吾ハ怒小衆して高工ホを敷んとつとたひひけりて親の家跡を呼て
禁るものをとれば是別人かた豫て相識る大江屋の高師依介かりけり
あわくいつよとそり小權を身理と投捨て絶く久し依介男縛急をば撥擲て
先頼むべきまのといんこれ去歳より友の爲又身小とりてもも續けり大厄難小
奔走して刺このとそり依介人小抑留せられて命も賤小危かりとある人の貴小

よりてやうを脱れぬれども彼人よ追捕の兵小西の岸よ立聚てゆりゆり抗て
招くもそは怖る小足るめあねど再生の恩人の喬よ流を漕下せ柴舟小
飛來てみづづ船を取り推切南のやえ赴けりこれ彼人小問志たゆゆの
あくほりてとてあをわの尻中て別れ復遭人と難るべし舟子小分付て
件の舟を追いてえられも伴膽力も勸せんやとくといそむ依介ハあちとぬ
やうをく小身を起し舟子小ええりて皆の衆よ今げり如くこの郎公日あり
和主達も噂をりる彼行徳の犬田の大人あり今朝未明あり故ありて仇小追れ支を
逐く馬河をいゆひひひけりて船小乗せ進らせし幸ひりや今あり此先の
程南のかへ赴たる柴舟のやをとよあをハ足るなりこれも衆骨折らば追りや
着ん僉船と推れ存と喃と辞せりて立てみづづ船を取ら舟子小大男
二字小いやく驚たまちく怕れて誰かゆび異様志き俺們ハこの春より大江屋小

せん右やわんそと商量果しあがりけりかてその月五日の夕に。おん身も縁て
 ありとぞせしん彼悪棍の舵九郎があの親方夫婦のうへをその程お噂着て
 衰躬に崇る推被端譚妙真さぬの入夫いあらんかさび岡の新墓を蔑なく
 守へ訴え辛たれんせんとも剛に難題傷へ人のあがりしや。縛れかるをひ
 解難く死困のめ折りし文五兵衛さぬ共侶小蛭崎大人の事あひは是非を
 いらぬ舵九郎を撥擲投懲しと輝濟する不似れども後難料りやけれ。
 蛭崎大人の意見は任して妙真さぬ坊さぬ且く安房へ伴れて彼奴毒氣を
 避んとそこの噂昏小睨しく文五兵衛さぬ坊さぬを背負ひひの途をそと
 いと精悍しく送りぬ僕ハ亦要用の物多く納られる袱包と背子つ。お不
 つゆも主枝五人宿所とせしゆく程不埋伏ある船九郎殿計の悪棍許り
 けく忽地路を横きりて捕捕んと競ひ鬼を蛭崎大人の引受て防戦ひ
 ぬのふん文五兵衛さぬ僕さぬ敵の當りて暇ぬれ黄昏時の大危難是爾せ
 額の舊痕僕をさぬを撃れて生知も知らぬ仆れりする程船九郎の
 透を窺ひ妙真さぬの抱ひ坊さぬを撥擲走り退て已があろの隨ふは
 の孩見と撃ち扱んと稱ふの石を振揚る残忍非道の塵状盡し妙真さぬの
 歎きあゆむ蛭崎大人も文五兵衛さぬも稍悪棍を撃退けり存一其処に
 聚合せども保質をとれり亦せんまのあつとせとを嘲る船九郎
 再礫ととり揚て坊さぬを只下撃ふ齧粉ふるんとせし折りし一羽の聚雲
 天引降りし風凄しく沙礫を飛せ雲の中は物ありし礫石の塵を吸ひと
 忽然と坊さぬとを中天下巻登し又船九郎を巻賜る鬚より尾
 まる破竹の如く引裂る軀を撞と墜されり。かまびひりかても強敵亡
 滅れども緊要ある坊さぬの往方もそつ終あるす。かたれば妙真さぬの歎けり

諭る物も物とを管崎大人も文五兵衛さぬものやあまの親共衛八神殿
 知つておのれ且くはさるる然らば往方のあれはといふとも船九郎と
 共侶お殺さるるもあはれなり返さる日と待たせと頻るお諫めありてその宵の
 宿のふいせをひりこの時お僕に申す息をさる幸ひお疾の浅くはれ
 妙真さぬのおん伴とて終安房に赴たり文五兵衛さぬの夜より市川まで
 還りあひくおん身の安否をあらん為夜船に乗て武藏お大塚へおん赴たぬ
 扱身まゝの一條のそお僕にあらざりせ程経て後お妙真さぬの説しきぬひ
 かく巨細を言をゆりさる程お文五兵衛さぬの日の巳の時さるお
 大塚お尋ねはく彼額藏とめと申しを里人お問ひし件の人罪決りて
 いぬ初のおの日の日お申塚の母よりお刑戮せらるべしと額藏お支達
 大塚信乃お總て二名法場を關して幸川菴八藏上社平亦を所殺し
 いか額藏を奪取て戸田の河月お逃去せ陣番丁田町進大勢をゆる
 追蒐捕詰ありお大く早より六丁田氏お水中にて敵の為お撃たれお怒れお
 後詰の仁田山晋五が新隊を以推捕菴で額藏信乃お討捕りて
 その首級共を梟られおこの宵又癖者ありて番卒おを砍し一件の首級を
 竊取て往方もあれをかりとん語るお膽を洗させぬひ文五兵衛さぬの
 父歎けさるお想像りおをさるりおおん存亡定らぬお知らぬおあはれお
 おおさげお面色で件の里お旅宿して世の風聞を撈りお彼梟られる
 首級共お信乃おあはれ額藏お皮を方人の戦死する枯頭をめて云云と
 守を欺く仁田山晋五が伎倆とて密々お譏まらぬおあるより疑ひお解
 ぬおその假首級何人おと問ふお定らぬおあはれおあはれおあはれ
 おお心をやがえお苦しく憂宿お日お過るおあはれおあはれおあはれおあはれ

萩助ハ如此々々ト幕六龜條ガ枉死ノ事アリ犬川莊助ガ主ノ仇ヲ撃ツル
 顛末兼上兄弟菴八ホズリ又猪平ガ任俠音音ガ孤忠力二凡ハ精忠孝友
 歟ハ單節ガ貞操節義をへく犬山道節ガ君父ノ仇ヲ報ヒ一越犬塚
 犬飼ホト共ニ彼人ヲ助け助ラレテ荒茅山ノ奇遇白井ノ大敵ヲ殺脱ス
 走ると兎兎ハ單節ヲ相伴ク合鞍ノ衆一ウケテ馬ヲ替レテ其日ノ怪談遂ハ
 犬山犬塚ホノ四犬士ト相別ス只管ハ彼馬ノ迹ヲ慕ク日ヲ累後ハ
 遠く武藏ノ浅草スリ阿佐谷曠ヲ過ス一ト傷鎗野猪ト撞見シ
 之ヲ刺留ス鮮ノ形勢又並四郎船虫ガ隠匿ノ支ノ趣この一條ヲ構フハ
 石濱ガ千葉ノ權臣馬加常武ハ抑留セられ去歲ノ秋アリ彼首ハ
 どり命ハ既ハ危ラシト犬坂毛野亂智トハ義勇ノ少年ノ資アリ
 辛ク石濱ヲ脱出シ彼墨田河ヲ歩涉セシ事情ハ犬坂毛野ガ乗ル船ヲ
 追んとり大九今朝ノ為体也その要領ととり摘と離せし説示セバ
 依介頻リヨリ驚カク覺ゼ太息ヲ喞ク未ダ感嘆一ツ且ク巴を願フ如ク
 自ヲ解テ叔ハ危ラシキカス一ト知らズキハおもも疑ヒキをト
 疎カシヒ地俵ヲ磨ル義ヲ守リ心ビハ格別也及ズ死スルハあらず
 あつたれも恙ハ死命也と還ラセぬをかう伴ハあつたれも僕ハ面ヲ
 起シ歡ビホトといとの祝壽ヲ述ハ小文吾ハて何と云ハ和主ノ資ナ
 かりて舊里近く歸リ基ガク隻時親ハ面ヲ見セバ又隻時ノ不孝也ト
 と行徳へ赴テ草履一雙借ル也といハ躬テ身ヲ起シ依介急ヲ推
 禁ヤテ報送セシテ且クあつたれも且クあつたれも意神ハ何の何をも
 知り心ヲもる歎ル種をさう一ツもさうなく痛痛地而為わがういんぐ
 叶ハぬ下條ハ老家公のみなりかといハ小文吾宵ヲ騷ガク何をぞ



江戸傳小文五郎

浦島高麗

江戸傳小文五郎

浦島高麗

小文五郎

依久

市川の宿
依久小文五郎
管待也

○附記つねくも
下巻第五
の巻の終りまふ
溪齋

心ゆたけ。とて告よつてせよとせよと向れて鼻うちを嚮中も言の縁を記
 申さるる文五兵衛の縁由を知らんとて安房は赴きぬ。妙真も對面して云云と報ゆへに搦まじりて愁歎悲泣は涙を共に進み
 是より先里見の殿の登崎ゆ此如此々々といふおげゆめあり犬士達の奇
 異天縁親方夫婦の勇敢義死又坊主のゆめも輝詳ふ不召に
 御感尤浅りぬ。されば大江親兵衛が祖母妙真を留めしむるに
 扶持せしめぬ奴婢兩三名冊りて厚く款待しあひあつて件親兵衛が
 存亡を究めしむる意も四犬士信乃現ハ共侶を連れあつて登崎
 ゆめ申すゆめゆめ折大塚の事の顛末をいふゆめ又驚きあひてあつん
 ぬ十一郎ハ大法師を再會して大塚大川四犬士の存亡定くる揚向を恙に
 否や吉山共報せしめ此度の究竟の懸兵五七名を行若黨不打扮して
 登崎ゆめは縁ゆへに文五兵衛も亦松郎と孫の住方を索ん伴ひ
 へとて只管早里見ゆめ妙真も共侶として身の暇を乞ひあひし里見の
 殿の許しあつて志はゆるとて行歩不便ゆ老人と婦女子を果しぬ
 旅宿をせしめ欲するの勞して功立のゆめ是禍を醸する十一郎を遣せ
 安否をたずぬゆめゆめゆめ便を申すゆ文五兵衛ハ神餘の忠臣耶古
 七郎由武が弟ゆめ傳へゆめゆめゆめ又行徳へゆめゆめ市の活業をせ
 本意とせざるゆめゆめ妙真と共ゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ
 老を頭へか宜く扶持してゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ
 一六文五兵衛ゆめゆめ妙真ゆめゆめ只感涙のゆめゆめゆめゆめゆめ
 これハ是去歳の秋七月下旬のゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ
 妙真ゆめゆめ文五兵衛ゆめゆめと竊は商量ゆめゆめ一日僕を招きあつて輝如此

如此と示させぬ。かれは俺們兩人この地の逗留限りあらざり。大江
 やの船家扶い你を送迹不立べ。此を伴が年采老実多。あまを伴を致し。心
 操よん。とあり。勉て家をせられ。船橋の妙真が親里ではれ。二親
 世を遊ゆ。今いゆ。親類中。只水濤といふ一箇の姪あり。いもご
 よ。かも求せ。と。年采疎遠。もの。親血を。の。や。あれ。ば。你。お
 渠を妻を。と。あ。い。と。問。ひ。ひ。か。く。懇。切。あ。る。こ。の。昔。言。ふ。膽。の。と
 淡。れ。て。果。敢。々。々。あ。く。八。応。も。ほ。せ。と。畏。り。と。い。ひ。ふ。文。五。兵。衛。と。妙。真。言。す。
 妙真刀祢。と。佳。姪。あり。これ。は。い。の。親。族。か。た。ふ。と。も。か。く。て。も。小。文。吾。ハ。市
 人。ふ。あ。く。も。あ。ら。ぬ。と。他。一。人。子。を。養。ふ。古。那。屋。の。送。迹。を。立。る。も。要
 申。庫。を。由。家。扶。と。も。沽。却。して。後。安。く。は。ら。へ。ば。你。を。あ。く。立。る。て。件。の
 用意。を。せ。よ。彼。船。九。郎。が。支。黨。の。い。ふ。立。る。も。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。これ。も。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。

俺們的の守り。と。守。り。を。あ。げ。ま。り。て。推。續。せ。ぬ。跡。も。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。彼。と
 繰返。し。て。諭。し。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。言。兼。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。詰。目。も。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。地。を。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。
 日。か。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。又。行。徳。へ。の。赴。け。と。い。ふ。文。五。兵。衛。の。口。状。を。村。長。と。い。ふ。
 傳。へ。と。い。ふ。彼。處。ハ。特。に。穩。當。と。い。ふ。市。川。の。船。九。郎。が。支。黨。ハ。と。い。ふ。か。く。て
 一。旬。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。程。は。文。五。兵。衛。と。い。ふ。妙。真。と。い。ふ。ハ。里。見。の。殿。より。諫。を。せ。ぬ。と。い。ふ。
 若。黨。奴。隸。多。く。行。騎。を。還。り。ぬ。ハ。里。人。驚。死。且。訝。り。て。巷。を。立。す。と。い。ふ。
 觀。る。もの。多。く。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。件。の。後。者。と。い。ふ。逗。苗。中。と。い。ふ。措。き。先。船。橋。へ。飛。脚。を。遣。し。
 件。の。姪。を。呼。び。と。い。ふ。云。と。示。さ。せ。ぬ。と。い。ふ。叔。僕。を。故。の。親。方。房。八。の。送。迹。を
 せ。と。い。ふ。姪。の。水。濤。を。妻。と。い。ふ。村。長。へ。あ。り。つ。る。依。子。房。八。沼。田。と。い。ふ。世。を
 と。承。り。て。積。孫。の。大。八。ハ。神。縣。一。と。い。ふ。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。日。より。往。方。を。た。せ。か。く。と。い。ふ。
 幸。か。ら。ぬ。吾。情。は。と。い。ふ。よ。の。世。帯。を。執。賄。せ。ぬ。と。い。ふ。依。介。を。養。嗣。中。と。い。ふ。

大江屋を譲り作りぬ吾侪の安房の親族許而三年杖をたてて浮世を
やまく送らんとあひ決り侍が年加得るに夫婦のむねを頼むとせえ
ゆふ村長との四鄰の人のゆづり異議及べた悼むものあり祝ぐあ
あり授受を提擲す緯立地は整ひぬ是併妙真との元月廣地
洪恩の緯果く文五兵衛さぬへ行徳をかへせぬのこれ亦村長との
小文吾のあまき如く市人の所為を嫌へハ親の迹を嗣べくもあはぬ渠の
近届鎌倉へよしが求めく赴たればかへり来日の際りを記す已に既
老罷ひく活業も懶くありぬありて安房の親族自身を任さんとあ
の就く客店の家扶屋庫共は望する人は活遊むてこの美をあら
ゆふひれとありぬへハ異議もかくありぬとぞ答らる杖望る人早ふ
たたく商量既に変更一が活春の金八百あり五十兩獲ぬしとぞ
中百金送り苗めく二十金の三世の父母并は房八沼藪ホが為とく近
寺々へ進せぬひつ三十金千里の貧民を食牛馬に至るまで送る
行は引ぬぬ人會あよるた功德といひけり此は是去歳の秋九月中浣の
りふふ人彼首も是首もあひのあふ事果とりと替びぬ文五兵衛
ゆふ又この市川は立よりぬを妙真なる待つけくか駈ある後者と
相將之安房へ還りぬひれ是よりして後文五兵衛さぬハ月一ハ心機
の疲勞
あや老病漸々よふふひぬと然とく苦惱の氣色もあく臥ぬひより
枕あぐらこのより守はばえハ醫師は命して療養の術を尽さ
あへども命數既は限りあれや病むとくか不癒りありぬ妙真なる駈
憂ひて等閑なる者とりぬ不頼とせとくぬくぬけんこの春二月の
初旬よりへ死脚を立さてかりくとあ告ぬぬ消息は驚けく物なき

人のいけり此守へはまげれ小暮の法蓮大さあは沙汰
あはれは僕ハ二月十日彼地を返ると宛妙真の心をげり口説ひ
めをさびたも痛しなうとて盡せりみづろ察しひと報せり
小文吾ハ黙然とてまきく眼包不餘涙の雨ハ益怒らうち濕る胸と敲
撥拊悲し気かきの手で親の七日とあはてて海舊里小恙かくて年あとの
の夢と覚る悔しゆも甲斐もあはてとあつ去歳の七月曳舟を故郷へ俱
かへる感のあつ身ハ石濱に囚れて信死すもあつとあつと遠
鴻波のよきや水江の浦鳴子が七世の孫にあつあつ似て慚愧後悔人傳
わ親の口説言を哀れね親名を揚家をして俸禄この身不餘るとも
と勤解く東あつ向ひつと伏舞依介これを慰めくそのかん歎
理り今ハ千萬のやも返さむ先と条件の下包ある像見を遞すおは
べといひの後方をえりく水邊にたたきと鳴立れば女房を又次の間は物
かへるひをゆくり心をあつ間ある賈戸を聊推し終る半面を密とさし出
依介もあつ阿水邊の春休は預けるおん像見の金もて来ぬれと
腰を撈りて投書を鍵袋を長は取て邊へ納戸のへ赴けつ金の
来者れが依介れを受とりて你も要時あつおよと苗めて小文吾もあつ對
既ハ傳へまうとてあなたの家公の像見あり數檢めく納めるといひつ
さよあつ小文吾もあつ戴り去年蜚崎照文が里見殿の賜
とて贈られる沙金もあつ今ハ過半あるれが盤纏は物を缺後とも慈愛
籠られる親の送財とあつふなるも異日の要は充べとあつの中ハ
和主ふ与へられるあつ然るとも終置れハ律義は稱心操感するふ

おもひの先々といひつけて包を解け十金と更は又十金をかえりて依介の
 りけ与へこの十金ハ親の送言の任事のも又十金ハ某が墨田河也也り
 かく資をばらる薄美也受取めあひひといひを依助せあへむ。そのあひか
 なるの之文五兵衛の賜り十部金の金とあれか。この十兩ハ要
 仰と辞め小文吾推返しつ辭を盡して薦めり。依介ハ中々受
 戴つ妻の共ハ歡びをかん述よける。當下又依介ハ妻を側小進奉て哺
 犬田の郎公おを嚮まう。つる妙真の姪女船橋おゆひを僕小妻せあひ
 その名を水滸と呼れり。見目をあひいへり。その小文吾領た名をの
 豫之牙ねと折つる對面とよ懸く歡びも。下入をいへ重縁といひ
 相成り。當家の新婦はありあへば沼蘭がまへあひか。妹おあへる心地をさる
 勉之内と治めあへとあら。隔ね志當ふ水滸ハ頼め報め先小文吾が安
 否を諮ね且文五兵衛が悼亡を述べ又妙真が薄命と不辭せ。かゝり
 ゆも依介要時沈吟して郎公ハ何と召人あをを還りあひ甲斐よ
 安房へ赴れあひだ。爹公の墓へ詣てく妙真もあをを慰く。下つて
 彼處へ入りあひ里見の殿のむん歡びも。あをを想家らる。あれ僕を伴仕
 らん近はあひ立あひひといひ。小文吾頭を掉く。いそぎ安房へゆくべ死
 里見殿の恩徳を仰げ。いそぎ高けれども同因果の友具足せ。況て己が
 預りける鬼は單節を失ひあ。その存亡をいそぎ。恥有る且功由
 かたふ親の墓系のせま。いそぎ。阿容々々として彼地不到ら。友を棄養
 背はく。采利を急ぐと人愈い。いそぎ。亦あ。あ。且くあ。返申て親の
 中陰を送急。いそぎ。竊は消息。いそぎ。妙真とのへ報知せ。あ。後々あ。化と
 怨人必多言。いそぎ。禁め。申の比及より笠あ。いそぎ。行徳あり。

赴地多投て往方もも定ぬが繫ぬ舟の楫を絶とまへの岸も水深似り曩よ
 犬山大塚ホ別れ折の信濃路へ走りよけんともいへるも曳舟單節逢んとく
 とも東へ還りしより暮月かたぬかぬか今ゆら彼地小到りて索遣を欲す
 とも舟小契して送せし劍を求る小似くその甲斐の亦あべくもあはざりし
 何処を心當小件の四箇の支を索ん況も曳舟單節ホ存亡の知る小由あり
 以日下より心おかる墨田河老わおかくも別して大坂毛野がをりこれ
 公胆勇智略よくゆら死少年あふそ生れる里の名は犬坂をりて氏と
 ちこれ彼人も亦吾曹と同因果の犬士ホあむやこの推量小違はぬ形状其の
 小似る疾もあむん玉も持てん問まの知るしおれめととあざりし小あはれ後ども
 一、為危窮の折やひれがその義小及ぶ暇なく別れく渠も往方へ知れを送
 憾一は不就と又とぬかぬか思惟る小鎌倉これ大坂が成長りる里や七母親の
 墓あるしこれかの折竊は鎌倉へ立入りしとあはれぬ彼れ小潜び難く
 今他郷へ移しとも兩三月の程なれば且彼地小赴たてあひく小里ホ掃りも
 問がぬ人の在処を定る不知るやあむん再會の日小意中を告てこ推量小違てかく
 同因因果の犬さる證據分明あむん去歲より空小送りる月日のおも虚か
 孤雁の更お侶を得る北地は既る歡びあむんかて大坂共侶小又大塚ホの四支を索く
 環りも會は石濱小抑留られ吾人を報る小平小証人あり且曳舟小とてとも亦
 一犬士を獲る伴りしゆら面を與ふ小似り吁然也と腹裏よひ決め引提る
 笠を翳して遠く寺門をゆく薪樵る鎌倉を投るし程小次の見時時小
 既小彼地ホ着し米町ある客店小草鞋を解く逗留し日毎小巷小立出て或ハ
 茶店小几掛酒鋪衆人聚小所て世の雜談小身を敬又假初小名もあむん人
 物いふ言の次小あむら名たる女田樂且南野といふものあむんそが宿所何処と

外々く諸々知らずと答るものあり又復讐の爲体を傳へて入るものもあれど
 忌みありと定く告ぎて中一箇の老人小文吾が向ふ答て索め且閑野を
 許すの人を殺せ折武藏の石濱より逐電してゆき當所より去るなり
 石濱の千葉殿の管領家と疎くねあへむやと告られけんとの沙汰はも
 ども渠もこの義を察しぬその身の追捕を恐れせと薪を抱き火に近づく
 久しきもあはれ虚実不定なる後とも彼且閑野の女子あはれ親の冤家と
 とそ禱祀時より姿を変え幾万人を欺たるとも凄絶めのとよこの地よ忌の
 あるすの一件の情由ありとを身はしりとも知らば有けん慢不渠が宿所を訊か
 とも今その甲斐の地をめぐり悪棍不疑れて支黨とて誣られぬのひ解く
 とと想ひかかんとも不用心あはれと推禁めつ具だる人の実意は小文吾の勿念地
 曉し且驚き遂に望を失ひぬあの日もむかへ旅宿はたけり獨りくありぬ

は里人よられかく現鎌倉の管領の千葉氏の恩家とて水火迷不相極の中
 われは常武が敷れりも告げん人余も自胤邪正を辨せは是非の境も惑ひを
 取てか犬坂を憎とて彼胤智がりのとくは云と告て追捕を頼れ
 兄との議中と決めたり然もこの地は日を送るが功をくくえおひやく
 して吉よ一心盡く索る人逢人あはれもか里小送感とてあはれとも去威あり三が
 三方へ別れ知己の男女七人を一人あはれと難く又何方をいふ當の登り索あはれ
 べ死せぬものあはれありとも秋あり味小十三箇月下日も胸の休くぬれぬまのあはれ
 おひ沈て鄙語の獨商量果は死膝を抱き消す日の壁に向ひて幾遍も歎
 息の外ありと忽地化とあはれと日本六十六箇國廣くとも限りあり舟車
 かの所足跡の至る所東西南北四維へ荒索巡り必遣人逢速小拘ると志を
 換せ八臂の藤也蒙也稍霽とも慰めり一窓の月明かこの地を立去る用意を

赴くべし西國四國もるを海にたれども。あつた友達のみを東へて生れり遠く
 京師をうも越く西の苗あへくもあつたが中大江親兵衛へ神隠しあへりて
 去々歳この地もあつた比遠た大和の葛城大峯近記へ安岩高尾鞍馬深山々々
 攀登りて索のゆかたもその甲斐あつた此度へつて東海道を真直小鎌倉と
 へへども伊勢尾張あり東中を諸侯あつて割居て新関のまうれば旅人の往還
 不便のうもゆえ定うかれば又近江路より中山道を下るべしとあつたひとふ
 ぬひ決りて我門人の甲乙の舊里を親族より猛小招き一義ありあつて東国へ
 歸るこの美を送りて信へへつてあつた驚かす辭を盡して禁めしあつた苗
 べくもあつたが夏之趣云々と同門門の信る程小現八も下日もあつた立夫と
 へへども衆皆別を惜む苗別の為席を閉く是首の勸盃彼首のへは饌
 をとて招き日の多れをゆき七月過く八月又既半あつたりて現八も饌

焦燥く頻り辭して起初るの準備も他夏もあつたが門人への苗難て錢を哀め
 銀小兒く贈りて路費の資あつてけり。あつた程小現八も行装を整へてその詰且
 門人への別れに東へ歸るあつた後小跟先小立逢坂山のゆきあつた送りゆく
 あつた多りてあつた推苗ゆく終小袂を分ちあつたり。あつたぬ旅も急あつた
 その日あつた十里あつたり守山の里小宿りを投りてあつた程小現八も日ぞ
 へ。あつた上野の遭坂の里あつたあつたり三とを以米三回あつたこの山里を過れども
 あつた坂の只名のあつたあつたあつた遭あつたあつたあつたり。あつたりて荒茅山あつた路の程も
 遠くあつた切あつた旅の心あつたあつた焼雪夫婦が戦没の迹を足あつたあつた雲のぬる明礪山
 邊小進へ入ると半日あつて既中あつた件あつた山のほとりあつた彼焼迹あつたあつた
 草へ彼此小生繁りて半餘焦れり常盤木の枝を生て葉を布く復栄るも
 多うれあつた有つる家へ迹を埋りてあつたあつた住る人もあつた忠臣孝子義姑節婦も

茶の山



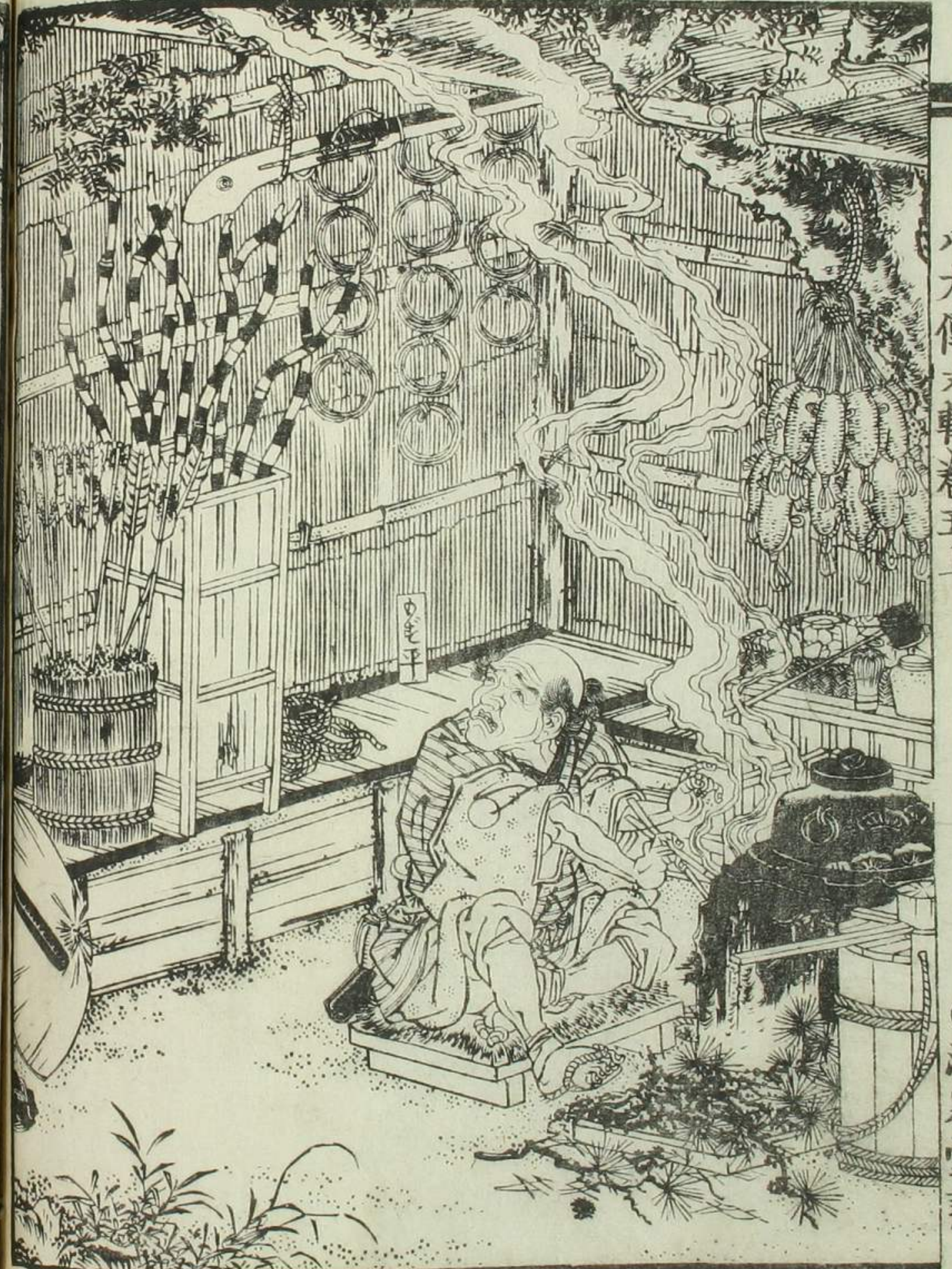
中と茶
網芋の
店に現
八
鳴平が
舊
話と
聞く

山甲内
山甲内
山甲内

大綱
規八

八代傳六郎卷五上

〇用泉生



八代傳六郎卷五上

〇用泉生

時よ遇ふ人おも知らず主の爲身を殺せども祀られぬ鬼とぞ逢ふ旅
魂の舟も吟呻ゆえと憐れ惜む死を以て彼を以て別れ友を以
けれとむらびあぢ排細く惆然とて嗟嘆不堪ねば暮ぬ間をと舊来
かふ疾も獨路傍の茅萱の露袖濡れての夜を明山魏山の麓を白屋小
曉を夜まかり現八ゆきひさか上野よりて武藏相摸へ赴くは是順路をれども
去々歳の秋下総までをわだかまればわだかま路へ此度下野へ赴きて二荒山を
登るべくか丹陸奥の盡処まで足不信と索ある久吾四六士ハ鎌倉をこれ
繁華の地ハ多く不敷く僑居まきもあつと尋思をいつ次の日ハ又遭坂
も立之りて高崎川をりて渡り前橋大胡室深津花輪梅雨入の里を
過るふの行程ハ二日路ゆく下野州真壁郡細岸と喚り里小本より秋の
日かゝ尚高き所ハ五里ハ六里も遭はゆべし且くあやむと懸んとあめく程
その里盡処ハ茶店あり檐下ハ吊せ賣草鞋の間より足之れハ一挺の鳥銃と六
七張の半弓と傍の壁ハ並掛りありあはれくくひひひと紐解く笠を引提す
儿ハ尻をうち懸ればあやむとあはれ一箇の老人婦り茶碗ハ汲る煎茶の生
法よりあはれ淫まらふ茶釜めりて泡たせを縁の離れ日光血ふ来せ
とて差を現ハ古より取あけく兩三吸喫あつて屢後方を足之りて公羽この
弓鳥銃ハ何の爲掛らるぞやと問へばあやむハ進まよりていまぞ知し召れども此
処より五六里をりて庚申山のあるこもて人煙ハいと罪これありて動もれば山賊
ありて旅人を剥奪り或ハ猛獸妖怪變化不可惜命をとりて此年ハ三ノ四人も
ありこの故ハ白昼といふも獨りハ二里あり郷導の者を備やく身の衛ませ
るこはなれとも耕作ハ暇あり里人ハ八件の需ふ忘しなかり僕ハ素獨りなれど
猪の賜平と問へばあやむ知らぬものなれども如く年老れば今ハ山

八代傳六輯卷五下

九
○備長

僉怖れく絶くゆめのかりり近屬中居松原の村間赤岩といふ地方赤岩一角
 武遠といふ一箇の郷士あり心飽老を益くして名々武藝の達人一日その門人小
 告くゆめや信づく赤岩庚申山六十剣破神代は雅日靈尊素盞鳴尊孫田
 日子個三柱の太神神護相謀ひて件の山登らせぬ石を穿て室を造り
 碕を渡して路を通し住せぬ神迹之かくて数万歳の後皇朝四八世の女帝
 稱徳天皇の神護景雲元歳釋勝道志願依く下野州二荒山を崩れ初
 かるる庚申山を攀登りて彼三柱の太神を親くみたり世の口碑云
 傳れども今も七十百十餘年の星霜を歴るも胎内實をもち過く件の山に
 奥の院を建ててゆめの絶くやれ當國の郷士として間近に住る高嶺の
 奥にも見え盡ぬの莊客們は異形を耳怕とせぬ似たり翌の風を登りて
 數百年の蒙昧の迷ひを釋んとあめ各位も同意かく必相伴ふべといふ
 衆皆呆れ果て辭齊一諫ちやう先生の武藝勇力ゆか如右ありあひりて
 理りゆくゆめをさあねと件の山路は峻しく且谷川を渡りてけり自然の
 石橋虹の如く苔滑りて進まかごと故老の口碑傳へり加藤彼山中は木精
 あり或はふ是數百載歷る野猫ありその猛兇と虎如くその変化測るべから
 り謬く山中迷ひ入るものと忽地引裂啖をいへりあれらの先生も
 傳へせぬいけんさればと露をくも怕れぬと深ある松と君子の敢危邦入
 孝子の巖壁の下に立せるとの本文もゆめや孝子の親をゆめとの親をゆめ
 その子のゆめ自愛して危殆近づく亦慈ありといふゆめ賢慮を回して
 おひをありゆめを願くゆめといふゆめ赤岩ゆめい呵もと冷笑く原来
 おく怯むを大約深山大澤や鬼魅妖怪もあつたゆめ武術を学ぶ何のゆめ
 昔平維茂は戸隠山あり悪鬼を退治し又源賴光は大江山あり妖賊を討夷す

八代傳六車巻五上

清泉堂藏

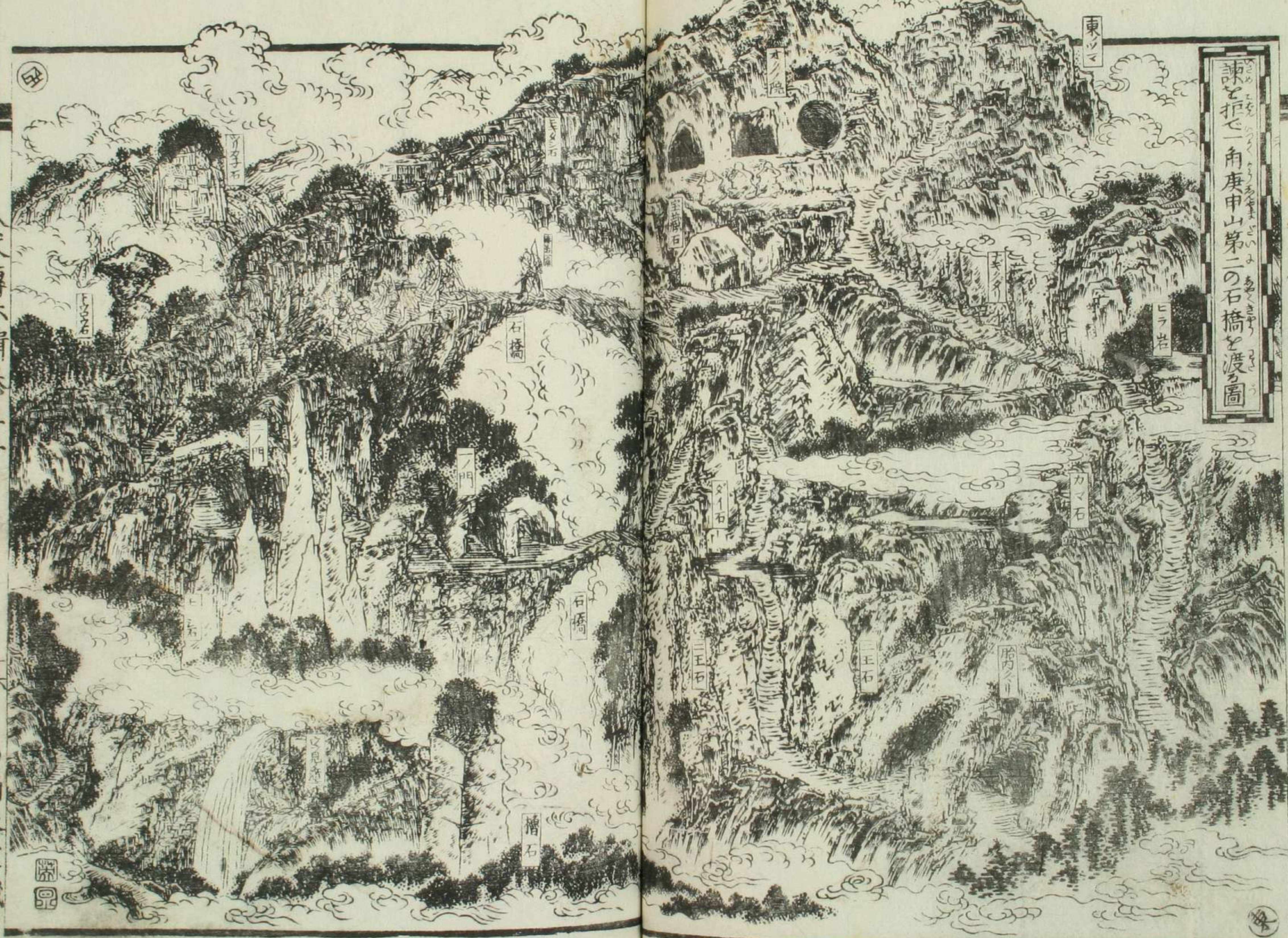
あつたや介ふ武士とてこの魑魅妖怪は怖れてあつた習ひに武藝もこれ甲斐
あつたかたもたつた刀を棄て農商出家あつたまふ生業を易べたのかくやとて
只管小武藝を特と齊力誇りて人の諫を拒むあつたこれ赤岩を氏とあつた
おのれ名もる靈山の登陟せむ虚稱に似たり虎穴に入るはいつてあつた虎子と
獲かたあつたやあつたさあつた怖れあつたこれ決して誘引を翌の苗守を頼むとて
相譚多く俟ひて勢ひ悍く説破られつ返すものも中。その中允可此高弟
某甲某し三四名師の宏言小焚えれて取くやあつたけん一膝を推進りて現
先生の卓見高論を下りて夢の覚るごとくほつて感服仕りぬ餘人もあつた俺們は
翌の兒供せあつたほつたこれ美を許さあつたといふ一角歡びて適微歎いこれ
たり智古の力頼れといと頼くといと然らあつたり宿所不遷りて翌の準備をあへ
といとがえらあつた四入はあつた苗守せんといふ弟子さあつた翌を契りて食共侶に散動あつた
門邊あり別れに家路あつたはあつた赤岩一角あつた前後三箇の正妻あつた
第一の正妻のとの名を正香と喚れは賢女の譽れあつたはあつた内を脩め奴婢を
愍れ生平小神仏を深信して良人小怒あるとて諷諫多く悖つたこの暖小男
子うあつた角太郎と喚れり惜むべし正香の刀自はこの年の春世を早う
その子の四う五つのとれあつたて又その夏の比迎られる後妻つ窓井と喚れり亦
これ美人のゆえありあつたこれその心操の前妻小劣れるやあつた娶られあつたはあつた年の
初冬の比に至りてむりあり人み怖る庚申山へ登らんといひ良人を諫め
ゆせむ只その武藝を怖れあつたはあつた隨小出立せを後小悔しとあつた
間話休憩する程小赤岩ぬりその次の日未明より四箇の高弟共侶に野糺
束小身を固めくあつたあつた弓箭を携へ後者小昼餉の割菴を負つて庚
申山へぞ攀登る比も十月初の三日天よく霽く暖く世小小春 日和ゆく

庚申山の奇絶を
記す
比松本
山松本
記文二編
合記
山松本
の奇絶
の記す

ふもとにちとちとある。麓の千草冬枯びく。孤花開ゆも。朝鳥の声をきく。胎内竇の石門あり。二王石臺石など。四方の眺望小暇なく。この如き一山の風景。眼下に盡す。奇絶ふ驚く可し。是より下りゆくと。二間あり。加れども。巖石の嶮岨。鬼の髯。鬼ともいひつべし。是処より下りゆくと。亦復二町あり。下りて。前溪。石橋あり。その長廿一文三尺。廣五六尺。初め。かくて。天工奇絶の石橋を辛く。波り果れば。前回の自然の石門あり。是第一の正門。欵まら。中て。東に向へり。大九十三丈。中画一丈。二三尺。左右小両箇の小竇あり。各九尺許。中々。全体宛琴柱。似たり。是より二町あり。下りて。左のく。此山谷あり。数十丈。大石高く。峙り。塔の如く。櫓の如く。叢樹頂の上。生茂り。奇なり。又下りて。二町あり。下りて。裏見の滝あり。その幅凡五六尺。その高。たと。量るべし。荒山。の滝。不似。その奇。知れり。優り。その。この。曝布の。ほり。あり。登り。ゆくと。五町餘。中々。右。五。隻の。

大石あり。色白く。あや。いと。高。より。遙。小。瞻。仰。石。中。小。文字。頭。れ。庚申と。讀。ま。す。如。い。あ。ま。文字。石。と。い。ふ。如。の。又。鳩。鳩。と。一。町。中。々。石。門。あり。その。大。廿。丈。八。九。尺。中。央。ハ。九。尺。許。あり。この。二。の。門。より。一。町。餘。中。々。燈。籠。不。似。大。石。あり。高。サ。ハ。四。五。丈。を。り。又。登。り。と。數。百。步。中。々。遙。小。成。の。を。眺。れ。洪。鐘。不。似。大。石。あり。その。高。は。二。三。丈。蘿。生。一。鬼。絲。負。縁。て。倉。然。と。亦。奇。是。より。又。下。り。と。數。百。步。中。々。石。橋。あり。長。廿。七。丈。餘。り。中。々。恰。虹。蜺。の。引。る。が。如。く。苔。滑。不。雲。蒸。く。その。洞。底。の。光。ざ。れ。が。渡。え。と。ひ。不。暝。眩。足。さ。難。く。進。難。る。門。人。は。い。あ。お。至。る。齊。一。の。師。を。諫。め。や。う。先生。膽。勇。武。藝。の。徳。を。昔。より。人の。な。ら。ぬ。この。山。小。入。り。ゆ。と。既。過。半。お。及。び。や。う。誰。う。感。服。せ。ざ。ん。是。より。一。町。中。々。の。く。も。風。景。大。く。清。れ。相。似。る。の。れ。あ。つ。た。と。く。還。せ。あ。へ。り。と。送。代。不。禁。れ。も。赤。岩。の。頭。を。掉。く。蓬。城。と。い。ふ。の。の。奥。の。院。至。る。と。この。中。途。より。空。く。帰。ら。ば。初。め。り。て。

きのもけも還りゆり多縁故を詔れば赤岩ぬ微笑きまのふれ頻り不進
 ひより石橋を渡ると死且彼此を又々ふ宝藏に似る大石あり又二重の堀
 似るも又屏風に似るも又葦笥の引牛とふも似るも又この餘或舟或
 釜或ハ鶴亀に似る自然石の巖とて立寄り礫硯とて伏せあり天造地工の
 精妙を見れども言葉不述くく画くとも筆不写し易くはこれより岩窟教
 个所あり上古穴居の址をべし既中て登盡すと死前面は三箇の窟室あり是
 則奥の院を駭然として向えれば屹屹高き二三丈隣り峻
 その峻絶を近づくべり此の窟の形は中宮ハ□や左ハ△右のくも
 かりける便是天地人の三才不象もの状その窟口の廣はとちやく八九尺あるべ
 所謂雅日靈尊素盞鳴猿田日子と共三神遊古鎮座の舊蹟あるん
 この窟口の神前石榎三隻並びたりその形状非禮勿視非禮勿言非礼
 勿聴の三箴中く亦是自然の活石之庚申山と名つけハ蓋これ依れるの
 神祇官の記云庚申の日小件の三神を奉拜せしべりあふ至る年来の疑念
 輒氷解して深信肝膽銘りこの神室を拜と果く右の方小陟ると数石
 歩の程中く東の陝ともひびく峻峻なる山陝あり眺望尤奇絶之其処より又下る
 と九四町あまりありて平岩大石ありその長廿八丈高廿一丈餘りあり
 建屏風に異なり此の平岩の断間より八町あまり東へ下れば胎内窟へか
 出づこれ今を来つる順路之介るふきのふれ奥院をむと果く東陝より投
 降を地りも折る雲忽地ふ足下ふ起りて晦瞑瞬息暗転と野干玉の
 夜ふ異なりねばあつて心迷ひく平岩の断間より東へ下るは後ふへ
 謬く金石の洞より未申岩岨路へ頻り不進とて程ふる足踏を踏
 して數十仞ある溪底へ忽地墮と滾落り然れども幸ひ底の砂礫の中て



諫と拒と二角庚申山第二の石橋を渡る圖

八代傳の車老五上

二傳六傳五上

涌泉堂

田

田

水も亦膝を過り右の腕を傷むるの命小恙をあれども索の絶る吊桶小
 等く人揚されば弥勒の世まで出づ帰らんやわがとうくも程小日の暮れて漢
 底の天を明せ六頻りの飢く堪えたりいふせや。と四下を見る小巖小岩菌の
 生るを飽まき採り飢を凌ぎたりとも登る路ある状とて彼方是方とま程小
 足懸りよはれ処ありこのはより藤葛の上より長く降りりこの究竟と
 あり候しくは線着ての岩稜は足踏掛つ辛して攀登ると半日ありやう
 なく故の山路ふかひ今ありこまで折る折る各位の後影を遙く呼び
 笛ありと一五十と説示せし門人奴隸里人亦駭嘆せざるものもかくこの高運を
 相賀して且勸る大くこわく胎内實小憩して割菴の飯の送るを
 閑居く羞むるものもあり或は又その衣の溪水濡れくつる乾くむ処々は積壤の
 溼たりと脱更さく瘵を勸るもありあるあれども赤岩ぬの氣力日あり小

異をかく衆人を勞めく多し途より歸遣門人と後着の宿宿あり
 来りぬ内政の死する人の甦生れ心地とこの歡びをいふ尚仲角太の
 天性孝心備はれ稱さるふまのありかぬ親をいふ屈して昨夜の睡りも今
 恙かかぬ親の袂小黃縁て同慰るも可愛これなり親族知己里人一人は
 又人詣来て癖の悦びを述るものもく「旬むりん庚申山の物より昨日を消を
 家内賑しく赤岩ぬの剛勇を感じぬものもつとせぬハ懲る気色もく入々小
 ろち對ひて伴の山昔あり人身怕と登らぬ山虫毒蛇猛獸や薬草奇石銀
 錫銅奇石蠟石多し所の誠小海内無双の神迹実小別世界の仙境と思接
 事小疑はれ神代の山陵ふたや某が誘て水溪小落ても恙なく還りしとて
 魔所をぬ各賢察せしゆべし今ありて後これ等し地志あるんぬ必登山
 之と鼻蠢めりて誇をせりこの下條の寛正五年冬十月のうかれはどのひの指を

僕十七年の昔ありぬ赤岩ぬい形の如く異もあひおられもかりし後かの麓
 老折人の七きると今ふ至てかたね登山まものありとふ家をかて赤岩の宿所
 後妻の意井とのまの十一月より有身次年の月の子亦男子を産れぬ赤岩ぬ
 歡びく赤二郎と名つけり凡世の人心前妻の子を継母の憎む和漢も多れども
 赤岩ぬいひの故あや二男赤二郎の生れしあり前妻腹か角太郎と憎む
 と大こころはさもかたむも怒りく釋れぬを打擲し痛痛たり多れは孝
 心深け角太郎の持を杖の下よりも親を慕ふくあぬ古の勸解の伶俐
 こそどもせし人毎皆痛く多かりこの時赤岩小程遠くぬ大郎とよ地方
 亦是一個の郷士ありを素より文武の達人なり姓氏大村名儀清俗字を蟹守
 とりこれハ是赤岩ぬ前妻かり正香との家兄も角太郎とのぬ外伯父
 かりけれは怒もぬ幼性の親の愛を失ひてやと不便おられん子も女児はり

かれが角太郎と呼びてり養子合はせられぬ赤岩ぬふれ小可愛もぬ死
 子の夕初れ赤岩ぬ惜気もあつ立地兼引こそが供をり遣しりこれあり
 角太郎の六の歳より大郎の伯父夫婦小養れはる孝心小親疎かくて養父
 養母は仕ゆくの實父継母を顧り七ハツの比ありても習讀書お忘れぬ養
 家のゆゑ里人小も譽ぬぬのやあつるされぬ又犬村蟹守儀清ぬ弱冠の
 ころ京師小上りて文学武藝その師を擇し笛学年を累り文武二道の達人
 ぬれども舊里へりて隠逸をの旨として人の師とあつて欲せぬ只角太郎小
 の力を入れ且夕小教導ぶるをぬれ小亦その才養父小慶く一をばて二三を知
 下学上達速く年十五六小至りて文武の奥義を極やうされぬ後大村ぬ
 一日その内政と相譚ぬ角太郎もこの春十八才ありやうりて女児離衣ハツ
 必して二六小あつて婚姻さへ死時至れ生あつるのつくもどもをこそ置入ハ要

十八
 角太郎

南總里見八大傳第六輯卷之五下冊

東都 曲亭主人編次

第六十回 胎内竇ニ現ハ妖怪ヲ射ル

申山の窟ニ冤鬼羈體を託ぬ

登時大飼現ハと賜平が長物とて浮果と嗟嘆不堪也現世の人のさめく
 處得たる孝子とてあやむくも不慈の親ものけりある事とて子の賢き直死
 心小具竹の世と形もどひ捨てる善提の道入んとあるいと惜むるあまんと
 退らんと脅迫の籠引とて喃翁庚申山の奇異怪談赤石大村親子のうへ
 さいと詳小告りて日數累々旅宿の憂苦を忘るるを慰めたりたまふの地
 きたる甲斐ある天山の壤と踏後々まごの話柄ある又死の言ふのれど此度
 多く人を索る心念地のせむるれを又えさるのせんとせられ彼山の麓路を過

八代... 卷五上

南總里見

少やうかふべしといひ知れむとて鳥夜小要る死弓箭前より買ふべしとの松明より
 一と意悔しも脱落おけり任他神子内より巔村の路程一里半道あり
 とす時既に申七神子内より二十餘町もまたんふあより進むも退くる路の
 損益もあへず警者も京へ登るとの世の常言もあつたものを暗死は怖るこゝろ
 と志を焚く其れともかぬ崎嶇と山も果る死夜の深夜程ゆと辛
 しく雖邁々々人ふ遇ひ西秋東秋同より多く迷ひ入ると幾町もせけん
 澤邊のつひに登ると二三里るととども麓村の至るまでと牡鹿の言の
 びえけりおれり里の遠くふも死と思ひふく且疑ひ且怖れ心ならずも
 まのり夫が後悔跡を嘆すも又たぐととまやう不知案内の深山路と如法
 庵夜の辿らんよりあやうく時を俟て死救否々々も留めとも猛獸毒蛇の
 患ひを御すよめあつたもあつたも命運と天の儘と夜曉と走ら何処
 まれ里のも到らん人あも逢んこのとる海も上や下や又幾十町秋の程にひ
 らるる最大なる石門の海より小舟さけり。あつた天の稍霽く波送りくは七日の
 月け山狭なる海幽なる影を便著小暗と定め且彼此をさぐる巒の足緒の
 鴨平が説示せしをそれとて庚申山よりといふ胎内嘗て似たりけり六什麼生
 とする小且故鳥見且呆れて忙然とて立在とてあやうく又あやうくともあつても
 山深く迷ひ入りとて又今所ふ山巔村まで至ると輒死路まわされが今宵と
 且この宮座龍も曉しく里へ下りてと母思とて坐ととく弓箭を側ま引つけ
 る海深る夜を成くとれ月忽地没果くゆび鳥夜よるふなり現幽谷の嶮
 岨この四邊の鹿もあつた山氣頻る肌膚を犯しく夜寒八里は弥増り
 熟ぬ山路小夜をさめく迷ひあつたとされ身又心も疲勞果くよりあや
 路を會つたむらさか艱苦のゆらぎを途言を察せむ田舎翁とのとて後悔く

八代傳六車卷五十一
 清泉堂藏

まこと。人の諫を聴かず。千金の身を危くするの愚。曾より死と亦。つら。後悔の外。他支もさく。寝られぬ。随は友の。養父母の。親の。在と。き。世の。過去。を。ひ。續け。く。暁る。天を。いと。遅。と。俟。ほ。ふ。も。も。鐘。の。音。は。れ。絲。も。星の。光。を。仰。く。瞻。ま。丑。二。時。と。比。東。の。こ。より。忽。然。と。螢。火。可。の。火。光。閃。々。と。く。兩。二。点。あ。る。を。投。ぐ。事。如。く。い。も。幽。ま。る。え。い。か。現。八。つ。怪。々。く。彼。の。鬼。火。秋。を。ら。ぞ。の。天。狗。火。の。や。あ。ら。ん。ご。ん。要。を。そ。の。れ。と。速。く。半。弓。合。ま。く。胎。内。實。を。出。く。傍。の。樹。蔭。を。盾。柴。は。あ。つ。顔。ひ。を。あ。る。程。二。件。の。火。の。迫。つ。隨。小。大。を。う。る。く。そ。の。あ。ら。を。燭。ま。と。炬。は。異。わ。ら。む。既。わ。と。の。間。四。五。及。ば。り。あ。る。ま。で。現。八。と。る。海。よ。く。ん。と。く。瞬。も。せ。あ。り。け。る。怪。々。む。べ。の。火。の。光。の。地。狗。天。狗。の。所。為。あ。ら。む。ぐ。え。も。え。ま。れ。ぬ。妖。怪。の。両。眼。の。耀。も。る。ん。且。其。の。模。様。を。壁。に。映。り。面。の。鼻。赤。る。虎。の。如。く。口。を。左。右。の。耳。ま。を。列。衣。く。鮮。血。を。盛。る。盆。より。赤。く。又。を。牙。の。真。白。小。く。

劍を倒れ裁る如く。幾千根の長髪。鬚の雪。閉。方。柳。の。糸。の。風。を。系。れ。て。戦。ぐ。よ。似。り。あ。れ。も。七。形。體。の。宛。人。は。異。る。ら。ば。腰。の。兩。口。の。大。刀。を。横。佩。て。驛。駒。は。跨。う。が。その。馬。も。亦。異。形。を。て。全。身。ま。ま。枯。木。の。如。く。処。々。は。苔。生。て。四。足。の。樹。枝。ま。ま。く。の。尾。の。芒。の。生。る。ん。左。右。小。後。若。黨。あり。一。箇。の。を。面。藍。より。青。く。一。箇。の。を。色。楮。石。小。似。く。頭。髪。は。え。よ。いと。赤。く。画。諸。天。小。彷彿。り。の。く。て。この。妖。怪。主。從。徐。々。は。馬。を。歩。せ。り。何。の。事。う。ん。相。譚。々。々。或。の。高。く。ひ。天。ひ。ま。る。く。胎。内。實。の。こ。ま。ま。は。け。り。現。八。を。彼。為。体。を。を。見。定。め。く。る。く。は。些。も。騷。ぐ。け。い。き。氣。色。も。く。心。の。中。は。あ。ま。う。彼。馬。は。騎。る。て。妖。王。を。先。は。ま。れ。の。物。を。征。し。後。ろ。と。征。せ。り。彼。奴。を。射。く。落。さ。る。餘。の。必。逃。亡。る。ん。や。怨。心。を。復。さ。ん。と。く。これ。彼。齊。一。う。ち。逆。ふ。と。も。を。怕。る。は。足。り。は。る。と。早。速。の。尋。思。の。勇。士。の。大。膽。兩。條。の。箭。の。腰。に。わ。り。半。弓。左。右。は。突。立。く。竊。は。件。の。樹。は。林。本。

登る。その神速死と猿猴の如く程よ死枝は足踏留めて弓は箭刺す。彎固めつ。要時矢比を張ひたり。ゆきけれども妖怪木のひくく思ひきり。心のでけくうち相譚て胎内實は迫き進み入ると程は寛濟せし現公。矢声も猛く度つ箭前二件の騎馬も妖怪の九の眼を筒比深し射られく。一声苦と叫びゆゆ馬より撞と墮下ふ吐嗟と騒ぐ両箇の妖物も肩の息と取り肩より引ひ一箇の馬と牽くも舊来しと又逃亡けり。あま至りく野干玉の又里死夜とるもの。現八と思ひて。一箭前は二箇の妖怪を射まはたり。けし先樹の下より立ての思念と申すまは彼妖物水の不意哉。駁されて恐れ多く逃これる。半弓の圓竹めく箭前も亦真物なる勢。ひ鋭く力弱くわれ眼よりむと捷を取ると難く。と思ひ矢坪の違ねど。一も老う妖怪の。一箭前も腕も死んや或る眷属同類を駈催まてゆき。その田の防難。地方を易く彼奴等。そよせられと思ひよければ。不特弓より下箭を推して胎内實を西のく。え。被て又えられ。雲山異境の高持る。あや。没る月の出る。あな。今ほ。黒白を別ざり。星光の恒ゆる。臆夜よりも明りけ。進退大く便りを。只管小椽本登りて。彼鵲平が。違つ。臺石あり。又髯髯の難所あり。二間餘の石橋裏見の瀑布庚申の文字石。第二の石門燈は龍石洪鐘。石を遙ふうち見く。十二間ある石橋を自若く。渡りけり。信る。現八。巻法捕物。妙と。且樹小登り。峻岨を。坦地を。より。目。初時我小在り。と。芳流閣の屋上。大塚信乃と組敷。働。知れ。然れば。今宵も亦深山の樹上。登居く。妖怪を射。巻。文。系。れ。む。裕。と。の。ひ。恰。と。の。ひ。十二間ある細谷橋を足下暗。夜。深。渡。り。て。



大前現

八代傳六車卷五



妖怪と射て現
鬼の逢人

八代傳六車卷五

不測の妖獣と良人とどいつ夜毎々々小枕の敷も累りく牙二郎と名つけろ。
 男子を産これとも非類小膚を穢され精液漸々小衰へく二十足と足
 まりりり是よりして後假一角の妾買易く只淫樂と旨とつる小の立女
 おわいく程もさ或の精氣を吸耗されて一と世も麻む死をもり或の寵の衰
 へく竊小吹殺されを逐電去けんといひる中近届来の舟舩虫といひ
 妾の邪智逞しく慾ふく行ひ穢まう淫婦され彼同病の相憐と同氣を
 相執る沿習少く妖邪小觸れても恙なく且妖獣のふろは慄ひて正妻は
 るり一かか兒の為ゆの継母といひるこれも亦恨むべしむりく兒角太郎は此
 より孝友の志疎るるね彼妖獣を親とあも思ひ違へく甚へども妖怪と己が
 子の牙二郎が生れろより角太郎を憎むと不慈るる継父の類小あは日
 毎の呵責小嘯るる竊殺しとそを穴と啖んと欲せしむる角太郎を過
 せありく神明佛陀の護とせらるる身小亦具の瑞玉のれ涙のふともむる
 とろり死のす程は角太郎の母の兄る大村儀清をその機を察しけん
 養人とく宿所は呼取り文学武藝飽まう教くその女兒をて妻せしり
 これより角太郎の養父の家は成長りく大村氏を冒せも過世の女因ある
 りありく名を礼儀とつけられの渠礼讓と宗とて威儀を乱さぬ名詮自性
 且瑞玉の字をとり取る飲つる兒と譽言るふわねども親の大大く優りける孝のて
 且仁義は篤く忠信わく又悌なり礼節智慧も自然は具る世の後傑なり
 と父も妖邪の為は勞し功る養父母の世と逝り後彼舩虫が奸計りて角
 太郎夫婦のものを赤岩村へ呼久せし夏四月の日子るる角太郎が妻雛
 衣の密夫の子を身とりぬといひ立てて妹と仗の中を裂れ濡衣れを妻のふ
 のむとく角太郎は追出され養父の送財田園まう推留られてまると法

世ありく神明佛陀の護とせらるる身小亦具の瑞玉のれ涙のふともむる
 とろり死のす程は角太郎の母の兄る大村儀清をその機を察しけん
 養人とく宿所は呼取り文学武藝飽まう教くその女兒をて妻せしり
 これより角太郎の養父の家は成長りく大村氏を冒せも過世の女因ある
 りありく名を礼儀とつけられの渠礼讓と宗とて威儀を乱さぬ名詮自性
 且瑞玉の字をとり取る飲つる兒と譽言るふわねども親の大大く優りける孝のて
 且仁義は篤く忠信わく又悌なり礼節智慧も自然は具る世の後傑なり
 と父も妖邪の為は勞し功る養父母の世と逝り後彼舩虫が奸計りて角
 太郎夫婦のものを赤岩村へ呼久せし夏四月の日子るる角太郎が妻雛
 衣の密夫の子を身とりぬといひ立てて妹と仗の中を裂れ濡衣れを妻のふ
 のむとく角太郎は追出され養父の送財田園まう推留られてまると法

師あるんと思ふよと養家の里人小告り。里人亦憐しく返壁との地方の
 編小る菴と締く角太郎と容措の且米を贈り残を遺せし聊恩とせし
 郎が孝友の誠心は感とて是よりと角太郎の或と讀経或の坐禪無
 言の行と旨とく世の交を絶れん心は任せぬよりわりのまじ剃髪せし
 命も亦神明の擁護小よりあつたれども危殃の意黄緑く離衣が露
 偽の別れ折願ふ和殿の兒を助けく怨讎を敷く久くと頼む言
 毎末の露路深く霜とる夜の山風は落るや秋の木葉より脆なる人の涙より
 現ハちほくくとづるは宵且寒れて洪敷きまよりを思ひ久らぬねる赤山石
 小膝を礎と拍と摩来御邊のけし細草をよめくを名づる赤山石

ぬとありけるは郷向彼里る茶店のあつた賣弄間話不憶く御邊の
 武男子息の孝友竹笠と違ひはとも豈おのれや一角と名生れるものよ真
 あり雁あり今宵胎内實の邊を某が射と降下る彼妖怪の贗物赤岩
 一角あると神をむと誰う知る死か御邊の身後は靈ありとあは居ぬ
 が赤岩る妻のすも心離言のりもわりの定ま知りまらと妻もその子ゆ
 枕邊は立夢に見せぞ緋如此と告げけと詰れば一角頭を挿とてあつた
 初よりどりりしなぬも角太郎の孝子の妖怪も亦神通われ既に貌と変せし
 より言語応答常住坐臥武藝を教る刀法まどう身と異なる所を果敢
 る見夢と実ま支とく親を疑ふとせし又窓井も如右せし目前も良人の非
 とくく夢を待た然る人情と思慮を敷るま支とて却妻や子の
 疑ひと惹のると彼をいしく危くんと思ひはれ黙止しこれ某が十七年寛を

残る較の用後れる梅花は似下況てその鞋の斑は剥るは古墳石棺中の
 残劍不異るを現八を不就吐くは就ても懐昔の涙をの進けるか
 程の星落て東の山陝をみよければ一角外面うち仰せく陽人陰鬼道
 異れ久くあま相譚ひく縦非類は証られて窮厄との身は通ともみつ
 う愛と血氣不早居短慮の支まあひて今よる後角太郎と送は扶け助
 られく名と揚家三具一ぬまま初對面より玉のゆるごひせ異姓の兄
 弟るより文明の地は説示さ彼妖怪はをく知れ宿念合期あるかえ
 彼妖怪の神通あり十里の外のを知まの彼奴の既十七年貌を變て里の
 在れも時と山林の暮れをよひけ八月は必西三度小夜深比宿所は出く
 あれ深山は未遊ごこの彼奴が和敷射れ今宵も遊山よりくるこれ
 この山の麓を折々人のとるの彼畜生の所為るた素この山に神迹をく猛獸
 毒蛇あるとき鱗魅妖怪も棲まると彼畜生を憚るをくよま
 遊のの彼奴を退治するものよ登山の人は患る神迹をせよは死時
 かうなるとされるも告く後々のあらぬま死の業もあふれれどあ
 天機を漏れを返る神の憎は遍らん今ハちや見まふもあれは後
 日不至くせひ合せん為よの拙まの口遊を餞別おえはととい現八貌と
 飲めくさく高論明教より丹田は受納て忘るまを願の識語と
 示れとをれ一角うち微笑を某武藝と旨とく支墨を疎れども人死
 くと人となるとせの世不在一日は優とありて萬理は通せるこもいけ
 声朗は誦するをば相遭講武相別誘仇越全露玉菊并化
 謝秋再厄不釋更向羈體妖邪亡處申山心遊八
 犬具足八大未周窮達有命離合勿謀南總雖遠終

毒蛇あるとき鱗魅妖怪も棲まると彼畜生を憚るをくよま
 遊のの彼奴を退治するものよ登山の人は患る神迹をせよは死時
 かうなるとされるも告く後々のあらぬま死の業もあふれれどあ
 天機を漏れを返る神の憎は遍らん今ハちや見まふもあれは後
 日不至くせひ合せん為よの拙まの口遊を餞別おえはととい現八貌と
 飲めくさく高論明教より丹田は受納て忘るまを願の識語と
 示れとをれ一角うち微笑を某武藝と旨とく支墨を疎れども人死
 くと人となるとせの世不在一日は優とありて萬理は通せるこもいけ
 声朗は誦するをば相遭講武相別誘仇越全露玉菊并化
 謝秋再厄不釋更向羈體妖邪亡處申山心遊八
 犬具足八大未周窮達有命離合勿謀南總雖遠終

歸一流 吟きるここ遍ゆく現八記憶をけれ一角は謝一別と生じて
 件の觸躰と短刀と共に行袂小包とど終背より被て端引結びく
 出くもが一角の窟門まで送り出く又重く大飼生々奥院をうち
 上りく平岩の筋間より東のく下りまぬれば路のと近くと胎内竈より出る
 るの杖返壁はまよりく角太郎と訪んたるが箇様々不赴死ひひり又迷ふる
 中へ側柏とるををれ胎内竈より山路三二里の間へ彼此は彼樹あり側
 柏とその枝のみ西へ指をのめればよく東西と辨む。実ま不測の奇遇あり
 又遭ふよりいふたれはとやゆかぬ見のく只願憑なるといふと現八慰めく
 その義の心をそへ真府人間同くいなべいと別悲しけれもあれども赤岩
 子息は觸躰を寄せんとく識語を吟く示されの小野小町が世と教ひぬ
 めくの歌は優りく世も未曾有の美験なり生る日小膽勇武備の徳萬々

捷れまの死々ゆきまを霊ありやゆきけん武夫の彼妖獣のあゆ横死をよめる
 の嘻惜悲くといひつ後方をうけか今までありる一角が貌の消てよりけを

第六十一回 柴門と敵なき雛衣寛柱を訴ふ
 故事と辨し禮儀薄命と告ぐ

却説大飼現八と其の曉くふ山と下りく胎内竈とわより赤岩一角武遠
 靈魂の教もよ銀山の母よりま。一里の水澤と傳ひつその路凡四五里あるの
 崎嶇と躰躰と返壁を投ぐも程よその日己の比及よ大村角太郎禮儀
 世と捨つ世も捨れく日影は疎に露の身の縮が名の花も草の菴のほこ
 さま末ふけり柴垣のあるよりありとありと心當り裡面の草を觸窺れか椀材の
 柱萱の檐二間の竹縁三尺の持佛棚これより奥へ入るも膝と容も過さる
 へ一裏の火の新壁は蝸牛の液と遺し撫も帯らぬ土庭の草葉も虫の声幽く

彼此の松冬樹の菴の時よりあるや流しける雑炊の昨夕の随ま
 乾く秋深けれども東籬の菊を門陝しく五株の柳を金こ
 だれも哀れぬふこの菴の主るべし年紀二十のうをツツのまらん色白く
 唇絳小眉秀く居長高く月額の迹真黒く延る髪は昔果の髻結むす
 鬪む後さあ放るは彼白河の安珍ゆも似らん狭身は薄肌色の袴の衣
 只一領被て皂の輪袈裟を掛る華洛を穿く嵯峨野は隠れ瀬口の時
 頼が面影さめりた折戸のうを正面より端近う経机を推居るある新
 昔果の圓坐を布設をよ結跏趺坐する項の菩提樹の最取角数珠を
 うち掛る合掌觀念の眼を閉て餘念なく口を蒼松葉を細枝より銜る
 是る維摩のゆるべ一机のうへ何の经文や五六句可あり細小なる鏝
 十隻と相馬製とる青磁の香爐もあけり立升る香の煙の靡たのへま
 滅易た人の命と思ひてくつら行ひ済ませあわんこの人の足大村氏礼儀
 わるく誰かあると知り領く現八も思ふくせりく敲く柴の戸のあき不
 声をあきく率余るおまうえ吾侪の遠来の浪人ゆく大飼現八信道
 と呼ぶのれ大村ぬしは要事ある用ありと叫ぶ幾遍とく名告れも裡
 面あり終く心せむ閉る眼をうちおろさくあねをたわもたうけり登時現八
 思ふ世を隠逸は甘んじ人と交と絶れんともめくまは音つは耳も人の
 如くまる今勤行の最中にては余任せぬあるべし草廬を顧て志を致
 されんこれ昭烈の才多く臥龍を起す急き心つた所為ふたあ勤
 行の果る迄俟む対面あるをんと尋思をまを依り折戸のあるま立在て
 心も多時と殺せや午の日影近づき浩如は前面より年尚弱は女房の
 身のふるも賤しぬがその容止の艶麗る磬言は野花の目よ美しく村酒の人と

醉まる類不優くい中への真実の古奈めくあけんと入らざるめ鄙みしく
 鄙みあわぬ離衣とまご名生中など白きあわもみ近づく先后心あく露玉を
 まごま涙を隠す袖頭巾袖小包めとま五月のきまらぬ身あくとも軽死草
 り履小踏々かえ甲斐多た草の戸の虫の名小呼ぶ横笛が怨よ似ら抱き誰か
 着て秋外視せぬ頭を低くする程まのふ門成る大飼立盡まの知らざりけり
 現八遠小これをそくそ心小猜まきうの女房あらし似げられた容貌の醜く
 ぬよいく愁と合めり雨と帯る夕の花雲小銷さる月小似たり且その腹はさき
 をる有身て下り既小たま四五箇月小なまらぬあはれは是縁てさく大村が離
 別の妻彼離衣と呼々ゆれ秋あまえあつた要てあめ飽ぬ別れぬ目と竊
 びく良人小逢ん為さるがこれを樹影愧く思ひやせんこと勅意よあ小在り中垣
 まるんよりま樹小陰小退れ障りまらぬも惻隱の端まると邊く一及

かり南の枝いと敏死女昔の其陰を小指小躲またりさあまむと離衣の柴の
 扇よ立よりく只潜然と立ち泣死を争ひてさへけん幾遍とぞく押拭小
 涙と袖小斂めま真白小細死を抗く敲くもちうさる竹の竹離色ま立流
 女郎花をぬぬのを吹久ま浮世の秋のあはれ風の強顔人の心秋と怨言は呼
 びく喃ま所天角太ぬあめけとありまら返らぬの形さ逢は濟胸の
 火の唇さ滅ぬ相思ひ辭敵も媒外の宿よのそ何日まぞ鬱死さる死ん
 より切くあ身の捨言葉受て覚期を究めんとしぬ比よりあそも無言の行は
 假托く忘るませと戸も閑む心つらな程をあめけけ那方どひとてい書くと
 も聴れぬそれを世の辞別大村川の瀬まとも生く宿所へ還るとして決めて
 侍るくやま閑くま是は喃と身の瘦るるも脚の癱ま可敲けども口説ども
 忘る良人いるはも不言の行ま凝るま莫妄想形死灰小異がら絲もや



大村角太郎

八代傳六郎 卷五下

十七
角長



返壁の栄
の戸は現
離衣が心
言を頼用と

現八

八代傳六郎 卷五下

角長

膚撓まむ目も瞠も庭の小草小集る虫の声の嚙々と答けり雛衣
 怨心堪ふれば苦い死声をゆりて嘯も所天日小をを宜くとも是れ
 其処へ遠くわね声嘯もままでいよりのほえぬものわら今ゆも愚痴は
 ども二人が中の高安の井筒よりる海縁の深死ゆりて髪初より親の結び
 妹使川大和紀囿りれわれ外は花見も月見の船の浮る恋はあふれば
 日暮て誘ふ阿曾沼の生執隠れの紫鴛鴦も及びくとあふ年を経て夏の日
 子より小腹の病病可ぬ薬も加持御符を身の仇とぬる幸まらひひひけ
 証言ふの春々々々公の世を逝りぬひ忘の中は山雞の峯上隔て妹と使
 臥房を俱ませぬのみと有身ぬら空まの流るべいと継ぐの母御小濡衣着
 られてもあふわらと醫師も決めるに寛枉神のこの牙に黄縁一期の浮
 沈宿の仇浪風驟ぐとも神を誓ひも騰むも清れあらしと君をあらぬ左も

又右も又跡も證拠もまたゆと情由も糾さぐ休書と理り取りと親
 品不預けて後安白は獨りも本意然否りでもあつた工をあらぬ身と
 いら後父母兄弟養子妻せといよと今らう忘れぬ竹實の釜々公継
 母御前の無理と並べ仰でもらうとまわれ外伯父も師も恩重死
 養父の家を滅しとも何とも思ひぬら切くは二親達のけ頃までしは
 さび又せんまもわえ死は欺詭は赤岩呼取れより程も去られて帰る舊
 黒の森もさる舊の隨も他の宿所は機を包く津もつぬ拭り舟風の便り
 言出で尼よりとも共侶も住果よといひも甚多き自らも某栗の志はく本も
 麻糸の有無の答も中垣隔る心片折戸固に鎖誰か為て親の仰は術も
 るくわで出せし妻もらば折るを難くもあふ今いれ身も追出されてよ小憚の
 関もる遠山里の草の戸小秋の螢と刃をさぐわがれてのとあるものを對面せりと

のりべとそ外の咎のりるらんよ言の葉絶てくちるの譯も知む慰もせ壁生
 草の何日までも息ふ堪む死ねうとらぬるの籠居の舊来の氣質は似け
 もる男子らうらわびう二世をわけけるあなまを疑れらる小腹の内とせもえら
 れもせぬ苦一さる月よた敷ある胡の國は生れぬ身とて甲斐なけれやまのいせも
 ぶ不便と思ひぬらむあわけてえ開ぬ心つとと敲死つ推入るまをれ懸心
 鎖は女子のちうら届る引放されぬ情縁のとも切る恨ののこも月よ瘡を
 壓史を倒れのを樹牆ふ推著るうと泣く声細るまで哀果て地上は破
 と伏沈む深死敷の霧の海は乾ぬ袖の芭蕉葉の露ともええぬれ
 且一離衣の涙と飲め身と起しく裳引合引揚て柳の腰は柳茶の副
 帯林定と締直くても空不帰る花もさる菴とさるもやんえと喃角太主々々
 こそものゆてもあせいの添れ身前世で造り罪の報ひ来てぬ別れは身を

殺き因果とどひ諦めは恨の絶くぬるむよりと腹黒く伎
 倆人の証言の罪なるぬ罪をぬひ賢人もまられ終りの雲存る雨後の月
 光りせると願れてあまそりける時優ま倒を引くはゆる福ど人の心小誠な
 く命を捨る者やゆる死の後のうら胸と裂も世度をもあつた疑
 ひの解むあつた折よと又舊の妻とどろ朝夕小只一遍の唱名もあ
 刃の回向と受ゆる道徳智識の十念も萬巻千馬の讀経も優
 成佛もえん今より久死ゆるらあ刃の齡百歳の後と特と甚ま蓮
 華と救う候人のあふと告別声も涙も結隠る天の秋の雨催ひ
 捨られぬ世とゆり捨て死天の旅路へいそぐとどひ訣めてゆりぬる妻の
 後影の菴の中よりええとも声の定ま挾牡鹿の夢野もや角太郎妻
 子珍宝及王位臨命終時不隨者と悟果ても活身の人木石もあつた

方寸の海小浪立ち心耳は風の吹ひども合掌の巻揺動を口は銜一松の
 葉も颯々として靡く如く断腸の氣色顔れを忽地とひへけん寂寞と
 とく音もせざるも行ひ清けける程に現八も女音の樹蔭より今離衣が
 角太郎は怨くひける顛末を送る竊嚙りければ悲愁嗟嘆も堪げれ
 どもこれを持ちの名を豫ても知れその良人小まらざる遭はる慰むべくもゆられど
 傍痛くその又せんまもるにわらふ既ゆて離衣が死を訣める氣色言葉に
 且散馬は且憐れ背より竊小跟てもたせ尚淵川へ身を投るゆもあは林示と
 思へ樹蔭を立ち去り遺過る足早ま走り著るとる程に遙る遠寺に
 鐘の亭午よるぬと角太郎稍解行の眼をせせらく松葉を捨経机と
 掻遣りく衝と身を起て外面に現八がえり離衣を追んと心いそり幾歩
 伏せりある後影を遠くうらんと声高小犬飼生等も菴主只今解
 初せり誘ふきと呼笛を現八佐とえたり今ゆら不口もい難つ心むらを
 先后小躊躇る引えまその回ま角太郎の路次金剛穿て折戸口懸鎖外
 へ出迎を現八引随直竹縁のほりて行袂を解卸し草鞋も踏
 及も脱捨る隣階と角太郎の客座は請う茶を差ぬ貌を斂めく慙
 懃小嚮あといひけもく来訪のよを知るといとも戒行の最中を迎接小違
 ると失敬と許り某則當國の人氏物の數ゆひらども大村角太郎禮儀
 と呼ぶれ既小貴客の高姓の屋名生られりて兼知せり扱も何ホの所要
 ありく遠く貴臨せられやん某命運拙れ頻り小遁世の情願あり恩愛の
 絆と脱離く雅俗の交遊と絶ゆらるる貌を更されもあらん毘邪氏の
 城へ入る維麻の室に坐せんと欲も貴客必高論わたり明教より迷ひ
 暁る幸ひ甚くは且實身は相譚多といへ現八の袖に合せり膝ゆり

某の凡骨俗腸上總に生れて下總に成長り近曾京師に旅宿をたれど
 甚く武藝を専と一丁の字義を知らず只異姓の兄弟五人あり渠ハハ
 文学に長るあり武藝勇力の捷れるあり皆某が及ぶ所ありは亦も因果
 同感の過世のものとて棄れしを素より送る厚地と骨肉の優と云く苦樂を
 共さんと世言りゆる不測の厄難あり相別より往方とある其只顧索
 巡る小もあはる三年を歴りて今茲に京師を去り陸奥を志し稍當國
 まるる程にその細草の茶店を貴所の孝友文学武藝并に養實兩人の
 學術武勇の吉の趣と傳へて景吉本小堪むの閑居の處を敲りて教を受ん
 とおひく勤行中とも知むる早やと頻り呼りてを礼とせられけり
 疎忽と海客せられて呼喚れり一期の幸ひ望言たりといと互の志答言訖
 角太郎は且歡び且羞て頭を拍某過庭の訓を稟て和漢の學と好むも

不肖の成るるを今釋教に流れて道人たるにたれども己をさぐるの
 所仍の胎と畫やく男子と生れ武まるとは阿容々と法師ふると可るん
 此の義を推し其が薄命を察し初見をわかれども前路と急をあらわ
 先づ胸臆を盡す夫千金の得易く断金の友は甚得難しされごとく蓋を
 傾け故が如く白頭までも猶新なりとい孔聖子華子の文と例を援ぐられ
 るわがもその志同一く學ぶ所の異なり初見を故人の如く合璧比隣ふ
 年を歴るもその志異なりその方の同くは頭小霜を戴くも初見を參り
 るるにめくり何れも容を傲ふ似れども某既貴客とて益友とあふり
 昨夜の夢も何れと大死する大の志黒白雜毛るその數まで七頭
 わりの中も隠れていませぬわりの或の間遠く致し其もヨナリを其深く
 あらう愛と嗚とて呼ぶ程は一雉の巨犬まらる其これを擁抱くよら

大正... 卷五

角太郎

身も亦忽地（まもなく）大（おほ）小（こ）の（の）ぬとどしつ。愕然（おどろか）とて、覺（おぼ）て死（し）彼（かの）莊（ぢやう）周（しゆう）が蝴蝶（かたて）の夢（ゆめ）に
 似（に）く非（ひ）ざるのれれれが占（うら）まる（る）ことせざりし。今（いま）又（また）夢（ゆめ）の虚（うつろ）夢（ゆめ）なるを貴客（きやく）の犬飼（いぬかひ）氏（ぢ）ふ
 多く某（その）の亦（また）養家（やうか）と嗣（ついで）と大村（おほむら）氏（ぢ）と冒（をか）し。且（かつ）貴客（きやく）の言（こと）をばく異姓（いせい）の兄弟（けいだい）
 五（ご）六（ろく）人（にん）のりともいれぬ。因縁（いんえん）あふ似（に）たり願（ねが）ふ件（けん）の人々（ひと）の姓名（せいせい）或（ある）知（し）るま
 一（ひと）厭（いと）む。其（その）示（し）さる（る）とよ現（げん）八感（はつかん）とて己（おの）むを宜（よろ）し。大奇（おほき）夢（ゆめ）なる某（その）が義（ぎ）
 兄弟（けいだい）亦（また）大塚（おほづか）信（のぶ）乃（すなは）成（なり）孝（かう）犬川（いぬがわ）莊（ぢやう）助（すけ）義（ぎ）任（にん）大山（おほやま）道（みち）篤（あつ）忠（ちゆう）與（よ）大田（おほの）小（こ）文（ぶん）吾（われ）悻（せい）順（じゆん）
 犬江（いぬえ）親（おや）兵衛（べゑ）仁（に）某（その）と共（とも）六（む）名（な）の餘（あま）る（る）二（に）人（にん）のふ。一（ひと）遇（あ）ふとをゆゑるものと
 告（つ）ぐ不（ふ）敬（けい）篤（あつ）角太郎（かくたろう）の頼（たの）り小膝（こひざ）の進（しん）むを覺（おぼ）せ。原来（げんらい）比（ひ）皆（みな）是（これ）犬（いぬ）をりて氏（ぢ）とせり
 一（ひと）不（ふ）思（し）議（ぎ）さ。よあふまま。くは夢（ゆめ）の夢（ゆめ）なる。ゆゑ感悟（くわんご）せり。ゆゑ亦（また）由（よし）六（む）大士（だうし）の義（ぎ）
 兄弟（けいだい）とるりやる因縁（いんえん）の亦（また）いふ。と問（と）へ。現（げん）八（はつ）合（が）笑（わら）く。その義（ぎ）と止（と）む。小難（せうなん）くも
 わる細（こ）い。外（ほか）は憚（はげ）り。ゆれが只（ただ）今（いま）の時（とき）尚（なほ）早（はや）か。おのり。主人（しゆじん）の感（かん）得（とく）の瑞玉（ずいぎよ）とねる。

お名（な）の玉（たま）のあがり。礼（らい）の字（じ）の頭（かぶ）れ。て定（さだ）まる。のれ。る。お。と。同（どう）く。又（また）敬（けい）篤（あつ）
 角太郎（かくたろう）の眼（まなこ）を睜（あ）む。とをり。て。知（し）る。れ。ん。某（その）實（じつ）は。瑞玉（ずいぎよ）と。年（とし）来（きた）秘（ひ）藏（ざう）志（し）
 たり。とのひ。亦（また）嘆息（たんそく）とて。件（けん）の玉（たま）の。小就（せうじゆ）て。又（また）一（ひと）高（たか）談（だん）なる。ゆゑ。其（その）が。實（じつ）
 母（はは）の諱（なづな）と正香（せいかう）と呼（よ）ぶ。り。その性（せい）怜（れい）惻（せつ）中（ちゆう）。且（かつ）神佛（しんぶつ）を信（しん）む。る。と。大（おほ）々（々）の婦（めづ）女（によ）
 子（こ）は過（あ）り。わ。て。其（その）を。産（う）む。比（ひ）加（か）賀（が）る。白（しろ）山（やま）權（けん）現（げん）の社（しゃ）頭（かみ）の粒（つぶ）石（いし）を。乞（こ）む。り。て。
 その見（み）の護（ご）身（しん）囊（ぶくろ）小納置（せうなうち）と。い。痘瘡（とうそう）も。麻疹（ましん）も。究（きゆう）め。之（これ）。輕（かろ）し。と。あ。ふ。い。は。る。せ。
 皆（みな）て北國（きたくに）へ。ゆ。商旅（しやうり）小（こ）云（い）と。憑（よ）り。て。件（けん）の粒（つぶ）石（いし）を。取（と）り。よ。ふ。あ。の。の。と。来（きた）
 つ。と。い。れ。石（いし）の。あ。わ。と。と。れ。玉（たま）の。玉（たま）の。の。ひ。も。項（うで）小（こ）る。珠（たま）數（かず）を。捨（す）て。大（おほ）約（やく）此（こゝ）
 大小（おほい）之（これ）。礼（らい）の。字（じ）。と。頭（かぶ）れ。る。と。て。亦（また）人（ひと）も。知（し）る。と。初（はつ）て。敬（けい）篤（あつ）。か。り。ゆ。れ。ぬ。母（はは）の。珠（たま）
 尊（そん）信（しん）と。も。依（よ）り。其（その）が。護（ご）身（しん）囊（ぶくろ）。小納置（せうなうち）。と。い。は。り。て。其（その）三（さん）才（さい）の時（とき）脾（ひ）疝（ぜん）。小
 亦（また）危（あ）り。小（こ）鍼（しん）灸（しう）火（か）藥（やく）。餌（え）も。驗（けん）る。療（りやう）類（るい）を。術（じゆつ）竭（げつ）。る。折（お）り。母（はは）竊（せう）こ。と。

師とて件玉と水は浸し水と飲せし慈母の深信より瑞玉の奇
特やある頭をかん下かゆて食さぬ二三日と肉を増しそびよと本腹
せりこの二條の某が稍東西と知りし養父母の云々と説示され傳聞
れよの後某が身も恙あらず且其を用ひて件の玉の奇驗と特む即
功ありとていふに近屬養父母の病中も玉を浸せし靈水を多く飲
しとて只某が病に奇驗即功ありし親の驗するも又命
數有限りあるやさる奇特なるもの病苦の早に退たり入ふる今茲夏
初より某の妻と共に赤岩の親異母弟同居し在る日吾妻離衣の
腹痛猛小苦く百藥驗しゆれ某は浸し水と飲
せんとした折継母が先その玉をえとて離衣がたる茶碗を擲取んとせし
程に離衣慌忙を衝て水と共に件の玉を飲てはり何とせんとするも後

悔する離衣より母某が因草遺恨の壁も物もを然と吐きづるもの
淨もは赴く度毎に心とつけと誨し腹痛いや瘡れどもその日ゆえ次の日も亦
次の日も尿管と共に玉の下のるものゆれゆに捨て好むひ向むく五月の比より
離衣の經水も腹の漸々ゆめゆめ有身するの似たりこれより醫師も
その病症のより同し寸口の脈平増し指頭の動脈強れまば全く懐胎ある
とのりとも恥れども其の三年以来養父母の病中より妻と枕を並し
況この春の末より養父の心中にゆめと夫婦臥房を俱まは然と今離衣が
懐胎のよろゆるといひ言葉は枝のまをゆか密夫の胤をんは向容々々と
きて産するやとのりのゆれゆちも置れむと不便ゆえとも離衣を離別と媒約
許預け置たりさゆりゆり其の背養子ゆく離衣の廻養父母の女兒且赤
岩へ同居の折大村身宅へ住し叔婢を暇を取らり裕といひ恰といひや

此の行心のりとも去るは死妻のあつむ素より女性貞順を外心のまはりの某これを
 知るといふも離別して必せん舊の居室に住せん為明々地まひひ死情由さ
 わりよとてふかき某命薄く仙たよりよく愛を父失ひつ年歴を親呼之
 されとの後びの空とまりて亦復同居を許されどこの身の路頭を呻吟ふとも大村
 る田園の雛衣が生涯を送らん料まふをそれを親の返さぬ義理の
 妻と世を遊りて養父へ以解く辨ゆゆせん世を捨て法師まふ吾
 妹子が怨も散れ今も親のどひ久きをゆふゆのゆせんと果敢るも神は佛願
 言とけ盡し一日毎の戒行初対面より懺悔話説の恥を知らるのれは似れ
 と郷向雛衣が才くいのつこと貴客のむせぬひけんかふ又今ゆる隠れんと
 ともその甲斐る一人はのぬとも告る則良友をゆる歡びのぬりまを
 鳥許ととられる教と他事ゆも耳に示す心の誠を現はとすく毎々憂

苦さたと慰めくも感嘆の外ありしとやなくも頭を擡ては涙増せ
 貴所の孝友天感空しくゆりせの夫婦の再會期しく俟べ然る早
 やく只音は法師まふんとどひゆ亦是千慮の一失るべ実推量
 せらる如く郷向賢室雛衣とのいれりゆの洩ゆり且その氣をさそめ
 通りく漏さよりまふ死と樂むの婦人の情之萬一のゆあると死の後悔をの
 甲斐るる後へとどひゆければ後と跟くを届むと西二歩走りまふんと
 ける折忽地主人が呼留れてその義と果さむとさふらふ命も婦人よ不
 義る死を知らるその死を拯んとどひゆのつるゆりの主人に似げ竟所ある
 也と詰れば莞尔と微笑てその疑ひの理りされども緋雛衣が底意を
 知る死んと欲まるとも瑞王今も月腹に在る水も入るとも漏れく火も
 入るとも焼るるとも憶ゆる渠が腹の病病の彼瑞王の所以と懐胎ゆ

況て五人張といふものもあやむ。且軍記に誌す所の強弓の武者に於て貴人の弓と
 のいふものも主人の二代の学者あり。且武藝の長なるはこれらのは考むれば件の
 説のいふものと同一と角太郎らば二階松先生の武藝の父もよく知りていふ
 嘆賞せしむれば彼先生も考の定むるを其まじき考ゆるふわねだ彼二
 人あり張といふ臆説の貴評の如く論ずるも足らぬの按する軍記に三人張
 五人張の弓といふ所の猶唐山之石の弓五石の弓といふごとく弓の力と量ら
 為らうの真中よまをさつてこれを梁るまじき吊りての本末よ米苞と拭てを
 強弓よあられの重きまじき勝るこゝろの義と彼の書に記せる書言故事を
 不学類の條もあもえこれと夢溪筆談の辨證の扁も載せし所と詳を
 まじき書に沈存中が云ふと弩と挽蹶は古人釣石を以てこれを率も今人の
 乃稗米一斛の重を以て一石といふ凡石者九十二斤半を以て法とを乃漢秤二百四十一

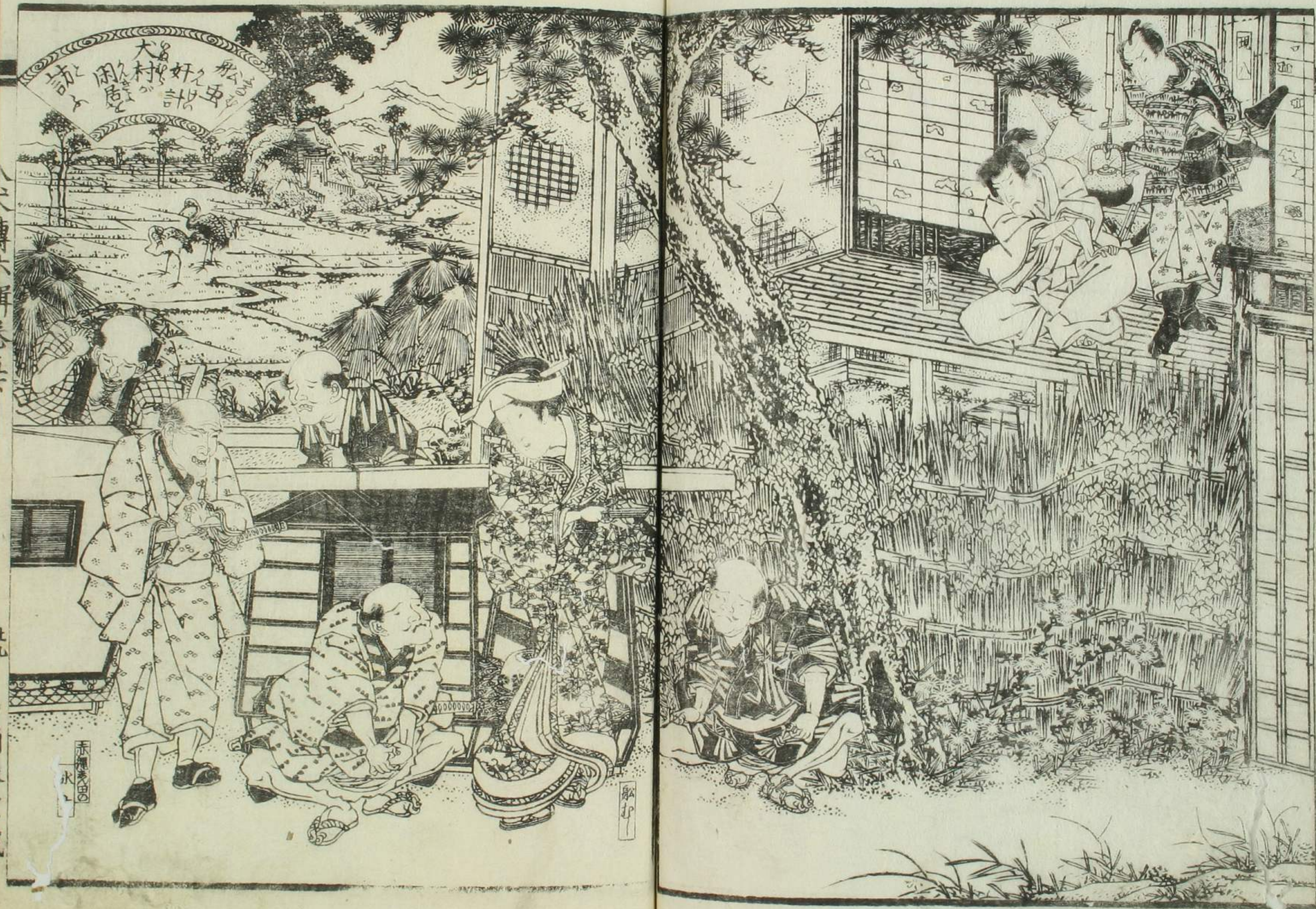
斤也。今之武卒の弩と蹶は九石。及今者あり其力を計るとは乃古之十五石
 あり。魏之武卒は比むる人ども二人有餘。當れ又三石の弓と挽者有り。乃
 古之二十四鈞あり。顔高之弓は比むる人ども五人有餘。當るとり又按する
 石の重百二十斤と國語の注はをえり。これ漢の秤の分量は後人一斛とて二石
 とのいふは漢の時より如此なり。漢の百廿斤の宋の秤も三十二斤は當り。漢の一斛は
 宋の二斗七升なり。沈存中より又荀子は十二石の弓の力をえり。又齊宣王
 好く二石の弓と射を九石とまじき実も二石の九石あり。唐の山也弓は二石といふ。乃邦
 雍塞編并は續博物志も見えり。かれは唐山也弓は二石といふ。乃邦
 也。三人張といふものも一斛の米の重とて一人力と。二人力と。三
 石といふ由てもあり。三人張といふ所の三石の米を拭る強弓あり。疑ひる。又十
 三束二伏といふ所の昔の長大なるものも一束を五寸と。今の通尺とゆへ

丈二尺九寸の實の二寸之所云十三束と六尺五寸の征前めく實を二尺九寸する
 べ又二伏の二節也伏の假字その箭竹の節延々僅に二節の節なり
 武器の長短を幾束といふのは天朝の古実十束の御劍の長十握のを
 知るべの近世兵学者流の書言ひ取るに足らざる臆説より由來のる
 るふをとうち含笑々答れ現ハるる感服と昔の人もかくそひけり君と
 夜の物語の十年の学は勝る教諭より年来の疑念立地は永解
 せり序の字問せまほし又劍の巻は源氏重代の大刀の巻と蛇の鳴
 が如しよりその大刀の名を吼九とつけられその人愈知まり刀劍も亦声の
 ぞくぞく吼るこれありやといふ角太郎又答て刀劍も亦吼るて西陽雜
 俎の境異篇は鄭雲少少一時一劍と得たり鱗鉄星鐔時有て吼も
 常に莊居に在り暗る日あり膝と藉くこれを玩ぶは忽地一人有る云云と
 え又後燕の元年晋の太小雄劍の鳴る所見ありと説示現ハ
 る盛衰記已下の軍書亦大逆謀叛の徒と朝敵と誌しるを
 義の穩るやといふ角太郎領をそよく心づかひ凡國家の臣民たる
 のれ大逆の罪あるは是則國賊之唐山史傳にこれを賊と書しり
 然る朝敵といふ可るる卒敵の字書は音狄俗字に敵敵の小兒の喜
 びく笑ふ貌と注しり又彼國の俗語敵手といふ此土あり相とといふ
 ト甲乙と争ふの送よこれを敵といふ大逆の罪人を朝敵といふ朝廷の敵
 といふは同ト記者の文盲笑ふ憶字清盛頼朝より尊氏將軍に至
 るまは朝家と蔑くと自家を營む兵權を擅めて宇内を制しひり
 順逆の理は暗死の多唱初るやゆら記者の當時は媚て化せ俗
 稱するものと現はれ其もささひり又戰陣は夜討まは進退の

丈二尺九寸の實の二寸之所云十三束と六尺五寸の征前めく實を二尺九寸する
 べ又二伏の二節也伏の假字その箭竹の節延々僅に二節の節なり
 武器の長短を幾束といふのは天朝の古実十束の御劍の長十握のを
 知るべの近世兵学者流の書言ひ取るに足らざる臆説より由來のる
 るふをとうち含笑々答れ現ハるる感服と昔の人もかくそひけり君と
 夜の物語の十年の学は勝る教諭より年来の疑念立地は永解
 せり序の字問せまほし又劍の巻は源氏重代の大刀の巻と蛇の鳴
 が如しよりその大刀の名を吼九とつけられその人愈知まり刀劍も亦声の
 ぞくぞく吼るこれありやといふ角太郎又答て刀劍も亦吼るて西陽雜
 俎の境異篇は鄭雲少少一時一劍と得たり鱗鉄星鐔時有て吼も
 常に莊居に在り暗る日あり膝と藉くこれを玩ぶは忽地一人有る云云と
 え又後燕の元年晋の太小雄劍の鳴る所見ありと説示現ハ
 る盛衰記已下の軍書亦大逆謀叛の徒と朝敵と誌しるを
 義の穩るやといふ角太郎領をそよく心づかひ凡國家の臣民たる
 のれ大逆の罪あるは是則國賊之唐山史傳にこれを賊と書しり
 然る朝敵といふ可るる卒敵の字書は音狄俗字に敵敵の小兒の喜
 びく笑ふ貌と注しり又彼國の俗語敵手といふ此土あり相とといふ
 ト甲乙と争ふの送よこれを敵といふ大逆の罪人を朝敵といふ朝廷の敵
 といふは同ト記者の文盲笑ふ憶字清盛頼朝より尊氏將軍に至
 るまは朝家と蔑くと自家を營む兵權を擅めて宇内を制しひり
 順逆の理は暗死の多唱初るやゆら記者の當時は媚て化せ俗
 稱するものと現はれ其もささひり又戰陣は夜討まは進退の

笛と呼子と唱へ四の大事を報る使と早打といふの近死世よりの俗言なり。
 これと漢文を写さるは何と書て當んやと問ふは角太郎沈吟しく呼子の笛の
 叫子と書べし。入早拍の羽檄を急脚遞と書てをられ并小宋の沈存
 中が筆談に二る流官政權智の西編をんめりて答る小現八とまじく感
 づくは一條嗚呼るは回事のいより近死世の浄瑠璃本及歌儂伎狂
 言は親子は認めらむと疑ひと決まるよその子の腕を劈れ親の血と合
 へる小実の親子ハ鮮血滲を親子るなむその血よふむ或はその親の死後小
 手く白骨髑髏小血を瀝るもその験のまじり婦幼もよく知りてこそ
 けれどもこの本つ所定ぬらむ何ホの書より出るあや素より不經の俗説
 欽主人の考すまはしと問ふ角太郎ら咲ての義も亦管見あり梁書五十五の
 列傳豫章王綜が傳に綜が母呉淑媛ハ初齊の東昏の宮中ニ在りて

時より梁の高祖は幸ひせられて七月中に綜を産ゆ死すをりて宮中にて
 疑ふのありけり。その後淑媛ハ寵衰へりて高祖を怨りて竊はその子綜ハ
 告ぐ。んは是東昏君の送腹るんといひて綜ハ半信半疑して共高祖を
 怨む。潜ひて曲阿に赴て齊の明帝の陵を拜するごせり。是東昏の胤
 るを定り知るよりあるは當初の俗説は生者の血を以死者の骨を瀝は
 滲れハ父子といふものあるをちばく綜ハ竊ハ東昏の墓を掘死骨を出一已
 臂の血を以瀝けこれを試と又一男を殺しその血を瀝て試をり并は驗
 あり。は目より常は異志を懷て後四年ハ謀叛をこ五十五卷の初
 丁はをり又唐書五十九の孝友列傳する王少玄が傳に云王少玄ハ博州の
 聊城の人なりけり。その父の隋の世の末に乱軍の中ニ殺されり少玄甫十歳の
 時父の所在を母に問ふ母云云と答る哀泣く彼此とをの尸を求る野中



白骨多くあり時ある人教くいさう子の血を以骨を漬で透るのれい父の齒心
といさ少玄悦びく野中の白骨をさる毎は膚を鏡く血を瀝ぐと凡一句
ありより遂父の骨をぬくといのまふ事せけりゆてその創の甚一あり
つとを餘ゆく瘡けり時小唐の太宗の貞觀年中州よりその状を言
上りふまぐ徐王府の參軍とい官人より言さるる言合本の四十一の十二丁の
右のふえり。されがこの唐山の俗説は物とひととも梁唐の時このあり且
當時の史官麻止とてその經驗を書せし言ふありあり是亦
秘藏の説る所をあらぐり人の惜れども貴客の為譚するの事同や母は
古書を引く證文疑ふてもあらは現八類の感嘆く忘仁以来京
師より和漢の書借亡失せし四書言は全きをのり稀るりこれ
學問の地を拂く五山の僧徒るとの外は漢籍を讀むのらるは主人の

船虫が
この地
船は
一角
未歴
第七
小至
一

今尚青年あり博學宏才の如しと憑くゆと指次と述くことあり
しと用太郎のやめを貴客の賞美の分は過り言又言の徳の害なりと
王通ものひあり世の博物は皆さる痛いと笑え他聞の用捨れ
か。と互に讓る辞義口誼笑坪の會は餘念る時殺るまで相譚折
り外面はある人居り女装轎子一挺と又一挺の十字竹輿と折戸は
扛卸せし先は建る轎子の戸を閉せし物との是則別人を赤岩一角
武遠が賤配の身船虫に捐箔する衣の下は白小袖をうち龍裝は金
襴の帶四下は光輝た練の帽子の白妙は扇翳くく立あり呼門せし鷹
揚の腮推向く示せし箇の後者があるゆて折戸を類りは敵死けり
畢竟船虫の事又甚麻る話説りあるを第七輯は解分るをぞ知らん
里見八犬傳第六輯卷之五下終

○著作堂子稿南總里見八犬傳第六輯書畫刷人目次

畫工

自卷之一至卷四
之半但簡端分筆

柳川重信



自卷四末至卷五
上下并簡端合筆

溪齋英泉



淨書

卷一二五之下
卷三四五并序文

田中正造

割刷 全卷 繡像

朝倉伊八郎

家傳神女湯

一包百銅

熊膽黑九子

一包代五分

精製奇應丸

大包代貳米 中包代壹五下
小包代五下 亦た壹貳米

婦人花泥むしぬ茶 一包代平兩 壹三格武刑

産茶を産後まじりのみちの即功なり并婦人の諸病
つらみぬるやく或は腹痛やまひを治すはむ妙
茶程とえぬ製方家傳のわけんを以てこの多ふ
その功百といふもいさの拍子應むる如く神妙なり
右の製茶茶をて利のふの弘くまじりて近年茶程多
本家製茶 江上神田明神下同朋町東横町
賣弘所 同家元飯田町中坂下南側四方の向
○取次所 江戸芝浦村の丁 大坂心齋橋筋の丁 河内府太

○法茶なるの仙女香一包四十八文○黒油美玄香同江戸橋南筋新坂本氏

○金匱救命丸江戸林氏製江戸大傳馬町二丁目弘所江戸大傳馬町二丁目弘所

天保十二年辛丑春正月吉日發行

發行 書行

京都 河内屋藤四郎

同 大文字屋仙藏

大阪 河内屋太助

同 河内屋直助

同 河内屋茂兵衛

江戸大傳馬町二丁目 丁子屋平兵衛板

